

性を減じるものは、たゞこれ一つだけなのだ。實際、我々は戦争を弄んで来た——これがいけないのだ。我々は寛大ぶつたりなんかして来た。この寛大ぶりや感傷癖は、憤の殺されるのを見て氣分の悪くなる奥さん達の、寛大ぶりや感傷癖と似たり寄つたりだ。奥さん達は血を見ることも出来ないほどお心が優しい癖に、ソースをかけたなら、この憤をおいしく召し上るんだからね。我々も戦争の規約だとか、騎士道だとか、軍使規約だとか、不幸な者を慰めとか、いろいろな講釋を聞かされてゐる。しかし、そんなことは皆下らない話だ。僕は千八百五年にその騎士道や軍使規定を見たが、つまり騙したり騙されたりしただけさ。他人の家を掠奪したり、贋造紙幣を發行したり、もつともつと酷いことには、我々の子供や父親を殺したりして置きながら、戦争の規約だの、敵に對する寛大だのを云々してゐる。捕虜にしないで殺して了ふんだ、そして自分も死に向つて突進するんだ！ 僕みたいにも、同じ苦しみ^に依つてかう云ふ考へに到達した者は……」

スモレンスクと同じやうに、莫斯科を敵に取られようと取られまいと、自分の知つたことぢやないと考へてゐたアンドレイ公爵も、いま突然痙攣に喉をしめ付けられるやうな氣がして、急に言葉半ばで口を噤んだ。彼は無言のまま、幾度か納屋の前を彼方此方してゐたが、やがて熱病やみのやうに眼を輝かし唇を慄はせながら、また口を切つた。

『もし戦争に寛大ぶりがなかつたら、我々は今度のやうに、死を賭しても戦ふ價值がある場合

以外には、戦争に出るやうなことがなくなるだらう。さうすればバーゼル・イワーヌイチがミハイル・イワーヌイチを侮辱したからと言つて、戦争が始まるやうなことはなくなるだらう。が、もし今度のやうな戦争なら、それこそ本當の戦争だ。さうすれば軍隊の力は、今とまるで違つて來るに相違ない。そして今ナポレオンの率ゐてゐるウェストフーリア人やヘッセン人が、佛蘭西軍について露西亞へ侵入することもあるまいし、我々も何のためやら有耶無耶で、埃太利や普魯西亞へ戦争に出かけることもなくなるだらう。戦争はお愛想ぢやなくて、人生に於ける最大な醜惡事だ。我々はこの點をよく理解して、戦争を弄ばないやうにしなきゃならん。我々は嚴密に眞面目に、この恐るべき必然を取り扱はなければならぬ。要するに、肝腎なのは虚偽を棄てることなんだ。戦争は矢張り戦争で、決して遊戯ぢやないからね。でなかつたら、戦争は無爲輕佻な連中の面白い樂しみになつて了ふ。そして軍人は最も尊敬すべき階級なんだ。

『一體戦争とは何だ？ 軍事上の成功に必要なのは何だ？ 軍人社會の精神とは如何なるものだらう？ 戦争の目的は殺人だ。戦争の道具は間諜、裏切とその獎勵、地方の荒廢、軍隊維持のために行はれる強奪竊盜、軍略と名づけられてゐる偽瞞と虚言だ。また軍人階級の精神とは自由の缺乏即ち軍規、懶惰、無智、殘忍、放埒、飲酒などだ。それにも拘らず、軍人は最高の階級としてすべての人に尊敬されてゐるのだからね。現に支那以外何處の皇帝も軍服を着てゐる。そし

て餘計に人を殺した者が、それだけ多くの賞を受けるのだからね。

『明日になつたら、人々は互に殺戮し合ふために集つて、幾萬といふ人間を塵にしたり、片輪にしたりする。さうしてその後で、よく澤山の人間を殺したと云つて（而もその數を一層誇張するのだ）、感謝の祈禱式を挙げ、殺した人數が多ければ多いだけ、勳功も大きいやうに心得て勝利を誇るのだからね。神様は天國からどんな氣持で彼等を見、彼等の祈りを聞いてゐられることだらう！』アンドレイ公爵は細い甲走つた聲でかう叫んだ。『ねえ、君、近頃僕はつくづく生きてゐるのが苦しくなつた。僕は餘り多くのものを理解するやうになつたんだね。自分でもそれが分るよ。人間は智恵の木の果を味ふもんぢやないね……だが、それも長いことぢやないんだ！』と彼は言ひ足した。

『だが、君もう寝るだらう。僕も寝る時刻だ。ゴールキへ行き給へ。』アンドレイ公爵は出し抜けにかう言つた。

『いや、どうして、寝たくはない！』ピエールは同情に充ちた、慄えたやうな眼で、アンドレイ公爵を見つめながらかう答へた。

『行き給へ、行き給へ、戦争の前にはよく寝て置かなくちやならないよ。』とアンドレイ公爵は繰り返した。

彼はつか／＼とピエールに近づくなり、友を抱いて接吻した。

『左様なら、行き給へ、』と彼は叫んだ。『また會へるにしても會へないにしても……』彼は急に踵を轉じて、納屋の中へ歩み去つた。

もう暗かつたので、アンドレイ公爵の表情が毒々しかつたか優しかつたか、ピエールはよく見分けることが出来なかつた。

ピエールはアンドレイ公爵について行つたものか、それとも家へ歸つたものかと、暫く無言に佇みながら考へてゐた。「いや、あの人にはもうそんな必要がないのだ！」とピエールは自分一人で決めて了つた。「それに二人が會ふのもこれでお了ひだ、それはちやんと分つてゐる。」彼は重重しく溜息をついて、ゴールキさして歸途についた。

アンドレイ公爵は納屋へ歸ると、絨氈の上へ横になつたが、しかし容易に眠れなかつた。

彼は眼をつぶつた。様々な映像が代る／＼現れては消えた。ふと彼はある一つの映像を、長い間悦ばしげに見守つてゐた。彼は彼得堡の或る一夜を、まざ／＼と思ひ浮べたのである。その時ナターシャは生き／＼と昂奮した顔附で、去年の夏茸狩に行つて、大きな森の中で路に迷つた話をした。彼女はつゞまりの無い調子で、森の淋しさや、自分の感じや、そこで出會つた蜂飼ひとの對話などを物語つた。そしてのべつ中途で話をやめながらかう言つた。『駄目、わたし出来ない

わ。わたしは何だか見當違ひな事ばかり言つてるわ。い、え、あなたお分りにならなくつてよ。』
そして幾らアンドレイ公爵が彼女を宥めようと思つて、あなたの言ひたいと思ふことはすつかり
分ると言つても、中々承知しなかつた（彼は實際よく分つたのである）。ナターシャは自分の言葉
に満足出来なかつた——彼女はその日経験した堪らないほど詩的な感覚を、すつかり外へさらけ
出したいと思つたが、それがどうしても巧く行かないやうに感じた。『それはね、ほんとにい、
お爺さんでしたわ。それに森の中は恐しく暗いでせう……そのお爺さんは何とも言へないほどい
い……いえ駄目、わたしとても話せないわ。』彼女は顔を赤らめて、わく／＼しながらかう言つ
た。今もアンドレイ公爵は、その時彼女の眼を見ながら浮べたと同じ、嬉しさうな微笑を浮べた
のである。「俺にはあれの心持がよく分つてゐた。」とアンドレイ公爵は考へた。「分つてゐたば
かりぢやない、あの魂の力、あの眞剣さ、あの開けつ放しの胸、肉體に結びつけられてゐるやう
なあの心、あの心を俺は戀したのだ……あんなに強く、あんなに幸福に戀したのだ……」突然彼
は自分の戀の結末を想ひ出した。「あの男はそんなものなぞまるで要りやしなかつたんだ。あの
男にはそんなものなぞ見えもしなければ、又わかりもしなかつたのだ。あの男はあれをたゞの可
愛い熱したての生娘としか見てゐなかつたんだ。そしてあれと運命を共にするの光榮を與へよう
ともしなかつたのだ。所が、俺は……あの男は今でも楽しく日を送つてゐるではないか。」

アンドレイ公爵はまるで誰かに火でも押しつけられたやうに、いきなりぱつと跳ね起きて、再
び納屋の前を歩き始めた。

二六

ボロヂノ役の前日、即ち八月二十五日に、佛蘭西皇帝の宮中取締モッシウ・ド・ポーセエとフ
ビエー大佐は、ブルーエブなる皇帝ナポレオンの行在所へ到着した。前者は巴里、後者はマドリ
ッドから來たのである。

ポーセエは宮中の制服に着換へると、皇帝に齎した贈物を先づ持つて行くやうに命じて置いて、
その後からナポレオンの天幕の控室へ入つて行つた。そして周りを取り圍むナポレオンの副官達
と話をしながら、箱の蓋を開きにかゝつた。

フビエーは天幕の中へ入らないで、入口に立ち止つて知り合の將軍達と話をしてゐた。

皇帝ナポレオンはまだ寢室から出ないで、いま漸く身仕舞を終へようとしてゐる所であつた。
彼は鼻や喉を鳴らしながら、肥つた背中や、毛むくぢやらな肪の多い胸を、交る／＼近侍の刷毛
の方へ向けて、自分の體を擦らせてゐた。今一人の近侍は指先で壘をつまみながら、何處にどのく
らる振りかければよいか、それを知つてゐるのは自分だけだ、と言つたやうな表情をして、皇帝

の磨き上げた體にオデコロンをふり掛けてゐた。ナポレオンの短い髪は濡れて、額の上に亂れてゐた。その顔はむくんで黄色かつたが、しかし生理的の満足感を感現してゐた。『Allez ferme, allez toujours (うんと……強く進め)』彼は體をすくめたり咳拂ひしたりしながら、刷毛を持つてゐる近侍に向つてかう言つた。昨日の戦闘で獲た捕虜の数を報告するために、皇帝の寢室へ入つて来た一人の副官は、上奏を了つた後も戸口にじつと立つたまゝ、退つてよいと云ふ許可が出るのを待つてゐた。ナポレオンは顔を擧めながら、額越しにじろりと副官を見やつた。

『Point de prisonniers (捕虜が)』と彼は副官の言葉を繰り返した。『Ils se font démolir. Tant pis pour l'armée russe (彼等は自分から撃殺してくれと、言はないばかりに仕向けて)』と彼は言つた。『うんとやれ、もつと強く。』彼は脂ぎつた兩肩をさし出しながら、背中を丸くしてかう言つた。

『C'est bien! Faites entrer m-r Beausset, ainsi que Fabvier (よろし。ボーセエを呼んで)』彼は顔をしゃやくつて副官にかう言つた。

『Oui, Sire.』副官は戸の外に姿を消した。

二人の近侍は急いで陛下に着換へをさせた。ナポレオンは青い近衛の軍服をつけ、しつかりした早い足取で謁見室へ出た。

此の時ボーセエは自分が持つて来た皇后の贈物を、皇帝の出口の真正面にある二脚の椅子の上

へ据ゑようとして、あたふた手を動かしてゐたが、皇帝が意外に早く着換へを終つて出て来たので、不意の贈物の準備が充分に出来なかつた。

ナポレオンは直ぐ彼等のしてゐることに氣附いて、まだ支度が出来てゐないかと察した。皇帝のために思ひがけない贈物を調へようと云ふ樂しみを、彼等から奪ひたくなかつたので、彼はわざとボーセエを見ない振をして、ファビエーを傍へ召し寄せた。そして歐羅巴の全く反対の一端サラマンカ(西班牙)で戦つてゐる軍隊——たゞく皇帝の名を辱めまいとそればかり思ひ煩ひ、どうかして皇帝の御意に逆らふまいと、その事ばかり只管恐れてゐる軍隊——の忠勇を説くファビエーの言葉を、嚴めしげに顔を擧めながら無言で聞いてゐた。戦争の結果は悲しむべきものであつた。ナポレオンはファビエーの話の間々に、どうせ自分があるなければ、そんなことだらうと思つてゐた、とでも言ふやうに皮肉な言葉を挟むのであつた。

『わしは莫斯科で、この取り返しをしなければならぬ。』とナポレオンは言つた。『A tantôt (ではまた)』と言ひ足して、丁度この時贈物の準備を終へたド・ボーセエを呼んだ。彼は椅子の上に何か載せて、その上へ布を被せたのである。

ド・ボーセエはブルボン家の老臣以外には眞似の出来ない、佛蘭西宮廷式の恭しい會釋をして、封筒を捧げながら近づいた。

ナポレオンは快活な態度でボーセエに向ひながら、ちよつとその耳を引つ張つた。

『大分急いだと見えるな、有難う。時に、巴里では何と言つてをる？』急に以前の嚴めしい顔付を、恐しく愛嬌のある表情に變へながら、彼はかう言つた。

『Sire, tout Paris regrette votre absence (陛下、巴里全市の者は陛下の御不在を悲しんで居ります。)]』ド・ボーセエは式の如くかう答へた。

ボーセエとしてはかう言ふか、或ひはこれに似寄りのことを言ふより外仕方がなかつた。それはナポレオンも承知してゐた。また意識の明瞭な瞬間には、そんな言葉がみんな嘘だといふ事も心得てゐた。しかしド・ボーセエの口からかう云ふ言葉を聞くのは、ナポレオンにとつて快いことであつた。彼はもう一度ボーセエの耳に觸る光榮を與へた。

『Je suis fâché de vous avoir fait faire tant de chemin (こんな遠い旅をさせつ)』とナポレオンは言つた。

『陛下！ わたくしは少くとも莫斯科の城門で、陛下に拜謁致すことと想像して居りました。』とボーセエは言つた。

ナポレオンは莞爾とした。それからそはくと頭を上げて、右の方へ視線を向けた。と、一人の副官が金の嗅ぎ烟草入を持つて、するくと迂るやうに近付きながら御前に捧げた。ナポレオ

ンはそれを取つた。

『だが、お前にとつては良い機會だつた。』烟草入を開けて鼻へ持つて行きながら、彼はかう言つた。『お前は旅行好きだからな。三日も経つたら莫斯科が見られるよ。お前もまさか亞細亞の都が見られようとは思はなかつたらうな。お前も今度は面白い旅行が出来る譯だ。』

ボーセエは(この時まで自分でさへ知らなかつた)自分の旅行趣味に、皇帝が注意を拂はれたのを感じするやうに、また一つ頭を下けた。

『あゝ！ これは何だ？』廷臣一同が何かしら布の被さつてゐる物を、一心に眺めてゐるのに氣が附いて、ナポレオンはかう言つた。

ボーセエは宮内官獨特の器用な態度で、背中を見せないやうに半ば身を振ぢて、二足ばかり退くと、同時に布を撥ねのけて披露した。

『皇后さまより陛下へのお贈物でございます。』

それはゼラールが色鮮かに描いた男の子の肖像であつた。ナポレオンと奧太利王女の間でできた子供で、なぜか羅馬王と呼ばれてゐた。

畫面はシスチン聖母像の基督のやうな眼をした、極めて美しい房毛の男の子が、抛球戲をしてゐるところを描いたものであつた。球は地球を現し、今一方の手に持つた棒は笏を象どつてゐた。

棒で地球をついてゐる所謂羅馬王の姿を描いた畫家の意が、果して奈邊にあるかと云ふことは、充分明瞭でなかつたけれど、しかし巴里でこの繪を見たすべての人と同じく、ナポレオンにもこの寓意がはつきり分つたやうな氣がしたので、彼はすつかり氣に入つて了つた。

『Roi de Rome (羅馬王)』莊重な手附で肖像を指しながら、彼はかう言つた。『Admirable (立派)』いつでも自由に表情を變へ得る、伊太利人特有の才能をもつたナポレオンは、肖像に近づきながら沈んだ優しい色を顔に現した。彼は今自分の言つたりしたりする事は、直ちに歴史その物であると感じた。今自分がなし得る最善のことは、外でもない、皇子すら地球で抛球戲ピルボウをする迄にした偉大なる自分が、この偉大さに正反對の最も平凡な父らしい情愛を現すことだ、とかう云ふ風に感じたのである。彼の兩眼は曇つて來た。彼は前へ進み寄つて椅子を振り返つた(椅子は瞬く間に彼の傍へ運ばれた)。彼は肖像に對して腰を下した。彼が一寸合圖をみると、一同はこの偉人を彼自身と、その感情のまゝに任せるため、爪先立ちで退出したのである。

彼は暫く腰掛けてゐるが、自分でも何のためか分らずに、ざら／＼した肖像の光部ライツに一寸手を觸れると、やをら立ち上つて、再びボーセエと當番將官を呼んだ。彼は肖像を天幕の前へ出して、その附近に屯してゐる舊近衛師團に、彼等の尊崇する皇帝の愛子にして且つ世子なる、羅馬王を拜するの幸福を與へるやうに命令した。

陪食の榮を得たボーセエと一緒に、ナポレオンが朝餉をした、めてゐる時、果して彼の豫期した通り、肖像さして駈け集つた舊近衛師團の將校や兵士らの、感激したやうな叫び聲が天幕の前で聞えた。

『Vive l'Empereur ! Vive le Roi de Rome ! Vive l'Empereur ! (皇帝萬歲！羅馬王！)』と云ふ歡呼の聲が響き渡つた。

朝餉が済むと、ナポレオンはボーセエのゐる所で、軍隊に與へる勅令を口授した。

『Courte et énergique (簡潔で雄勁だ)』少しの訂正もなく、即座に書かれた勅諭を自ら讀み返して、ナポレオンはかう言つた。勅令にはかう書いてあつた。

『戰士等よ！ 汝等が待ちに待ちたる決戦は來れり。勝敗の決は一に汝等の努力如何にあり。勝利は我軍に必須なり。そは汝等に一切の必需品と至便なる宿舍を與へ、かつ汝等の歸國を速かならしむべし。須らくアウステルリッツ、フリードランド、ギターブスク、及びスモレンスクに於けるが如く善戰し、子孫をして誇をもつて今日の勳功を想起せしむべし。而して汝等の名を口にするに際し、「彼は莫斯科の大戦に参加せり」と言はしむべし！』

『De la Moskova !』ナポレオンはかう繰り返した。それから旅行好きのボーセエを散歩に誘つて、鞍を置いた馬をさして天幕の外へ出た。

『Votre Majesté a trop de bonté (陛下、それでは餘り恐れ多きござります。)] 皇帝から隨行の勧めを聞いて、ボーセエはかう言つた。彼は眠くもあつたし、それに乗馬が下手なので怖くもあつたのである。

けれどナポレオンがこの「旅行家」を願でさし招いたので、ボーセエはどうしても出掛けなければならなかつた。ナポレオンが天幕から出た時、皇子の肖像の前に集つた近衛兵の叫び聲は、いよく盛んになつて來た。ナポレオンは眉を擡めた。

『もう下すがよい。』彼は優美莊重な手附で、肖像を指さしながらかう言つた。『あの子に戰場を見せるのはまだ早い。』

ボーセエは眼を閉ぢ頭を垂れて、深い溜息をついた。彼は皇帝の言葉を理解しかつ尊重すると云ふ心持を、この身振によつて示したのである。

二七

傳記者の言葉によれば、ナポレオンはこの八月二十五日の日、地勢を視察したり、元帥達の提出する様々な作戰計畫を批評したり、將軍達に親しく命令を與へたりしながら、終日馬上で過したのである。

コローチヤ河に沿うて配備された、露西亞軍最初の戦線は突破せられた。そしてこの戦線の一

部分すなはち露西亞軍の左翼は、二十四日にシヰールヂノ方形堡が占領された結果、後方へ移されて了つた。この戦線の一部分はもう河で防禦されないで、比較的廣々した平坦な場所を前に控へる事となつた。佛蘭西軍がこの部分を攻撃するに相違ないと云ふことは、軍人であるとないとに拘らず、すべての人に明々白々な事實であつた。それには敢て複雑な考量も要らなければ、皇帝や元帥などの周到な配慮も要らないし、殊に人々が好んでナポレオンに歸したが、天才と云ふ特殊な優れた才能など、無論必要が無さうに感じられた。しかし後世この事件を記述した歴史家や、當時ナポレオンを取り圍んでゐた人々や、それからナポレオン自身なども、全く別な考へを抱いてゐたのである。

ナポレオンは戰場を巡廻して、考へ深さうに地形に見入つたり、自分で自分に賛成するやうに(もしくは否定するやうに)頭を振つたりしながら、周圍を取り巻いてゐる將軍達に、決心の導線となつた深い思索の徑路を話さないで、たゞ最後の結論だけ命令の形で彼等に傳へた。エクミユール侯と呼ばれてゐるダヴーが建言した、露西亞軍の左翼を迂回したらどうかといふ説を聞いても、ナポレオンはそんな事をする必要はないと言つたばかりで、なぜその必要がないのか説明しなかつた。突角堡を攻撃する手筈になつてゐたコムバン將軍が、配下の師團の森林通過の議を申し出たとき、エルヒンゲン侯と呼ばれてゐるネイが、森林通過の危険を説き、師團を潰崩さす

虞れがあると反対したにも拘らず、ナポレオンはコムバン説に同意した。

シェヴールヂノの方形堡前面の地勢を視察した後、ナポレオンはしばらく無言で考へてゐたが、やがて幾つかの地點を指定して、露西亞の堡壘に對抗するため、明日までに二箇の砲兵陣地をそこへ設けるやうに命じた。それから又別な幾つかの地點には、砲兵陣地と並んで野砲陣地を作れと命令した。

この外まだ様々な命令を發したのち、彼は自分の本營へ歸つた。そして彼の口授によつて作戰命令が書き上げられた。

佛蘭西史家が嘆賞して止まず、各國史家が深甚な敬意を拂つてゐるこの作戰命令は、次のやうなものであつた。

『エクミュール公の陣せる平原に、夜中配備せられたる二個の新砲陣は、對峙せる二個の敵砲兵陣地に向ひて黎明と共に砲火を開くべし。』

『この時第一軍團砲兵司令官ベルネッチ將軍は、コムバン師團の火炮三十門、並びにデッサー師團、フリアン師團の榴彈砲全部を率ゐて前進開戦し、敵の砲兵陣地に榴散彈を雨注すべし。敵の砲兵陣地を攻撃すべき火炮は左の如し。』

近衛砲兵隊所屬二十四門

コムバン師團所屬三十門

フリアン及びデッサー師團所屬八門

總計：六十二門

『第三軍團砲兵司令官フーシェ將軍は、第三及び第八軍團の榴彈砲全部、總計十六門を砲兵陣地の兩翼に配置すべし。該陣地は凡そ四十門の砲を有する、敵の左翼堡壘を砲撃すべきものなり。』

『ソルビエ將軍は命令一下と共に、近衛砲兵隊の榴彈砲全部を以て、何等かの敵砲壘を攻撃し得るやう準備すべし。』

『砲撃中ボニャトーフスキイ公爵は村落の森林に向ひ、敵陣地を迂回すべし。』

『コムバン將軍は森林を通過して、敵の第一堡壘を占領すべし。』

『かくの如くして戦闘開始後、敵の行動に應じ臨機命令を發すべし。』

『左翼に於ける砲撃は、右翼の砲撃を聞くと同時に開始するものとす。モラン及び副王の師團は、右翼の突撃開始を見ると同時に、猛烈なる砲火を開くべし。』

『副王は村落(ボロ)を占領し、モラン及びゼラールの師團と同一進路を保ちて、各々三つの橋梁を渡るべし。而して該兩師團は副王指揮の下に方形堡に向ひ、他の諸軍と同一線内に入るべし。』

『以上一切の行動は、能ふ限り豫備軍の保留に努めつ、秩序整然と行ふべきものなり。』

『モジャイスク附近大本營に於て、千八百十二年九月六日。』

極めて曖昧で混沌たる書方をしたこの作戰命令は、ナポレオンの天才に對する迷信的畏怖の念を棄て、觀察すると、四つの點すなはち四つの指令に分つことが出来る。しかもその中どれ一つとして實現し得るものもなければ、事實また實現されもしなかつた。

作戰命令の中には、第一ナポレオンの指定した場處に配置された大砲と、それに並列すべきベルネッチ及びブーシエの砲、合せて總數百二門が砲火を開いて、露西亞の突角堡と方形堡に砲彈を雨注するやうに云つてあるが、しかしこれは不可能な事であつた。なぜと言へば、ナポレオンが指定した場所から露西亞の陣地までは、砲彈が達しなかつたので、近くにいる一人の指揮官が、ナポレオンの命令に反して前進させるまで、この百二門の砲は無益に彈丸を發射してゐたからである。

第二は村落の森林に向ひつつ、露西亞軍の左翼を迂回せよといふ、ボニャトーフスキイに對する命令であつた。しかしこの命令は實行し得べきものでもなければ、事實また實行もされなかつた。なぜと言つて、ボニャトーフスキイは村の森林に向ふ途中、トゥッコフのために進路を遮斷されたので、露西亞の陣地を迂回すると云ふことは不可能でもあつたし、また實現されもしなかつたからである。

コムバン將軍は森林を通過して、第一の堡壘を占領すべし、と云ふのが第三の指令であつた。けれどコムバン師團は第一の堡壘を占領しなかつたばかりか、却つて撃退されて了つた。なぜと言へば、彼は森林を出るや否や敵の榴彈を浴びながら、隊形を整へなければならなかつたからである。それをナポレオンは知らなかつた。

第四として、副王は村落(ボロヂノ)を占領し、モラン及びフリヤンの師團(これ等の師團は何時どこへ進めとも指定されてなかつた)と同一進路を保ちて各々三つの橋梁を渡るべし、而して該兩師團は更に副王指揮の下に方形堡に向ひ、他の諸軍と同一線内に入るべしと云ふのである。

この不得要領な文句は別として、副王が與へられた命令の實行に致した努力によつて、出来るだけの解釋を試みると、彼は左方からボロヂノを通過して、方形堡に向ふべき筈であつたし、モランとフリヤンの師團は正面から、同時に進出しなければならなかつたのである。

これ等はすべて作戰命令の他の諸點と同じく實行もされなかつたし、また實行され得る筈もなかつた。副王はボロヂノ通過後コローチャ河で撃退されて、それ以上前進することが出来なかつた。モランとフリヤンの兩師團も方形堡を占領しなかつたばかりか、却つて敵のために撃退されて、方形堡は戰の終る頃騎兵に占領された(これはナポレオンにとつて豫想外な、前代未聞の出來事であつたらう)。かう云ふ譯で作戰命令中いかなる命令も、一つとして實行されなかつたし、

また實行されるべき筈もなかつた。しかし作戰命令には、斯くして戦闘開始後敵の行動に應じ、臨機命令を發すべしとあるから、戦闘中ナポレオンはあらゆる必要な命令を發したやうにも思はれるが、事實さう云ふことも無かつたし、またあり得べき事でもなかつた。なぜと言へば、ナポレオンは戦闘中常に戦場から遠く離れてゐたので、戦闘の経過プロセスを知ることが出来なかつた（これは後に分つたことである）。それ故、戦闘中に發した彼の命令は、一つとして實行され得なかつた譯である。

二八

多くの史家はかう言つてゐる——ボロヂノの戦役が佛蘭西軍の勝利とならなかつたのは、ナポレオンが鼻加答兒に罹つてゐたため、もしこの鼻加答兒がなかつたら、彼は戦闘前にも戦闘中にも一層卓越した命令を發して、その結果露西亞もとくに滅亡し、*et la face du monde eut été changée*（世界地圖も變更されたに相違なし。）實際、露西亞の建國はたゞ一個の人物——ピョートル大帝の意思によるものであり、佛蘭西が共和國から帝國となつたのも、佛蘭西軍が露西亞へ侵入したのも、たゞ一個の人物——ナポレオンの意思によるものである、とかう云ふ事を認める歴史家にとつては、露西亞が依然として強大を保ち得たのは、ナポレオンが二十六日に烈しい鼻加答兒に罹つたためだ、

と云つたやうな種類の斷定も必然的な避け難いものであらう。

もしボロヂノ役を開始すると否とが、ナポレオンの意志次第で左右されたものとし、また彼の意志次第で様々な命令が自由になつたものとすれば、彼の意志の發現に影響した鼻加答兒が、露西亞の救ひの原因になり得たのは、極めて明白なことである。従つて二十四日の日、ナポレオンに防水靴を差し出すことを忘れた近侍が、露西亞の救主であつた事も當然な話である。かう云ふ思索の道を辿れば、上述の結論の正しさを疑ふことは出来ない。それは丁度ブルテールが、ブルトロメイの夜（一五七二年、佛蘭西加爾維尼の教派の大虐殺はれし夜）はカルル九世の胃病から生じたのだと、自分ながら何の意味やら分らないで、冗談半分に言つた結論の正しさと同じ事である。しかし露西亞の建國をピョートル大帝一個の意志に歸し、佛蘭西帝國の成立や露佛戰爭の開始を、ナポレオン一個の意志に歸することを許さない人々にとつては、かうした考へ方は不正確かつ不合理なばかりでなく、人生の本質に反したものとさへ思はれるのである。歴史的事件の原因となるものは何か、この疑問に對しては他に答がある。外でもない、世界的事件の進行は天から豫定せられ、事件に關與する人全體の意志の楔合に左右される、従つて事件の進行に對するナポレオン輩の影響は、たゞ外部的假想的なものに過ぎない、とかう云ふのである。

カルル九世が命じて決行させたブルトロメイの夜が、彼の意志によつて行はれたものでなく、

たゞ彼が命じたごとく思はれるに過ぎないと云ふ假定や、ボロヂノ原頭に於ける八萬の人間の争闘が、ナポレオンの意志によつて生じたものでなく（戦争の開始や進行に關して、彼が命令を發したにも拘らず）、たゞ彼が命じた如く思はれるに過ぎないと云ふ假定は、一見して如何にも異様に思はれるけれど、しかし人間の品位は、我々の中いかなる者もナポレオンなどに比べて、たとへ大きくないまでも、決して小さくないと云ふ事を、わたしに知らせてくれる。この人間の品位が、かう云ふ解釋の是認を命じるのである。その上史的研究も充分この假定を裏書してゐる。

ボロヂノ役に於てナポレオンは、誰一人射撃もしなければ、また誰一人殺しもしなかつた。さう云ふことをしたのはみな兵卒である。従つて彼は人を殺さなかつた譯である。

佛蘭西の兵卒がボロヂノの戦で互に殺し合つたのは、ナポレオンが命令したためでなく、自身自身の希望に従つたのである。軍全體——破れた服を身に纏ひ、行軍に疲れて饑ゑ切つた佛蘭西人や、伊太利人や、獨逸人や、波蘭人の群は、自分達の莫斯科に向ふ進路を遮つてゐる軍隊を見た時、*Le vin est tiré et il faut le boire*（酒が封を切られた以上、飲まない譯に行かない）と感じたのである。もし其の時ナポレオンが戦ふことを禁じたら、彼等はナポレオンを殺しても、露西亞と戦つたに相違ない。なぜならば、それは彼等にとつて避くべからざる事だつたからである。

不具になつたり死んだりする代りに、「あの人も莫斯科戦に参加した」と子孫に言はれるのを慰

藉とするやう、ナポレオンから説き諭された時、彼等は *Vive l'Empereur*（皇帝萬歲）と叫んだ。丁度

抛球戲の棒で地球を突いてゐる男の子の肖像を見た時 *Vive l'Empereur* と叫んだやうに、彼等はどんな無意味なことを言はれた時にも *Vive l'Empereur* と叫んだに相違ない。彼等は *Vive*

l'Empereur と叫んで、勝利者の食物と休息を莫斯科に求めるために戦ふよりほか、何とも仕様がなかつたのである。従つて彼等が同胞を殺したのは、ナポレオンの命令の結果とは言はれない。

戦の進行を指導した者も矢張りナポレオンではない。なぜと言つて、彼の作戰命令に擧げられた諸箇條は、一つとして實行されなかつたばかりか、戦闘最中にも、彼は自分の前面に行はれてゐる事を知らなかつたからである。従つて、これ等の人々がどんな風に殺し合つたかと云ふことも、ナポレオンの意志によらずして、彼には何の關はりもなく、全局に關與した數萬人の意志によつて行はれたものである。たゞナポレオンだけに、すべてが自分の意志で行はれたやうに思はれたに過ぎないのである。それ故、ナポレオンが鼻加答兒に罹つてゐたかどうかと云ふ問題は、一輻重輪卒の鼻加答兒問題以上に、歴史的興味を有してゐない。

殊にナポレオンの鼻加答兒が、從來のものに比べて不出来なこの作戰命令と、以前ほど立派でない戦闘中の命令の、原因であつたかのやうに言ふ歴史家の説が、全然正鵠を失してゐる所から見ても、八月二十六日の鼻加答兒は愈々もつて意味のない事になる。

この章に書き抜いた作戦命令は、以前の勝ち戦に用ひたすべての作戦命令に比べても、決して悪くないどころか、寧ろ優れてゐるからである。戦闘中に發せられたとか言ふ命令も、別に従前の指令より悪いと云ふ譯ではなく、何時もと同じやうなものであつた。しかしこれ等の作戦命令や指令が、以前より悪いやうに思はれるのは、ボロヂノ役がナポレオンに取つて最初の敗戦だつたからである。どんなに立派な深慮に富んだ作戦命令も、敗戦の場合には恐しく劣悪なものと思はれて、學識ある軍人はみな鹿爪らしい態度でそれを非難する。また最も劣悪な作戦命令や指令でも、戦勝の場合にはこの上なく立派なものと思はれて、眞面目な人達が數卷の書物を著して、其の劣悪な命令の價値を證明するのである。

アウステルリッツの戦にヴィローデルが作つた作戦命令は、この種の著述の完全な模範であつたが、人は矢張りそれを非難した。その完全と過度の精密を非難した。

ナポレオンはボロヂノの戦に於て、權力の代表者として自分の仕事を立派に遂行した。寧ろ以前の戦役より立派に遂行したからである。彼は戦争の進行を妨げるやうな事を少しもしなかつた。彼は最も賢明な意見を持って、狼狽もしなければ自家撞着もせず、驚きもしなければ戦場から逃走もせず、その偉大な能力と戦争の經驗を以て、假想的な指揮者と云ふ役目を、立派に落ち付いて實行したのである。

二九

注意に充ちた再度の戦線視察から歸ると、ナポレオンはかう言つた。

『將棊は並べられた、明日はいよく勝負が始まるのだ。』

彼はブンシュを命じてボーセエを呼び寄せ、巴里のことや *maison de l'imperatrice* (皇后) 内に行はうと思つてゐる二三の改革について會話を交へ、宮廷内の些事に關する正確な記憶で宮中取締を驚かした。

ナポレオンは些末な事物に興味を寄せたり、ボーセエの旅行趣味を擲論したり、無造作な調子で無駄口を利いたりした。それは患者が手術臺に縛りつけられてゐる間に、名高い自信のある上手な外科醫が、袖をたくし上げたり胸當を着けたりしながら、「何もかもわたしの手と頭にあるのだ。萬事明瞭に決つてゐる。いよく仕事にかゝるとなつたら、誰一人眞似の出来ないやうにして見せる。が、今のうちは冗談でも言ふ事が出来るんだ。わたしが冗談口を利いて落ち着き拂つてゐるほど、お前さん達はますます信頼し安心して、わたしの腕前に驚嘆すべきなのだ。」と云ひたけな態度を示すのに似通つてゐた。二杯目のブンシュを飲み干してから、ナポレオンは明日に迫つた大決戦（彼にはさう思はれた）の前に一休みしようと思つて、自分の寢室へ入つた。

彼は目前に迫つた事件が氣になつてならないので、どうしても寝つくことが出来なかつた。到頭夜中の三時頃、夜の濕氣で鼻加答兒が烈しくなつたにも拘らず、大きな音で鼻をかみながら、天幕の中の廣間へ出た。露西亞軍が退却しなかつたかと云ふ彼の問に對して、敵の焚火は依然として元の場所に見えてゐる、と近侍は答へた。彼は結構々と云ふやうに點頭いた。當番副官が天幕へ入つて來た。

『Eh bien, Rapp, croyez-vous, que nous ferons de bonnes affaires aujourd' hui (どうだ、ラップ、前は何と思ふ、今日我々の仕事は首尾よく行くかね?)』 ナボレオンは副官に向いてかう言つた。

『San aucun doute, Sire (陛下、それは何の疑ひもござりません。)』とラップは答へた。

ナボレオンは彼を見つめた。

『陛下はスモレンスクでわたくしに仰せられたことを、御記憶でございませう。』とラップは言つた。『Le vin est tiré, il faut le boire (酒は封を切られたのですから、飲まないうちに飲みます。)』

ナボレオンは眉を擡めて、両手に頭を載せたまゝ、長い間無言に腰掛けてゐた。

『Cette pauvre armée (軍隊も可哀さうなものだ。)』出し抜けにナボレオンはかう言ひ出した。『スモレンスク以來の行軍で非常に數が減じて了つた。運命と云ふ奴は全く浮れ女のやうなものだな、ラップ。わしは何時もさう言つてゐたが、今それを體驗し始めたよ。しかし近衛は、ラップ、近衛は無事

であるだらうな。』

『Oui, Sire (陛下、御意の通り。)』とラップは答へた。

ナボレオンは果實入りのゼリー菓子をつかんで、それを口に入れながら時計を見た。彼は眠くなかつた。けれど夜明けまでにはまだ大分間があつた。時間潰しに何かしようにも、もう下すべき命令がなかつた。命令は悉く編成されて、今現に實施されてゐるところであつた。

『A-ton distribué les biscuits et le riz aux régiments de la garde (近衛聯隊に乾麵と米を配つたか?)』とナボレオンは嚴つゝ調子でかう訊いた。

『Oui, Sire (陛下、左様です。)』

『Mais le riz (は。米。)』

ラップは米に關する皇帝の命令も傳達したと答へた。しかしナボレオンは自分の命令が實行されたのを信じないやうに、不満足らしく頭を振つた。侍僕がブシユを持って入つて來た。ナボレオンはラップのために洋杯をもう一つ持つて來るやうに命じて、無言のまゝ、自分の洋杯から二三口啜つた。

『わしは味も匂も感じない。』洋杯に鼻をつけて嗅ぎながら、彼はかう言つた。『この鼻加答兒にも飽き／＼した。みんな醫術の力をやかましく言ふが、鼻加答兒さへ癒せないやうな醫術が

何になる！コルギザールはわしに果物の入ったゼリー菓子をくれたが、少しも利き目がない。一體あんな連中に何が癒せる？何も癒せやしない。Notre corps est une machine à vivre (我々の體は生機だ。) かう云ふ目的のために造られてゐるのだから、そこに體の天性があるのだ。體内にある生命を突つき廻さないで、生命そのものに自衛の方法を講じさせるがよい。生命は醫者が藥を體へ注ぎ込むより以上のことをする。我々の體は、丁度一定の時間だけ動くやうに決つてゐる、時計のやうなものだ。時計師もこの時計は開けることが出来ない。たゞ眼隠しをされたまゝ、手探りで取り扱ふよりほかに仕方がない。我々の體は生命のための機械だ、それつきりだ。』

ナポレオンは自分の好きな définitions (義定) の軌道に踏み込みでもしたやうに、突然新しい定義を案出した。

『ラップ、お前戦術とは何か知つてゐるかね？』と彼は訊いた。『それは一定の時間に敵より強くなる術なのだ。たゞそれきりだ。』

ラップは何とも答へなかつた。

『Demain nous allons avoir affaire à Kontouzoff (明日我々はクトウゾフと戦ふのだ。)』とナポレオンは言つた。

『まあ一つ見て見よう。あの男はブラウナウで軍隊を指揮してゐる時、三週間のあひだたゞの一度も、防備視察に馬に乗つた事がないのだからな。憶えてゐるだらう。まあ一つ見て見よう！』

彼は時計を見た。まだやつと四時であつた。しかし眠くなかつた。ブンシュも飲み干して了つたが、矢張り何もする事がなかつた。彼は立ち上つて彼方此方と歩き廻つたが、やがて暖い上衣を着け帽子を被つて、天幕の外へ出た。暗い濕つぽい夜であつた。上の方からはあるかないかの濕氣が降りてゐた。間近な佛蘭西近衛隊では、焚火がどんよりした焰を立てて燃えてゐた。露西亞軍の戦線でも霧を透して遙かに火影が見すかされた。邊りは静まり返つてゐるので、戰場占領のために動き始めた佛蘭西の軍中で、ざわ／＼と物の摺れる響きや、どや／＼と云ふ足音が明瞭に聞えるほどであつた。

ナポレオンは天幕の前を歩きながら、火影を見たり足音に耳を澄したりしてゐた。ふと自分の天幕の傍で歩哨をしてゐる、毛のもく／＼した帽子を被つた、脊の高い近衛兵の傍を通り抜ける拍子に、皇帝の出現に驚かされた兵士が、黒い柱のやうに反り返るのを見て、彼はその眞向ひに立ち止つた。

『何年から勤めてゐるのだな？』いつも兵卒と話をする時に示すわざとらしく粗笨な、而も武人らしい愛撫の籠つた調子で、彼はかう訊いた。

兵卒はそれに答へた。

『Ah! un des vieux (あゝ、それでは老兵の一人だね！) 聯隊へ送つた米を受け取つたか？』

『陛下、頂戴いたしました。ごさいます。』

ナポレオンは點頭いてその傍を離れた。

五時半に、ナポレオンはシェヴール村へ赴いた。

夜が明け始めた。空は拭つたやうに晴れ渡つて、たゞ一團の黒雲が東に横たはつてゐるだけであつた。捨てられた焚火は、朝の弱々しい光の中に辛じて燃え續けてゐた。

と、右の方で厚みのある砲聲が一發鳴り渡つて、邊り一面に立ち罩めてゐる靜寂の中に消えて行つた。幾分か過ぎた時、また第二第三の砲聲が轟いて、空氣を揺り動かした。すると何處か右の方から、第四第五の砲聲が近々と莊重に鳴り響いた。

まだ最初の砲聲がすつかり響き終らないうちに、更にまた次の砲聲が聞えた。かうして次から次と響き續けながら、互に融け合つたり遮り合つたりした。

ナポレオンは扈從の人々を従へてシェヴール方形堡に近づき、そこで馬から降りた。勝負は始められた。

三〇

アンドレイ公爵の許を辭した、ビエールはゴールキへ歸ると調馬師に向つて、朝早く馬の支度

をして、それから自分を起すやうに吩咐けて、すぐさまボリースから讓つて貰つた、仕切り板の蔭の狭い所で寝てしまつた。

翌朝ビエールが眼を醒した時、小屋の中にはもう誰一人もなかつた。小さな窓の硝子がびりびり震へてゐた。調馬師は傍に立つて彼を揺ぶつてゐた。

『ご前、ご前、ご前……』もう呼び醒す望みなど失つて了つたらしく、主人の肩を揺ぶりながら、調馬師は機械的にかう言つてゐた。

『何だ？ 始つたのか？ もう時刻かね？』ビエールはふと眼を醒してかう言つた。

『大砲の音がお耳に入りませう。』と豫備兵士の調馬師は言つた。『もう皆様お出かけになりました。總指揮官閣下も疾くにお通りになりました。』

ビエールは急いで着換へをして入口の階段へ駆け出した。外は晴れ晴れと爽やかに、大地は露に充ちて、如何にも樂しげであつた。たつた今雲間を出たばかりの太陽は、しつとり露の下りた道の埃りにも、家々の壁にも、塀の窓にも、小屋の傍に立つてゐるビエールの馬にも、半ば雲で屈折された光線を、向う側から屋並み越しに浴せてゐた。大砲の轟きは一層はつきりと戸外に聞えた。一人の副官が哥薩克兵をつれて往來を駆け抜けた。

『もう時分ですよ、伯爵、時分ですよ！』と副官は叫んだ。

ピエールは後から馬を曳いて来るやうに吩咐けて、往來傳ひに昨日戰場を見晴らした土陵へ赴いた。この土陵には一群の軍人がゐて、佛蘭西語で話し合つてゐる參謀連中の聲も聞えた。赤い筋の附いた白い軍帽を頂き、後ろ頭を肩の間に沈ませた、クトゥゾフの白髪首も見えた。クトゥゾフは望遠鏡で前方の大街道を眺めてゐた。

入口の踏み段づたひに土陵へ登つて前方を見渡したとき、ピエールはその場景の美しさに恍惚として立ち竦んだ。それは昨日この土陵から眺めたのと同じバナラマであつた。けれど今この地帯は全部軍隊と砲煙に掩はれた上に、ピエールの後ろから左寄りにさし昇つた輝かしい斜陽が、澄んだ朝の空氣を透して、金色と薔薇色のニュアンスを帯びた刺すやうな光と、黒く長い影を投げかけてゐるのであつた。バナラマを限つてゐる遠い森は、丁度黄が、つた緑の寶石で刻まれたやうに、その屈曲した頂の輪廓を地平線に見せてゐた。ワルーエゾの彼方ではこの森の間を、一面軍隊で掩はれたスモレンスク大街道が貫いてゐた。少し手前には金色の野や矮林が輝いてゐる。前にも右にも左にも——到る處に軍隊が見えた。これ等はすべて生き／＼としてゐて、雄大で意外であつた。しかし何よりピエールの目を射たのは、當の戰場たるボロヂノと、コロイチ⁺河の兩岸に擴る凹地の眺めであつた。

コロイチ⁺河とボロヂノ村とその兩側、殊にダイナー河のコロイチ⁺河に合する沼地には、一

面に霧が立ち罩めてゐて、それが輝かしい太陽の昇るに従つて、段々薄れて散りながら透き通つて來た。そしてこの霧を透して見えるものは悉く、魔法めかしい色や形を帯びるのであつた。なほこの霧に砲煙が混つて、到るところ霧と砲煙の間から、水の上にも、霧の上にも、河岸やボロヂノ村に群がつてゐる軍隊の銃剣にも、朝の光が電光のやうに輝いてゐた。この霧を透して白い會堂が見えた。ボロヂノ村の百姓家の屋根や、兵卒の密集團や、綠色の彈藥車や大砲などもそここに見えた。そしてこれ等の物が悉く動いてゐた、少くとも動いてゐるやうに思はれた。それは霧と煙がこの廣々した平野全體を漂つてゐたからである。霧に掩はれたボロヂノ附近の低地の外、まだ上の方にも——殊に左へ寄つた方にも——戦線全體に互つて、林にも、野にも、低地にも、高地の頂にも、無の中から自然に砲煙の塊が生れ出るのであつた。この煙が時には一つづつ、時には幾つか群をなして、時にはゆつくり間をおきながら、時には頻繁に現はれて、散つたり、擴つたり、塊つたり、融け合つたりしてゐるのが、廣々とした空間一面に見えてゐた。

これ等の砲煙と（妙なことであるけれど）その響とは、この場景の重なる美を作りなしてゐるのであつた。

バツ！——俄かに濃い煙の塊が現れて、紫色や、灰色や、白い乳色に擴るかと思ふと、一秒間くらゐ經つた頃、『ドーン！』と云ふこの煙の音が聞えるのであつた。

バツ、バツ！——二つの煙がぶつ突かり合つたり、融け合つたりしながら舞ひ上ると、『ドン、ドン』と云ふ音が響いて、眼で見たことを裏書するのであつた。

ピエールが、濃く圓い毬の形で見棄て、了つた最初の煙を、又もう一度見返つた時、そこにはもう大きな幾つかの弾丸がわきの方へ流れてゐた。と、『バツ……(間を置いて)バツ、バツ！』となほ三度——續いて更に四度、煙の塊が現れた。すると同じ間を置いて『ドン……ドン、ドン！』と云ふ美しく力強い正確な音がこれに答へた。時にはこの煙が走つてゐるやうにも思はれるし、時にはまた、煙がじつとしてゐると、その傍を掠めて林や、野や、輝かしい銃剣が走つてゐるやうにも思はれた。左手の野や灌木などに沿うて、この大きな煙が間斷なく現れては、莊嚴な反響を伴つてゐるのに引き換へて、少し手前の低地や林の邊には、塊の暇もない程小さな小銃の煙が逆り出では、矢張りそれ相應に小さな反響を立てるのであつた。『ドン、ドン、ドン』爆ぜるやうな小銃の音は非常に頻繁であつたが、大砲の音に比べると、不規則で貧しかつた。

ピエールはあの煙や、輝かしい銃剣や、運動や、音響のある處へ行つて見たくなつた。彼は自分の印象を他の人と比較するために、クトゥゾフとその幕僚を振り返つて見た。すべての人も同じやうな感じをもつて、前方の戦場を見つめてゐるやうに思はれた。今一同の顔には、ピエールが昨日認めた一種の表情——アンドレイ公爵との會話の後で完全に理解した感情——chaleur latente

が輝いてゐた。

『ちや、君、行つて來給へ、無事に行つて來給へ。』クトゥゾフは戦場から眼を放さうともしないで、傍に立つてゐる一人の將官にかう言つた。

命令を聞き終ると、將官はピエールの傍を通つて、土陵の下り口へ赴いた。

『渡船場！』何處へ行くのかと訊く或る參謀官の間に答へて、將官は冷やかに嚴然とかう言つた。

「俺も、俺も。」とピエールは考へて、將官の後から同じ方角へ進んだ。

將官は一人の哥薩克が曳いて來た馬に跨つた。ピエールは馬の轡を取つてゐる、自分の調馬師の傍へ近づいた。彼はどれが一番おとなしいかと訊いた後、一頭の馬に乗つて、兩手でその鬘を掴み、兩足の爪先を開いて踵を馬の腹へ押しつけた。そして眼鏡がすり落ちさうなのに、兩手を鬘と手綱から放すことが出来ないで、將官の後から駈けて行つた、土陵の上から見てゐた參謀官達の微笑を招きながら。

三一

ピエールが後からついて行つた將官は、丘を下りて了ふと、急に左へ曲つたので、ピエールは

その姿を見失つて、自分の前を進んでゐる歩兵の列へ乗り入れて了つた。彼はその中から出ようとして、前へ行つたり、左へ向いたり、右へ進んだりしたが、何方へ行つても兵士ばかりであつた。彼等はみな一樣に心配らしい顔附をして、何か目には見えないけれど、確かに重大な仕事に没頭してゐる様子であつた。そしてみな一樣に不満らしい不審けな眼附をして、何のためか分らないが自分等を馬で踏み附けようとする、この白い帽子を被つた肥つちよを見詰めてゐた。

『何だつて大隊の中を通るんだ！』と一人が彼に呶鳴りつけた。

今一人はピエールの馬を銃の床尾で突いた。ピエールは鞍の前橋にしがみついて、飛び上る馬をやつとのこと制しながら、兵士達の前の方の廣々とした處へ駈けて出た。

彼の前には橋があつた。橋の傍には別な兵士達が立つて射撃してゐた。ピエールはその傍に近づいた、彼は自分でも氣のつかないうちに、コロージャ河に架けた橋の傍へ來たのである。それはゴールキとボロヂノの中間にあつて、戦争が始るとすぐ（ボロヂノ占領後）佛蘭西軍が襲撃した橋である。ピエールは自分の前に橋があつて、橋の兩岸でも草原でも——昨日ピエールが煙のために見る事の出来なかつた乾草づみの間で——兵士らが何かしてゐるのに氣がついた。しかし此處で絶間なく射撃が行はれてゐるにも拘はらず、彼はこれが戰場だとは夢にも思はなかつた。彼は四方八方で唸つてゐる銃丸や、自分の頭上を飛んで行く砲弾の音も聞かなければ、河の對岸に

ゐる敵も目につかなかつた。そして自分の近くで大勢の兵卒が倒れてゐるのに、暫くの間死傷者にも氣がつかないでゐた。彼は絶えず顔に微笑を浮べながら、自分の周圍を見廻はしてゐた。

『どうしてあの男は戦線の前をうろついてゐるんだ？』とまた誰か彼に呶鳴りつけた。

『右へ、左へ避ける……』と人々は叫んだ。

ピエールは右の方へ避けた。と、その時思ひ掛けなく見知り越しの、ラトエフスキイ付き副官に出會した。この副官は腹立たしげにピエールをちらと見て、矢張り呶鳴りつけようとしたらしかつたが、ピエールと氣がついたので願で挨拶した。

『あなたはどうしてこんな處におゐるのです？』と言つて彼は先へ駈け出した。

用もないのにこんな處へ出しやばつてゐるのが、ピエールは極り悪くなつて來た。そしてまた誰かの邪魔になつてはと思つたので、副官の後を追つて駈け出した。

『一體こゝでは何事があるんです？ あなたと一緒に行くつもりですか？』と彼は訊いた。

『今直ぐ、今直ぐ。』と副官は答へて、草原に立つてゐる肥つた大佐の傍へ駈けつけて何やら傳へると、やつと初めてピエールの方へ振り向いた。

『伯爵、あなたはどうしてこんな處へおいでなんです？』彼は微笑しながらかう言つた。『相變らず好奇ですか？』

『さうです、さうです。』とビエールは言つた。

しかし副官は馬首を轉じて、更に前方へ進んで行つた。

『此處はまだ結構なんですよ。』と副官は言つた。『バグラチオン軍の左翼は非常な激戦です。』

『へえ！』とビエールは訊いた。『それは何處ですか？』

『ちやあね、一緒に土陵へ行きます。あそこから見えます。我々の砲臺はまだ少し凌ぎい、ですよ。』と副官は言つた。

『え、一緒に行きませう。』ビエールは邊りを見廻して、自分の調馬師を捜しながら言つた。

ビエールはこゝで初めて負傷兵が目に入つた。とぼく、歩いてゐるものもあれば、擔架で運ばれてゐるものもあつた。彼が昨日馬で通つた、香の高い乾草の竝んでゐる草原には、一人の兵卒が帽子をわきへすり落し、頭を窮屈さうに横へ向けて、じつと身動きもせず横たはつてゐた。

『どうしてこの兵士をつれて行かないのです？』とビエールは言ひかけたが、その方を振り返つた副官の嚴い顔附を見ると、急に言葉を切つた。

ビエールは調馬師が見附からなかつたので、副官と一緒にラーエフスキイの土陵を指して、凹地づたひに馬をすゝめた。ビエールの馬は副官から後れた。そして規則正しく彼を揺り上げ始め

た。

『伯爵、あなたは馬に慣れておるでやないと思えますな？』と副官は訊いた。

『いや、大丈夫です。しかし馬が何だか無暗に跳ねるものですから。』とビエールは怪訝さうに言つた。

『おや！……馬が負傷してゐますよ。』と副官は言つた。『右前足の膝の上です。銃丸が當つたに違ひありません。伯爵、お芽出度う。』と彼は言つた。『Le baptême du feu (火の洗禮)』

前面に出て耳を聳するやうな砲聲を立て、ゐる、砲兵隊の背後なる第六軍團の煙の中を通り過ぎると、二人は餘り大きくない林に着いた。林の中は涼しくて靜かで、何となく秋の香りがしてゐた。ビエールと副官は馬から降りて、徒歩で坂を登つた。

『將軍はこゝにゐられますか？』副官は土陵に近寄りながらかう訊いた。

『今迄おるでやしたが、彼方へ行かれました。』右の方を指さしながら、人々はかう答へた。

副官はビエールを振り返つて、扱この男をどうしたものかと、當惑したやうな風をした。

『ご心配なく。』とビエールは言つた。『わたしは土陵へ行きますから。い、でせう？』

『え、え、おいでなさい、あそこならすつかり見えます。それに大して危険もありません。わたしは直ぐあなたを迎へに來ます。』

ピエールは砲臺へ行くし、副官は先へ進んで行つた。それつきり彼等は會はなかつた。ずつと後になつてピエールは、この副官がその日片腕なくしたことを知つた。

ピエールが登つて行つた土陵は、その後露西亞側でラーエフスキ砲臺もしくは土陵砲臺、佛蘭西側では *La grande redoute* (大方形堡) とか、*La fatale redoute* (運命の方形堡) とか、*La redout du centre* (中央方形堡) などと言ふ名の下に有名になつた場所で、その周圍には數萬の兵が倒れたのである。佛蘭西人はそれを敵陣地の最も主要な地點と見做してゐた。

この方形堡は三方に塹壕を掘り巡らした土陵なのであつた。塹壕を掘つた場處には、十門の砲が堡壘の穴から突き出て、盛んに射撃してゐた。

土陵と並行したその兩側にも、幾門かの火砲が並んでゐて、これも矢張り絶間なく砲彈を放つてゐた。砲の少し後には歩兵隊が立つてゐた。ピエールは土陵へ登つて行きながら、小さな塹壕を掘りめぐらして、幾門かの大砲を配置してゐるに過ぎないこの場所が、戦闘の最も重要な地點であらうとは夢にも知らなかつた。

それどころかピエールには、この場所がごく詰らない所のやうに思はれた(つまり自分が其處にゐるからである)。

ピエールは土陵へ登ると、砲臺を取り圍んでゐる塹壕の端に腰をおろして、無意識に嬉しさう

な微笑を浮べながら、周圍の動靜を眺め始めた。時々ピエールは、矢張り同じ微笑を浮べたまゝ、立ち上つて、大砲を装填したり動かしたり、囊や彈藥を持つて絶えず傍を驅け抜けたりする、兵士達の邪魔をしないやうに氣をつけながら、砲臺の中をあちらこちらと歩き廻つた。この砲臺の大砲は間斷なく交る交る發射を續けて、その轟きで人の耳を聳し、硝煙で邊りを蔽ふのであつた。砲臺掩護の歩兵の間に感じられた、息づまるやうな重苦しさに反して、濠で他から切り離された、少數の人達が定つた仕事をしてゐるこの砲臺では、すべての人に等しく共通な、家庭的とも言ふべき活氣が感じられた。

軍人ならぬピエールの白い帽子を被つた姿が現れた時、そこにゐた人は初めちよつと不快な刺激を受けた。兵士等はピエールの傍を通り過ぎる時など、吃驚したと云ふより寧ろ慄えたやうに、横目で彼の姿を見やつた。古參の砲兵將校——脊が高く脚の長い痘痕男は、一番端の大砲の働きを調べるやうな振でピエールに近づき、珍しさうに彼を見詰めるのであつた。

見受けたところ、幼年學校を出たばかりらしい、まるで小供のやうに若い丸顔の將校は、自分に委任された二門の大砲を一生懸命に指揮しながら、嚴めしい口調でピエールに聲をかけた。

『あなた、どうか通り路を退けて下さい。』と彼はピエールに言つた。『其處はいけません。』兵士等はピエールを見遣りながら、不感服らしく頭を振つた。けれど、白い帽子を被つたこの

男が、何一つ悪い事をしないで、じつと堡壘の斜面に音無しく坐つてゐるか、それとも臆病さうな微笑を浮べて、丁寧に兵士らの通り途を避けながら、砲彈の下をまるで並木街か何ぞのやうに、落ちていてあちこち歩き廻つてゐるに過ぎないのを確かめたとき、彼に對する悪意の疑念は、次第に冗談半分の優しい同情に變り始めた。それは兵士等が自分の動物——即ち犬や、鶏や、山羊や、その他一般に軍隊で飼はれてゐる動物——に示すやうな感情であつた。この兵士らは内心すぐにピエールを家族の中へ入れ、自分達の仲間として綽名までつけた。彼等はピエールを『うちの旦那』と呼んで、彼のことを愛想よくお互同志の間で笑ひ合つた。

一發の砲彈がピエールから二歩ばかり離れた地面を穿つた。彼は砲彈で跳ね飛ばされた土を服から拂ひ落しながら、微笑を浮べて邊りを見廻はした。

『旦那、どうしてあなたは怖くないんですね？ 本當に！』肩幅の廣い赤ら顔の兵卒は、丈夫さうな白い齒を剥き出しながら、ピエールに向つてかう言つた。

『ぢや、一體お前は怖いのかね？』とピエールは訊いた。

『でなくつて、どうしますかね？』と兵卒は答へた。『だつて彼奴と來たら容赦しやしないから。彼奴がぐしやつと來ると、腸も何もけし飛んで了ひまさあ。怖がらずにやゐられませんや。』と彼は笑ひながら言つた。

快活な愛嬌のい、顔付をした幾人かの兵卒が、ピエールの傍に立ち止つた。彼等はピエールが他の人と同じやうに口を利かうとは思ひ掛けなかつたので、この新発見が愉快で堪らない、と云ふやうな風であつた。

『おれ達はまあ兵隊のことだから當り前だが、あの旦那はどうも驚いた！ ほんとに豪え旦那だ！』

『部署につけ！』ピエールの周りに集つてゐる兵士らに向つて、若い將校はかう叫んだ。

この若い將校が職務を執行するのは、これが始めてか二度目くららだと見えて、兵卒や上官に對するとき、殊さら四角張つたよそ行の語調を示すのであつた。

大砲や小銃の雷のやうな轟きは、戦場の全體に互つて——特に左方のバグラチオン突角堡のあたりで——次第に烈しくなつて來た。しかしピエールのゐる處からは、砲煙のために殆ど何一つ見ることが出来なかつた。その上、砲臺にゐる人達の如何にも家庭的な（他の人達から別離された）一團を見てゐると、ピエールの注意はすつかりそれに吞まれて了つた。戦場の光景と砲聲に呼び起された、最初の無意識的な喜ばしい昂奮は、今——殊に草原の上に一人淋しく横たはつてゐたあの兵卒を見て以來——全然別な感じに代つて了つた。彼は今塹壕の斜面に坐つたまゝ、周りにゐる人達の顔を觀察してゐた。

十時頃までには、もう二十人からの兵卒が砲臺から運び去られ、二門の大砲が破壊された。砲弾はますます頻繁に砲臺へ落ち、銃丸も遠くからひう／＼唸りながら飛んで来た。けれど砲臺にゐる人達は、そんなことには氣もつかないやうな風であつた。彼方からも此方からも快活な話し聲や冗談口が聞えた。

『塙め物の入つた奴だぜ！』唸り聲を立てながら飛んで来た榴散弾を見て、一人の兵士はかう叫んだ。

『此方ぢやない！ 歩兵の方へ行つた！』砲臺を飛び越して掩護隊へ落ちた榴散弾を見て、今一人の兵士が大きな聲で笑ひながらかう附け足した。

『何だ、馴染なのかい？』飛び過ぎる砲弾の下に腰を屈めた一人の百姓を見て、今一人の兵士はかう言つて笑つた。

幾人かの兵卒は堡壘の傍に集つて、前方で行はれてゐることを見すかしてゐた。

『戦線を撤回したぞ、見ろ、退却して来た。』彼等は堡壘の向うを指差しながらかう言つた。

『自分の仕事を見るがい、』と一人の老下士が兵卒らを唳鳴りつけた。『あの連中が後ろへ退つたのは、つまり後ろに仕事があるからだ。』

かう言つて下士は一人の兵卒の肩を掴むと、膝でとんと尻を突いた。どつと笑ふ聲が聞えた。

『第五號砲に集れ、前へ出せ！』と云ふ叫び聲が一方から聞えた。

『さア、一時に、みんな一緒にやれ、舟曳のやうにな。』砲を取り換へる兵士らの快活な叫び聲が聞えた。

『やれ／＼、もう少しでうちの旦那の帽子を跳ね飛ばすところだつた。』赤ら顔の道化者はピエールを見ながら、齒をむき出して笑つた。『やい、このすべため。』砲の車輪と兵卒の足に命中した砲弾に向つて、彼は叱るやうにかう附け足した。

『え、この狐ども！』負傷兵の收容に砲臺へ上つて來ながら、背中を屈めてゐる民兵達を見て、いま一人の兵士が笑つた。

『それともこの粥はうまくないのかい？ やい、烏ども、何を愚圖々々してるんだ！』片脚取られた兵卒の前でもじ／＼してゐる民兵達を、兵士らはかう言つて唳鳴りつけた。

『ほんに／＼、可哀さうに。』と兵士らは百姓達の口眞似をした。『どうもえらくお厭なやうだね。』

砲弾が落ちる度に、死傷者が出来る度に、一同の活氣が益々燃え立つて來た。ピエールはそれに氣がついた。

次第に近づく夕立雲の中から發するもの、やうに、これ等の人々の顔には（目前の出來事に反

抗するやうに) 潜熱の電光がいよゝ頻繁に、いよゝ明かに輝いて來た。

ピエールは前面の戦場を見なかつた。そこで何が行はれてゐるか、知りたいと云ふ興味も感じなかつた。彼は益々燃え熾つて來るこの潜熱の觀照に、いよゝ深く没頭して行つた。その熱は彼の心の中でも同様に燃え出した(彼はそれを感じたのである)。

十時には、砲臺の前に茂つた灌木の中や、カーメンカ河の岸などにゐた歩兵が退却した。銃の上に負傷兵を載せて、傍らを駆け過ぎる彼等の姿が、砲臺からよく見えた。幕僚をつれた一人の將官が土陵へ登つて來た。そして一寸聯隊長と話をして、腹立たしさうにピエールを尻目に掛けると、砲臺の後ろに立つてゐる掩護隊に向つて、少しでも砲火に曝されないで濟むやうに、伏せの姿勢をしてをれと命じて、再び下へ降りて行つた。これに續いて砲臺の右側にゐる歩兵隊の列中に、太鼓の音と號令の叫び聲が聞えた。そして前進する歩兵の列が砲臺から見えた。

ピエールは堡壘越しに眺めてゐた。と、ある一つの顔が殊に彼の眼を射つた。それは刀をぐたりと下けて、不安さうに邊りを見廻はしながら後ずさりしてゐる、顔色の蒼ざめた若い將校であつた。

歩兵の列は煙の中に隠れて、引き伸したやうな叫び聲や、頻繁な銃聲が聞え始めた。幾分か経つと、その方面から負傷兵や擔架の群が歸つて來て、傍らを通り過ぎた。砲臺には砲彈がいよいよ

よ繁く落ちるやうになつた。幾人かの死傷者は收容されないでその儘ころがつてゐた。砲の周りでは兵士らが益々忙しげに、益々元氣よく動き廻つてゐた。もう誰もピエールに注意を向ける者はなかつた。たゞ二度ばかり通り道の邪魔になると言つて、唵鳴りつけたばかりである。故參の將校は顔を顰めながら、砲から砲へと急ぎ足に歩き廻つてゐた。若い方の將校は一層顔を赤くして、いよゝ熱心に兵卒を指揮してゐた。兵士らは彈藥を渡したり、くると向きを變へたり、裝填したりしながら、緊張した而も氣取つた態度で、自分の任務を遂行するのであつた。彼等はばね仕掛けのやうに歩きながら跳ね上つてゐた。

夕立雲はいよゝ近く迫つて來た。そして一同の顔には、ピエールの絶えず注視してゐる、例の火花が燃えてゐた。彼は故參將校の傍に立つてゐた。若い方の將校が軍帽に手を當てながら、上官の傍へ駆けよつた。

『大佐殿、報告。砲彈はもう八個しか残つてをりませんが、まだ射撃を續けませうか?』と彼は訊いた。

『榴彈だ!』堡壘ごしに彼方を眺めてゐた故參將校は、若い將校に返事もせずにかう叫んだ。と、不意に何やら起つた。若い將校はあつと叫んで、丁度飛びながら撃たれた鳥のやうに、丸くなつて地べたに坐つて了つた。ピエールは突然目の中が奇妙に朦朧として、暗くなつたやうな

気がした。

砲弾は後からく、唸つて来て、胸墻や兵卒や火砲などに當つた。以前こんな音などピエールの耳へ入らなかつたのに、今はそればかりのべつ耳についた。砲臺の右側では兵士らが『萬歳』を叫びながら走つてゐるが、それさへピエールには前進でなくて、退却のやうに思はれた。

砲弾が、一つピエールの前の堡壘の一番端に當つて、土を跳ね飛ばした。そして彼の眼に黒い毬のやうなものがちらりと映ると、その瞬間なにかにぐしやりとぶつ突かつた。砲臺へ入りかけた民兵達は後ろへ駆け戻つた。

『みんな榴弾でやれ！』と將校は叫んだ。

一人の下士が故參將校の傍へ駆けよつて、丁度給仕長が食事の時主人に向いて、要求された酒がもうないと告げるやうな聲で、砲弾はもうなくなつたと、憎えたやうに囁いた。

『泥棒めら、何をしてるやがるんだ！』將校はピエールの方へ振り向きながらかう叫んだ。故參將校の顔は眞赤に汗ばんで、睨めた眼はぎらく輝いてゐた。

『豫備隊へ走つて行つて、彈藥函を持つて來い！』彼は腹立たしげにピエールを見廻した後、自分の兵卒の方へ向いてかう叫んだ。

『わたしが行きませう。』とピエールは言つた。

將校はそれに返事もしないで、大股に他の方へ歩いて行つた。

『撃ち方やめ……待て！』と彼は叫んだ。

彈藥を取りに行けと命じられた一人の兵卒は、ピエールに打つ突かつた。

『え、旦那、此處はあんなぞのるなざる所ぢやありませんよ。』と言ひ捨てながら、彼は下の方へ駆け出した。

ピエールは若い將校の坐つてゐる場所を避けて迂廻しながら、兵卒の後から駆け出した。

一つ、又一つ、又々一つ——彼の頭上を砲弾が掠めて、前後左右に落ちた。ピエールは下へ駆けおりた。「俺は何處へ行つてゐるんだ？」もう大方綠色をした彈藥函の傍まで駆けつけた時、彼は急にかう想ひついた。彼は後戻りしたものが、それとも先へ行つたものかと、決しかねたやうに立ち止つた。と、俄かに何か恐しい衝動が彼を後ろの地びたへ突き倒した。その瞬間、巨大な閃光が彼を照し、それと同時に耳を聳する雷のやうな轟きや、ぱち／＼炸裂する音や、ひうと云ふ唸り聲などが聞えた。

ピエールはふと我に返ると、地びたに両手を突いてべつたり坐つてゐた。傍にあつた彈藥函はもうなかつた。たゞ焼けた草の上に焦けた綠色の板と、ぼろきれが散亂してゐるばかりであつた。一頭の馬は轅の折れつばしを引き摺りながら、彼の傍から駆け出して行つたが、いま一頭はピエ

ールと同じく地びたに横たはつたまゝ、耳を劈くやうな、引き伸したやうな聲で嘶いてゐた。

三三

ビエールは恐しさに我を忘れて飛び起きた。そして自分を取り圍んでゐる数々の恐怖から遁れる唯一の避難所として、砲臺さして駆け戻つた。

ビエールが塹壕の中へ入りかけた時、砲臺には射撃の音が聞えないで、誰か何やらしてゐるのに気がついた。ビエールはそれがどんな人か會得する暇がなかつた。彼は自分の方へ尻を向けながら、何か下の方を見てゐるやうな恰好をして、堡壘の上に横たはつてゐる故參の大佐を見た。それから一人見覚えのある兵卒が、自分の手を掴んでゐる人達を振り放して、前へ出ようとあせりながら、『兄弟！』と叫んでゐるのを見た。それからまだ何やら奇怪なことが目に入つた。

けれど、大佐が殺されたことと云ふことも、『兄弟』と叫んでゐる兵卒が捕虜になつたのだと云ふことも、まだ充分思ひめぐらす暇のないうちに、彼の眼の前で今一人の兵卒が、背中から銃剣を刺し通された。彼がやつとのことで塹壕の中へ逃げ込む間もなく、瘦せた黄色い汗みどろの顔をして、青い軍服を着けた一人の男が、手に剣を持つて何やら叫びながら、ビエールに跳り掛つた。ビエールは本能的に衝突を防ぎながら（二人とも對手を見ないで両方から飛び掛つたのである）、

両手を伸して片手でこの男——それは佛蘭西の將校であつた——の肩を掴み、今一方の手でその喉を掴んだ。將校も剣を放してビエールの襟首を掴んだ。

幾秒かの間、彼等は二人とも憎えたやうな眼付で、互に見慣れぬ相手の顔を見合つてゐた。そして二人とも自分が何をしたのか、又どうすればいい、のかわらないで、怪訝さうに突つ立つてゐた。「俺が捕虜にされたのだらうか、それとも奴がおれに捕虜にされたのだらうか？」二人はどちらもかう考へた。けれど見受けたところ、佛蘭西の將校の方が餘計に自分の方を、捕虜になつたものと考へたらしい。なぜと言つて、ビエールの強い手は我しらす恐怖に驅られて、段々固く佛蘭西人の喉を締めつけたからである。佛蘭西人は何か言はうとしたが、その瞬間不意に砲彈が恐しい唸り聲を立てながら、二人の頭のすぐ上を低くかすめて行つた。ビエールは佛蘭西人の頭が飛んで了つたかと思つた。それほど彼は素早く首を屈めたのである。

ビエールも矢張り頭を屈めて両手を放した。すると、もう誰が誰を捕虜にしたかなど、云ふことは考へもしないで、佛蘭西將校は砲臺の方へ駆け戻るし、ビエールは死傷者に躓きながら山を駆け下りた。彼はこれ等の死傷者に足を掴まれるやうな氣持がした。併しまだ彼が下まで降り切らないうちに、露西亞兵の密集群が向うから走つて來た。彼等は倒れたり躓いたり叫んだりしながら、面白さうに元氣よく砲臺を目がけて走つた（それはかのエルモーロフが、たゞく自分の

勇敢と幸運を俟つて、始めてなし遂げ得る業であると言つて、自己の勳功に歸した突撃であつた。この攻撃に於て、彼は衣囊にあつたゲオルギイ十字章を、土陵に投げつけたとか言つてゐる。

砲臺を占領した佛蘭西兵は逃げ出した。我軍は「萬歳」を叫びながら、砲臺の遙か彼方まで佛蘭西兵を驅逐したので、却つてそれを止めるのに骨が折れた程である。

砲臺から捕虜をつれて下りた。その中には一人の負傷した佛蘭西將官がゐる、將校達はその周圍を取り巻いてゐた。ピエールの知つた者や知らない者や、露西亞や佛蘭西の負傷者の群は、苦痛のために顔を見苦しく歪めながら、ある者は歩き、あるものは這ひ、あるものは擔架で運ばれながら砲臺を下りて行つた。ピエールは土陵に登つて、其處に一時間以上もゐたけれど、彼を迎へ入れたあの家庭的な一團の兵士には一人も行き會はなかつた。其處にはピエールの知らぬ戦死者が大勢ゐるが、中には幾人か見覚えのある者もあつた。若い將校は矢張り身體を丸くしたまゝ、堡壘の端に溜つた血の池の中に坐つてゐた。赤ら顔の兵卒はまだびくり／＼してゐるのに、誰も收容して行く者がなかつた。

ピエールは下へ駈け降りた。

「いや、もう今こそ皆こんなことは止めるだらう。今こそみんな自分のした事にぞつとするだ

らう！」當もなく戰場から來る擔架の群について歩きながら、ピエールはかう考へた。

けれど煙で蔽はれた太陽は、まだ空高く懸つてゐた。前の方、殊に左の方のセミョーノフスコエ村附近では、煙の中で何やら奔めき合つてゐた。小銃や大砲の轟きは靜まらないばかりか、却つて滅茶々に劇しくなつた。それは丁度自暴自棄になつた人が、最後の力を奮つて叫んでゐるやうであつた。

三三三

ボロヂノ戰役の重なる戰鬪は、ボロヂノ村とバグラチオン突角堡の間に互る、千間の面積内で行はれた(これ以外、一方では露西亞側に於て、その日の中頃ウブーロフ騎兵隊の示威運動が行はれたし、いま一方ではウチーツァの後方に於て、ポニャトーフスキイとトッパコフの衝突があつた。しかしこれは戰場の中央部で行はれたのに比べると、二つの孤立した微弱な戰鬪であつた)。重なる戰鬪はボロヂノと突角堡との間にある森林附近の平野、即ち兩方から見渡される打ち展けた場所、きはめて單純に何の詭計もなく行はれたのである。

戰鬪の幕は兩軍合せて數百門の大砲の發射によつて切つて落された。

やがて砲煙が戰場全體を蔽ひ盡した時、この煙の中を(佛蘭西側では)デッセとコムパンの二師

團が突角堡を指して右方より進み、副王の諸聯隊が左方よりボロヂノに向つて進んだ。

突角堡は、ナポレオンの立つてゐるシェヴールヂノ方形堡から、一露里ばかり距てた處にあつたが、ボロヂノは直線二露里以上の距離にあつたので、ナポレオンもこの方面に於ける動靜を見分けることが出来なかつた。殊に煙が霧と溶け合つて、戰場を一面に蔽つてゐたから尙更である。突角堡に向つたデッセ師團の兵士なども、彼等を突角堡から隔ててゐる窪地に降りきると、もう姿が見えなくなつて了つた。彼等が窪地に降るや否や、突角堡から射ち出す大砲や小銃の煙が非常に濃くなつて、窪地の向う側に續く斜面全體を覆うて了つた。そこには煙を透して人間らしい黒い物や、時には銃劍の光などが閃いた。けれど動いてゐるのか止つてゐるのか、佛蘭西人か露西亞人か、そんな事はシェヴールヂノ方形堡から見分けられなかつた。

太陽は明るくさし昇つて、小手を翳して突角堡を眺めてゐるナポレオンの顔を、斜めな光線が眞正面に照りつけた。煙は突角堡の前に擴つて、時には煙が動いてゐるやうにも思はれるし、時にはまた軍隊が動いてゐるやうにも思はれた。時々砲聲の底から人の叫び聲も聞えたが、そこで何をしてゐるのか、知ることは出来なかつた。

ナポレオンは土陵の上に立つて望遠鏡で觀測してゐた。そして望遠鏡の小さい環の中に、砲煙や人間の姿——或る時は味方の、或る時は露西亞兵の姿を見た。しかしまた肉眼で眺めた時には、

望遠鏡で見たものが何處にあるやら、一向見當がつかなかつた。

彼は土陵から降りて、その前をあらこちらと歩き始めた。

時々彼は歩みを止めて、砲聲に耳を澄したり、戰場を見透したりした。

いま彼の立つてゐる低い處や、幕僚將官の幾人か立つてゐる土陵からは勿論、露西亞兵や佛蘭西兵——戦死者や、負傷者や、元氣のい、者や、おびえた者や、氣ちがひのやうになつた者などが一緒に入り交つたり、代る／＼追ひつ追はれつしてゐる突角堡からでさへも、こゝでどう云ふ事が起つてゐるのか、はつきり知ること出来なかつた。こゝでは幾時間かの間、小銃や大砲の小止みない射撃の中に、時には露西亞兵ばかり、時には佛蘭西兵ばかり、時には歩兵、時には騎兵が現れるのであつた。そして出て來るかと思ふと、倒れたり、射撃したり、お互に何うして、い、か分らずに打つ突かり合つたり、喚いたり、走つたりした。

ナポレオンの派遣した副官や、元帥達の傳令などは、絶間なく戰場から駈けつけて、皇帝に戦鬪の經過を報告した。けれどさうした報告はみんな間違つてゐた。それは激戦の眞最中に、今この瞬間かく／＼のことが行はれてゐる、と言ふのが殆ど不可能なためでもあるが、いま一つは多くの副官達が戦鬪の現場まで行かずに、他人から聞いたことをそのまま、報告したためでもあるし、また副官が戰場からナポレオンの所まで、二三露里の距離を馬で駈けつける間に、すつかり

戦況が變つて、その齎した報告がもう不正確になつて了つたためでもある。例へば、副王から派遣された副官が駈けつけて、ボロヂノは占領せられ、コロイチヤ河の橋は佛蘭西軍の手に落ちたと云ふ報告を齎して、軍隊に橋を渡らしてもいいかと訊いた時、ナポレオンは對岸で陣形を整へて待つてゐるやうに命じた。しかしナポレオンがこの命令を發した時は勿論、副官がボロヂノを出發したすぐ後で、戦闘の始めにビエールの參加したあの小競り合で、橋はもう露西亞軍のために奪取され、焼き棄てられて了つたのである。

憎えたやうな眞蒼な顔をして突角堡から駈けつけた副官は、我軍の突撃が撃退されて、コムバンは負傷し、ダヴーは戦死した旨をナポレオンに報告した。けれど副官が佛蘭西軍の撃退されたことを聞いた時、突角堡はもう佛蘭西軍の別働隊に占領されてゐた。そしてダヴーはたゞ軽い擦過傷を受けたゞけで、命に別條ないと云ふことが分つた。ナポレオンはかう云ふ必然から發した偽りの報告を綜合して、さまざまな指令を發してゐたのであるから、それはもう發する以前とつゝくに實行されてゐたり、或ひは實行不可能のために、結局實行されずに終つたりした。

元帥や將軍達は比較的戰場に近い處にゐるが、しかしやはりナポレオンと同じく、戦争そのものに直接關係しないで、たゞ時々砲火の下に馬を進めるだけであつた。そしてナポレオンに因らないで獨斷の處置をして、何處から何處へ發砲せよとか、騎兵は何處へ突進せよとか、歩兵は何

處へ走れとか云ふ命令を發した。けれど彼等の命令さへナポレオンの命令と同じく、實行されることは極めて稀で、しかも微々たる程度に過ぎなかつた。多くの場合、それらの命令に正反對な結果が生じた。進撃を命ぜられた兵士らが榴弾を浴びて逃げ戻つたり、一地點に留まつてゐるやうに命ぜられた兵士らが、突然目の前へ露西亞兵が現れると、自分勝手に進撃したり、騎兵が命令もないのに遁逃する露西亞兵を追撃したりした。かう云ふ工合で騎兵二個聯隊は、セミョーノフスコエの谷を越えて突進した後、山の上へ出た時に、始めて方向を轉じて全速力で引つ返した。歩兵の行動も矢張りその通りで、時によると全然命令のない方向へ走つて行くこともあつた。何時どこへ大砲を動かすべきか、いつ歩兵を進めて射撃を開始すべきか、いつ騎兵を動かして露西亞歩兵を蹂躪すべきか——かう言ふ命令を發したのは軍中に於ける部隊々々の指揮官で、而もその際ナポレオンばかりでなく、ネイヤ、ダヴーや、ミュラートにさへ圖らなかつたのである。彼等は命令を實行しなかつたり、或ひは自分勝手な處置をしたりしたために、責任を問はれるのも恐れなかつた。なぜと言つて、戦争の眞最中には、人間にとつて最も貴いもの——自分自身の生命が問題だからである。この生命の安全は時とすると退却に存し、時とすると前進に存する。従つて、激烈な戦闘の熱火の中にあるこれ等の人々は、その瞬間の心持次第で行動するのである。實際前進とか退却とか云ふ行動は、軍の形勢を良くもしなければ變更もしない。彼等が互に試み合

ふ襲撃や突進は、殆ど何等の害をも敵に加へなかつた。害悪や死や損傷を齎すものは、彼等の狂奔する地域内いたる所に飛んでゐる、砲弾や銃丸なのであつた。これ等の人々が砲弾や銃丸の飛び交ふ地域内から出て来るや否や、後方に立つてゐる上官達は、直ちに彼等を整頓して軍規に従させ、この軍規の力によつて、再び彼等を砲火の巷へ引き入れるのであつた。彼等はその中へ入ると、又もや(死の恐怖に支配されながら)軍規を失つて、偶然の群集心理に委せて狂奔するのであつた。

三四

ナポレオンの幕僚——砲火の巷の近くにある、時々その中へ入ることさへあるダヴーや、ネイヤ、ミュラートなどは、幾度となくこの砲火の巷へ、整然たる大軍を導き入れたけれど、以前のあらゆる戦闘に間違ひなく繰り返された例に反して、今度は豫期してゐる敵軍敗走の報に接しないばかりか、却つて整然としてゐた軍隊が、驚き亂れた群集となつて其處から歸つて來た。彼等は更に軍容を整へたが、兵員はだん／＼少くなつて行つた。その日の中頃、ミュラートは副官をナポレオンの許に遣はして援兵を求めた。

ナポレオンが土陵の下に腰掛けて、ブンシュを飲んでゐた時、ミュラートの副官はナポレオンの所へ駆けつけて、もし皇帝が今一師團出動させたならば、露西亞軍は必ず撃破されるに相違ないと説いた。

『援兵!』ナポレオンは副官の言葉を解し兼ねたやうに、ミュラートと同様長い黒髪を波打たせてゐる、美しい少年副官を眺めながら、嚴めしい驚きの色を浮べてかう訊いた。

「援兵!」とナポレオンは考へた。「彼等は軍の大半を率ゐて、防備も無い露西亞軍の薄弱な一翼を攻撃してゐるのに、援兵を寄越せとは何事だ!」

『Dites au roi de Naples (ナポリ王に)(ナポリ王に)』とナポレオンは嚴しい調子で言つた。『Qu'il n'est pas midi et que je ne vois pas encore clair sur mon échiquier. Allez...』(今はまだ正午前だ。そして俺はまだ自分の将棋盤がはつきり見えなうと)

美しい長髪の少年副官は帽子から手を放さずに、重々しく溜息をつきながら、人々が互ひに殺し合つてゐる處へ再び駆け去つた。

ナポレオンは立ち上つて、コレンクールとベルチエーを呼び寄せ、二人を相手に戦争と關係のないことを話し始めた。

次第にナポレオンの興味を惹き始めた會話の中頃に、随員を従へて汗ばんだ馬に跨り、土陵の方へ駆けて行く一人の將官が、ふとベルチエーの眼に止つた。これはベリヤールであつた。彼は

馬から降りると、急ぎ足で皇帝に近づき、臆する色もなく聲を勵まして、援兵の必要を證明し始めた。もし皇帝が今一箇師團出動させたなら、露西亞軍の滅亡は疑ひないと、己れの名譽にかけて誓ふのであつた。

ナポレオンはひよいと肩を竦めて、何とも答へずに漫歩を續けた。ベリヤールは周りを取り圍んだ扈從の將官達と、大きな聲で元氣よく話し始めた。

『ベリヤール、お前はとも激し易い質だな。』今駈けつけた將官の傍へもう一度近よりながら、ナポレオンはかう言つた。『砲火の酣な際にはえて物が間違ひ易いものだ。もう一度行つて見て、それからわしのところへ来るがよい。』

未だベリヤールの姿が隠れ切らないうちに、今一方から再び別な戦場の使者が駈けつけた。

『Eh bien qu'est-ce qu'il ya (一體お前は 何用だ)』 斷えず仕事の邪魔をされて、苛々した人のやうな口調で、ナポレオンはかう言つた。

『Sire, le Prince... (陛下、公 爵は...)』と副官は言ひかけた。

『援兵を送れと言ふのか?』腹立たしげな身振をしながら、ナポレオンはかう言つた。

副官は頭を垂れて點頭きながら上奏を始めた。けれど皇帝はふいとわきの方へ向いて、二足ばかり歩き出したが、そのまゝ立ち止つて後戻りすると、ベルチエを傍らへ呼び寄せた。

『豫備隊を出さなくてはならぬ。』一寸兩手を左右に開きながら彼はかう言つた。『誰をやつたものかな、お前は何と思ふ?』と彼はベルチエに話しかけた。彼は後にこの男の事を *oison que j'ai fait aigle* (わしが鷲にして やつた鷹の仔) と名づけたのである。

『陛下、クラバレードの師團をお遣はしになりました。』各師團、各聯隊、各大隊を、残らず詰じてゐるベルチエはかう言つた。

ナポレオンは同意するやうに點頭いた。

副官はクラバレードの師團へ馬を走らせた。やがて數分間の後、土陵の後ろに立つてゐた若い近衛隊が、自分の部署から動き出した。ナポレオンは黙つてその方角を眺めてゐたが、

『いや、』と不意にベルチエの方を振り向いた。『わしはクラバレードをやる譯に行かぬ。フリーアン師團を出せ。』と彼は言つた。

クラバレードの代りにフリーアンの師團を出したところで、別に大して利する點はなかつた。それ所か、今クラバレード師團を引き止めてフリーアン師團を出すのは、却つて遅延を生じて不利を招くことさへ明かであつたが、それでもこの命令は正確に實行された。ナポレオンは自分の處方劑のために、却つて病狀を傷つける醫者の役廻りを務めてゐたが、不斷かうした役廻りをよく理解して、その非を責めてゐた彼自身さへ、それに氣が付かないのであつた。

フリアン師團も他の軍隊と同じやうに、戦場の煙の中へ隠れて了つた。諸方面からは依然として、断間なく副官達が駆けつけた。そして一同申し合せたやうに同じことを言つた。みな援軍を求めたのであつた。彼等の言葉によると、露西亞軍は未だにその位置を保つて *in feu d'enfer* (地雷のやうな砲火) を注ぐので、佛蘭西の軍勢は次第に數を減じて行くとの事であつた。ナポレオンは物思はしげな風情で疊み椅子に腰掛けてゐた。

朝から腹をへらしてゐた、旅行好きのボーセエは皇帝に近づいて、恐る／＼陛下に朝餉を勧めた。

『わたくしは最早勝ち戦のお祝を申し上げても宜しからうと存じますが。』と彼は言つた。

ナポレオンは黙つて頭を横に振つた。ボーセエはこの否定が勝利に關したもので、朝餉の事ではないと想像したので、朝餉をとることを妨げるやうな原因は、この世に決して無い筈だと、巫山戯たやうな恭しい調子で言上した。

『*Alliez vous...* (行け……)』突然浮かぬ顔付でかう言ふなり、ナポレオンは顔を反けた。

同情と悔恨と歡喜の入り交つたさも幸福けな微笑が、ボーセエの顔に輝いた。彼は泳ぐやうな足取で他の將軍達の方へ立ち去つた。

いつも無分別に金を投げ出しながら、何時も必ず勝つてばかりゐた幸運な博奕打ちが、勝負の

ありとあらゆる道筋を、すつかり考へ抜いて掛つた時に限つて、工夫すれば工夫するだけ、自分の敗戦の確かなことを感じる——丁度それと同じやうな重苦しい感じを、ナポレオンは今経験したのである。

軍隊も前と同じなら、將軍達も同じであつた。戦闘準備も同じなら、作戰命令も同じであり、宣戦も同じく *courte et énergique* (簡潔雄勁) であつた。彼自身も矢張り以前と同じであつた。彼はこれを知つてゐた。それ所か、彼は今自分が前より一層經驗も増し、手腕も熟練してゐることを承知してゐた。おまけに敵も矢張りアウステルリッツや、フリードランドの時と同じであつた——けれどおそろしい力を籠めて振り上げた手が、まるで魔法にでもか、つたやうに力無く垂れたのである。

以前必ず成功の榮冠を頂いてゐたあらゆる戦略、即ち一地點に於ける砲兵隊の集中、戦線の切断を目的とする豫備隊の突撃、*des hommes le fer* (鐵の) よりなる騎兵隊の突撃——これ等の戦略はもうすべて用ひ盡された。しかし勝利は得られないばかりでなく、將軍達が戦死したとか負傷したとか、援兵を要するとか、露西亞兵を撃破することは不可能だとか、軍隊が潰亂したとか、さう云ふ同じやうな報知が、絶えず八方から集るばかりであつた。

以前は二三度命令を發し、二二こと三三こと注意を與へると、もう元帥や副官達が愉快さうな顔付

で馳せ参じて、口々に祝辭を述べながら、戦利品として數箇軍團の捕虜、des faisceaux de drapeaux et d'aigles ennemis(敵の軍旗)その他無數の大砲や輜重を鹵獲したなど、報告した。そしてミュラートもたゞ輜重を片附けるために、騎兵を出して貰ひたいと願ひ出るだけであつた。ロッチ、マレンゴ、アルコール、イエーナ、アウステルリッツ、ヴゲラーム、その他所々方々の戦ひがさうであつた。ところが、今は彼の軍隊に奇怪なことが生じたのである。

突角堡占領の報があつたにも拘らず、ナポレオンは以前のあらゆる戦役と事態が異つてゐる——全然異つてゐると云ふことを見抜いた。また自分の味はつてゐると同じ感じを、戦争に經驗を積んだ周囲の人々も、みな一樣に味はつてゐると云ふことを見抜いた。誰の顔も悉く悲しみを帶び、一同の眼は互に避け合つてゐた。たゞ一人ボーセエだけは、現に行はれてゐる事件の意味が了解出来なかつた。しかしナポレオンは長年の戦争の經驗から、八時間に互つてあらゆる努力を費しつつ、なほかつ攻撃軍が勝利を博し得ない場合、その戦争が如何なる意味を有するかと云ふことを、よく承知してゐたのである。彼はこの戦が殆ど敗戦に等しいと云ふことも、今のやうに戦が一髪の危きに懸つてゐる場合には、極めて僅かな偶然さへ彼自身、ならびに部下の軍隊を滅ぼして了ふと云ふことも、充分知り抜いてゐたのである。

會て一回の勝利も得た事がなく、二ヶ月の間に軍旗一流、大砲一門、軍團一箇鹵獲したことを

へない、この不思議な露西亞遠征を心の中で點檢した時、また周囲の人々の愁ひを隠してゐるやうな顔を見、露西亞軍が依然として戦場を動かないと云ふ報告を聞いた時、彼はよく人が夢の中で經驗するやうな恐ろしい感じに捉へられた。そして自分を滅し得るすべての不幸な偶然が頭に浮んで來た。露西亞軍は味方の左翼を襲ふかも知れない。中央を突破するかも知れない。氣紛れな流れ弾が彼自身を殺すかも知れない。それは皆あり得ることであつた。従前の戦では成功の偶然ばかり考へたものであるが、今度は數知れぬ不幸な偶然が彼の心に浮んだ。そして彼も亦それを豫期したのである。それは丁度、悪漢に襲はれた夢でも見てゐるやうな工合であつた。人は夢中で手を振り上げて、間違ひなく對手を殺し得るものと確信して、非常な努力でその悪漢に打ち下す。ところが、その手が案外無力でへなくして、まるでぼろ布片のやうに落ちるのが感じられる。すると避け難い滅亡の恐怖が、頼りない人間を領し盡すのである。

露西亞軍が佛蘭西の左翼を攻撃すると云ふ報告は、ナポレオンの心にこの恐怖を呼び醒した。彼は土陵の下で黙つて疊み椅子に腰掛けたまゝ、頭を垂れて兩腕を膝についてゐた。ベルチエーはその傍に近づいて、一般狀況を確かめるために戦線の視察を提言した。

『何? 何と言つた?』とナポレオンは言つた。『さうだ、馬を持つて來させてくれ。』
彼は馬に跨つてセミョーノフスコエへ赴いた。

ナポレオンが馬を進めて行く平原には、砲煙が徐々として一面に擴がつて行つた。その中では馬や人間が一つづ、離れ離れになつたり、重なり合つたりして血の海に横たはつてゐた。ナポレオンも部下の將軍達も誰一人として、今迄こんな恐しい光景を見たことがなかつた。實際こんな小さい範圍内に、これ程多くの戦死者を見るのは始めてであつた。十時間も引き續いて絶え間なく耳を聳する大砲の響は（丁度活人畫に對する音樂のやうに）この光景に特種な意味を添へた。ナポレオンはセミヨールノフスコエの高地へ登つて、見慣れぬ色の軍服を着けた人間の列を、煙を透して見分けた。これは露西亞兵であつた。

露西亞軍はセミヨールノフスコエと土陵の背後に、密集隊となつて竝んでゐた。彼等の發する砲弾は斷え間なく轟き渡つて、戦線に硝煙を漂はせてゐた。もう戦争ではなかつた。それは露西亞軍にとつても、佛蘭西軍にとつても何の役にも立たない、殺戮の連續に過ぎなかつた。ナポレオンは馬を止めて再び冥想に耽つた。彼を呼び醒したのはベルチエーであつた。彼は自分の眼前や周圍に行はれてゐる事——今まで自分に指揮され左右されるやうに思つてゐた事件を、最早押し留めることが出来なかつた。彼は今度の失敗によつて、始めてこの戦争が無益な、恐るべき事のやうに思はれて來た。

ナポレオンの傍へ馬を乗りつけた將軍の一人は、舊近衛隊を出動させてほしいと申し出た。ナ

ポレオンの傍に立つてゐたネイとベルチエーは眼を見交して、この將軍の無意味な申出を輕蔑するやうに微笑した。

ナポレオンは頭を垂れて、長い間おし黙つてゐた。

『A huit cent lieux de France je ne ferai pas démolir ma garde (むちは佛蘭西からはる／＼三千露里もやつて來て、自分の近衛隊を破壊させた)』と彼は言つた。そして馬首を轉じてシェヴールヂノへ立ち去つた。

三五

クトゥゾフは白髪はくはつの頭を垂れて、絨氈ベンチをかけた腰掛ベンチに重さうな體をぐたりとおろしてゐた。

それは今朝ピエールが會つたのと同じ場所であつた。彼は命令などまるで出さうとしないで、たゞ他人の提言に賛成したり、しなかつたりするだけであつた。

『さうだ、さうだ、さうしてくれ。』彼は様々な提言に對してかう答へたり、『さうだ、さうだ、君一つ行つて見てくれ』と幕僚の誰彼に言つたり、時には又、『い、や、そんな必要はない。も少し待つた方がい、。』と言つたりした。彼は人々の齋す報告を聞いてゐた。たゞ部下に要求される時だけ、何彼の命令を發するのであつた。彼は報告を聞いてゐる間にも、語られる言葉の意味よりも、むしろ報告する人の表情や、語調に現れる何物かに、興味を感じてゐるやうであつた。

彼は長年の軍事上の経験と老人の叡智によつて、死と戦つてゐる數十萬の人間を、一人で指揮することが出来ないのを、よく腹の底から了解してゐた。また戦の運命を決するものは總指揮官の命令でもなければ、軍隊の占めてゐる場所でも、大砲や戦死者の数でもない、たゞ士氣と呼ばれる捕提し難い力だといふ事も承知してゐた。それ故彼はこの力を絶えず注視して、自分の権力の及ぶ限りそれを指導してゐるのであつた。

概してクトゥゾフの顔に浮んでゐる表情は、集中した穩かな注意と、弱々しい老體の疲勞に辛じて打ち勝つてゐるやうな緊張感であつた。

午前十一時ごろ、一旦佛蘭西軍に占領された突角堡は、再び露西亞軍に奪還されたが、しかしバグラチオン公爵は負傷した、といふ報告が届いた。クトゥゾフはあつと言つて頭を振つた。

『ビョートル・イワーノギッチ公爵のところへ行つて、何がどうなつたのか、詳しい様子を訊いて来てくれ。』彼は副官の一人にかう吩咐けると、直ぐ後ろに立つてゐたギルテンベルヒ大公に聲をかけた。

『殿下、恐れ入りますが、第二軍を指揮して頂けませんでせうか。』

大公が出發してから、まだセミョーノフスコエまで行き着くまいと思ふ頃、間もなく大公付の副官が歸つて来て、大公が援軍を要求してゐられる由を總指揮官に報告した。

クトゥゾフは顔を擧めて、ドフトーローフに第二軍指揮の命令を授けた。そして大公の方へは別に使を出して、殿下の力を俟たなければ、この重大な瞬間を切り抜けることが出来ないから、また自分の傍へ歸つて欲しいと頼んだ。ミュラートを捕虜にしたといふ報が来て、參謀官達がクトゥゾフに祝辭を述べたとき、彼は莞爾と微笑した。

『諸君、まあ少し待ち給へ。』と彼は言つた。『戦争は味方の勝利だ。だからミュラートを捕虜にしたつて別に驚く事はない。喜ぶのはもう少し待つた方がよい。』

が、それでも彼は副官を遣はして、この吉報を各隊に傳へさせた。

やがて左翼からシチェルビーニンが、佛蘭西軍の突角堡及びセミョーノフスコエ村占領の報告をもつて駆け着けた。クトゥゾフは戦場の響とシチェルビーニンの顔色によつて、餘り香ばしくない報告だなど見て取つた。彼は足を伸すやうな風付で立ち上り、シチェルビーニンの手を取つてわきの方へつれて行つた。

『君、一つ行つて来てくれないか。』と彼はエルモーロフに言つた。『どうにかならないか見て貰ひたいのだ。』

クトゥゾフは露西亞陣地の中央に當るゴールキにゐた。ナポレオンが我軍の左翼へ向けた突撃は、幾度となく撃退された。中央部の佛蘭西軍はボロヂノより先へ進めなかつた。遂にウヴロー

フの騎兵隊は佛蘭西軍を左翼から敗走せしめた。

二時過ぎに佛蘭西軍の突撃は中絶した。クトゥゾフは戰場から来る者の顔にも、自分の周囲に立つてゐる者の顔にも、極度に緊張した表情を讀んだ。クトゥゾフは豫期を越ゆるその日の成功に満足した。しかし體力はこの老人を裏切つた。彼の頭は落ちるやうに幾度も低く垂れた。やがて彼は居眠りを始めた。その時晝餐が薦められた。

丁度食事の時に、皇帝付副官のブルツォーゲンが、クトゥゾフのところへやつて来た。これは昨夜アンドレイ公爵の傍を通りすぎりに、戦争は *im Raum verlegen* (廣い空間へ移さなければならぬ) と言つた當人で、常々バグラチオンにひどく憎まれてゐた。ブルツォーゲンは左翼の戦況報告を齎して、バルクライのところから来たのである。聰明なバルクライ・ド・トリーは、負傷兵が群をなして走ると、後方部隊が潰亂したのを見ると、あらゆる事情を綜合して判断した結果、戦ひは敗北と決めて了つた。この報告を氣に入りの副官に托して、總指揮官の許へ送つたのである。

クトゥゾフは焼いた鶏肉をやつとの事で噛みながら、愉快さうに眼を細めてブルツォーゲンを見やつた。

ブルツォーゲンは無造作に兩足を伸し、半ば輕蔑したやうな微笑を唇に浮べながら、目庇に軽く手を當ててクトゥゾフに近寄つた。

ブルツォーゲンは幾分わざとらしく無造作な態度で閣下に話しかけた。それはつまり「おれは高等教育を受けた軍人だ。だからこの老い耄れた役にも立たない老人を、露西亞人共が幾ら偶像のやうに有難がらうと勝手だが、併し俺はその正體をよく知りぬいてるぞ」と云ふ腹を見せるためであつた。「Der alte Herr (老紳)——彼の仲間の獨逸人達はクトゥゾフをかう呼んでゐた。——*nacht sich ganz bequem* (呑氣さうに構へ)」とブルツォーゲンは考へた。そしてクトゥゾフの前に竝んでゐる皿を、嚴つい目附でちらと見やりながら、バルクライから命じられた通りに、自分が見かつ理解した範圍内で、左翼の戦況を老紳士に報告し始めた。

『我が陣地の要處々々は残らず敵の掌中に陥つて、しかもそれを撃退すべき方法がありません。つまり軍隊がないからです。兵は敗走してゐますが、それを留めることは到底不可能です。』と彼は報告した。

クトゥゾフは口をもぐぐ動かすのを止めて、相手の言つたことが分らないか何ぞのやうに、吃驚したやうな目付でブルツォーゲンを見詰めた。ブルツォーゲンは *der alte Herr* の動亂を見て取ると、薄笑ひを浮べながらかう言つた。

『わたくしは自分の見たことを、閣下に隠し立てする權利がないと思ひまして、有りの儘を申し上げたのでございます。軍隊は全然潰亂状態に陥つて……』

『君が見たつて？ 君が見たつて？……』クトゥゾフはつと立ち上つて、ブルツォーゲンの傍へ詰め寄りながら、眉を顰めてかう叫んだ、『どうして君は……どうして君は大膽にも……』彼は慄へる手で脅すやうな身振をして、咽せかへりながら呶鳴りつけた。『どうして君は大膽にも、わしに向つてそんなことが言へるのだ？ 君は何も知らないのだ。バルクライ將軍にわしがさう言つたと傳へてくれ給へ——あの人の報告は間違つて居る、戦ひの真相は總指揮官たるこのわしの方が、將軍よりもよく承知してをるとな。』

ブルツォーゲンは何か言ひ返さうとしたが、クトゥゾフはそれを遮つた。

『敵は左翼でも撃退されるし、右翼でも敗走してゐる。それが君によく分らないなら、どうか自分の知らないことを、差出がましく言はないやうにして貰ひたい。一つバルクライ將軍のところへ行つて、明日わしは必ず敵を攻撃するつもりだと言つてくれ給へ。』クトゥゾフは嚴然としてかう言ひ切つた。

一同はじつと黙つてゐた。たゞ興奮してはあく／＼と喘いでゐる老將軍の、重々しい呼吸が聞えるばかりであつた。

『敵は到る處で撃破された。それをわしは天帝竝にわが勇敢なる軍隊に感謝してゐる。敵は敗滅したのだ。もう明日は神聖なる露西亞の土から追ひ拂はれて了ふのだ。』クトゥゾフは十字を切

りながらかう言つたが、俄かにせぐり上げる涙に咽せ返つた。

ブルツォーゲンは肩を窄めて唇を歪めながら、über diese Eingenommenheit des alten Herrn (老紳士の頑冥固陋) に呆れながら、無言のまゝ、わきの方へ離れた。

『あア、歸つて来た——わが英雄だ。』この時土陵の中へ入つて来た、髪の黒い、肥つた美しい將官に向つて、クトゥゾフはかう言つた。

これはボロヂノ戦役の主要な地點で、この一日を過したラーエフスキイであつた。

ラーエフスキイは我軍が各々己れの部署を固く守つてゐるので、佛蘭西軍も最早攻撃を試みる勇氣がなくなつたと報じた。

この報告を聞き終ると、クトゥゾフは佛蘭西語でかう言つた。

『Vous ne pensez donc pas comme les autres que nous sommes obligés de nous retirer (ちやあ、君は他の人達のやうに、我軍が退却しなければならぬとは考へないのだね？)』

『それ所ではありません、閣下、却つて勝負の決し難い場合には、常に根氣の強い方が勝利者であります。』とラーエフスキイは答へた。『ところで、わたしの意見は……』

『カイサーローフ！』とクトゥゾフは自分の副官を呼んだ。『君こゝへ坐つて、明日の命令を書いてくれ。ところで、君は』と彼は今一人の副官の方へ振り向いた。『これから戦線を廻つて、

明日は此方から攻撃だとふれて来い。』

クトゥゾフがラーエフスキイと話を続け、副官が口授される命令を書き取つてゐる間に、ブルツォーゲンがバルクライのところから引つ返して来て、バルクライ・ド・トリー將軍が、元帥から與へられた命令を、書面で確認して貰ひたいと望んでゐる旨を告げた。

クトゥゾフはブルツォーゲンの方を見向きもせず、その命令を書くやうに吩咐けた。前總指揮官は自己の責任を廻避するために、かうした正式の命令書を取つて置きたいと云ふ、極めて道理のある希望を抱いたのである。

普通士氣と呼ばれて、戦争の中樞神経となつてゐる同一の心持を、軍全體に互つて維持する連鎖——確たる定義を下すことの出来ない不可思議な連鎖によつて、クトゥゾフの言葉と明日の戦に對するその命令は、同時に軍隊の隅から隅へと傳はつた。

彼の言葉や命令は、この連鎖の一番最後の環まで傳へられた時には、決して最初のまゝではなかつた。各隊の末端部で人々が傳へ合つた話は、すこしもクトゥゾフ自身の言葉に似通つたところを持つてゐなかつた。しかしその言葉の意味は到る處に傳はつた。なぜと言つて、クトゥゾフの言葉は計略や駆引きから出たのでなく、總指揮官の心にも亦すべての露西亞人の心にも、一樣に潜在してゐる感情から流れ出たものだからである。

困憊の極動搖を感じ始めた士卒も、明日わが軍が敵を攻撃すると云ふことを知つたとき——自分達の信じたいと思ふ風説を、軍の最高幹部から裏書されたとき、一同は急に慰安を感じて元氣づいたのである。

三六

アンドレイ公爵の聯隊は豫備の方へ廻された。豫備隊はセミョーノフスコエの後方で、猛烈な砲火を浴びながら無爲の中に立つてゐた。二百人以上の兵員を失つたこの聯隊は、一時過にセミョーノフスコエと土陵砲臺との間にある、燕麥畑へ進出を命じられた。そこはこの日數千の人が戦死した處で、午後一時過には、數百門の敵砲が一齊に烈しい砲火を集中してゐた。

聯隊はじつとその場から動きもせず、一發の彈丸も發しないで、更に兵員の三分の一を失つた。前面——殊に右の方から、散りもあへぬ砲煙の裡に大砲が轟いてゐた。そして前方を一面に覆うてゐる神祕的な煙の中から、しゅと云ふ速い唸り聲を立てる砲弾や、緩い口笛を吹くやうな榴散弾が、間斷なく飛んで來るのであつた。どうかすると、一寸休ましてやらうとでも云ふやうに、十五分ばかりの間、砲弾や榴弾が残らず頭上を飛び過ぎることもあつたが、しかし又どうかすると、一分ぐらゐるの間に、四五人の兵士が聯隊から引つこ抜かれて、絶間なく戦死者を引き摺

つて行つたり、負傷者を運び去つたりすることもあつた。

新たに砲彈が飛んで來る度に、まだ殺されない者の生き残る可能がますます／＼少くなつた。聯隊は大隊縱隊をなして三百歩の距離に跨つてゐたが、それにも拘らず、一同は打ち揃つて同じ氣分に支配されてゐた。誰も彼も、同じやうに陰鬱な沈黙を守つてゐた。時たま列の間に話し聲も聞えたが、砲彈が落ちて『擔架！』と叫ぶ聲が聞える度に、この話し聲は直ぐぶつたり途絶えて了ふのであつた。聯隊の兵卒は上官の命令によつて、大抵は地びたに坐つてゐた。或る者は軍帽を取つて丁寧に鞞を伸したのち、また元の通りに裝を拵へてゐるし、或る者は乾いた粘土を掌で揉み碎いて、それで銃劍を磨いてゐた。また或る者は吊革を揉み柔けて、金具を引つ張つてゐるし、或る者は一生懸命に脚絆を解いて新しく巻き直したり、靴を履き代へたりしてゐるし、或るものは野の灌木で小家を建てたり、刈り入れあとの畑から麥藁をとつて來て、編細工を作つたりしてゐた。誰も彼もこんな仕事で夢中になつてゐるやうに思はれた。人が負傷したり戦死したりしても、擔架が列をなして續いても、わが軍が後方へ引つ返しても、煙を透して敵の大軍が見えても、誰一人そんな事に注意を拂ふ者はなかつた。尤も砲兵や騎兵が前進したり、味方の歩兵の運動が見えたりすると、満足の言葉が四方に起つた。しかし、何より一番彼等の注意を惹いたものは、戦争に何の關係もない、まるつ切の他愛のない事柄であつた。精神的に疲弊し盡したこれ等

の人々の注意は、かういふ有りふれた日常茶飯事に依つて、休息を感じてゐるやうな鹽梅であつた。ある砲兵の中隊が聯隊の正面を通つて行つた。と、彈藥車を曳いてゐる一頭の側馬が、引き綱に足を絡ませた。『おい、側馬を見ろ！：：足を外してやらんか！ 倒れつちまふぞ：：ちよつ、氣が付かないんだ：：』聯隊全部の各列から、かう云ふ同じ叫び聲が聞えた。次に一同の注意を惹いたのは、茶色の小犬であつた。何處から舞ひ込んだのか分らないけれど、ぴんと威勢よく尻尾を巻き上げて、急がしさうに小刻みな足取りで列前へ駆け出したが、不意に傍近く落下した砲彈に驚いて、きやん／＼と悲鳴を上げながら、尻尾を巻いてわきの方へ飛び退いた。どつと云ふ高笑ひと叫び聲が聯隊ぢうに鳴り響いた。しかしさう云ふ種類の氣晴しはほんの一二分間しか續かなかつた。人々はもう八時間以上飲まず喰はずで、斷えず死の恐怖に襲はれながら、何もせずにはぼんやり立つてゐたのである。そして彼等の蒼ざめた顎み勝ちな顔は、ますます／＼蒼ざめて鞞が深くなつて行つた。

聯隊の士卒と同様に、蒼白い顔を擧めたアンドレイ公爵は、両手を後ろに組んで頭を垂れたまま、燕麥の畑に隣つた草場の上を、畦から畦まで行つたり來たりしてゐた。もう何一つする事も、吩咐ける事もなかつた。すべては自然に運んで行つた。戦死者は戦線外へ引き摺つて行かれるし、負傷者は運び去られるし、空いた處は塞つた。兵士らは何處かへ駆け出して行つても、直

ぐに急いで歸つて來るのであつた。初めはアンドレイ公爵も、兵士等の勇氣を振興し、彼等に範を垂れるのを義務と思つたので、列の前を歩き廻つてゐたが、やがて間もなく、今更何も教へる必要はないと云ふことを悟つた。彼の精神力は殆ど無意識に、すべての兵士と同じく、自分の恐しい境遇を見まいとする努力のみに向けられてゐた。彼は足を引き摺つたり、草をさら／＼鳴らしたり、靴一面に被つてゐる埃を見つめたりしながら、草場の上を歩くのであつた。時には草刈が残してゐる足跡を踏むやうに大股で歩いて見たり、時には自分の足数を勘定して、一露里歩くには畦から畦まで、何回往復しなければならぬかと測つて見たり、時には畦に生えてゐる苦蓬（にがよもぎ）を引き千切り、その花を掌で揉んで、苦みを帯びた香ばしい強烈な匂を嗅いだりした。昨日の思索の跡は少しも彼の心中に残つてゐなかつた。彼は何も考へなかつた。たゞ絶えず依然たる音響に疲れた耳を傾けながら、發砲の音と飛彈の唸りを聞き分けたり、第一大隊の兵士等の見飽きた顔を眺めたり、彈丸が飛んで來るのを待つたりした。「そら來た……こいつもまた我々の方だ！」掩ひ包まれた煙の領域から、次第に近づく何物かの唸りに耳を澄しながら、彼はかう考へた。「一つ、もう一つ！ またやつて來た！ 落ちたな……」彼は立ち止つて列を見渡した。「いや、飛び越した。だが、今度こそ落ちたぞ。」かう考へて彼はまた歩きに掛つた——十六歩で畦まで行き着かうと、出來るだけ足を大きく擴げながら。唸りと爆發！ 彼から五歩ばかり前の乾いた

地面に穴があいて、砲彈が隠れた。思はず寒けがさつと彼の背筋を走つた。彼は再び列を見やつた。大勢の兵卒が撥ね飛ばされたらしく、第二大隊の傍には一杯人が集つてゐた。

『副官、』と彼は叫んだ。『ひと所へ塊らないやうに命令してくれ給へ。』

副官は命を果して、アンドレイ公爵の傍へ來た。一方からは大隊長が馬に乗つて近寄つた。

『あぶない！』一人の兵士の恠えたやうな叫びが聞えたと思ふと、囀りの聲を立て、矢のごとく飛びながら、地上へ降りた小鳥のやうに、アンドレイ公爵から二歩ばかり距てた大隊長の馬の傍で、榴彈が餘り高い響を立てずにぐしやりと落ちた。馬は恐怖を表してよいか悪いか問ふ違もなく、先づ第一番に鼻を鳴らし、危く少佐を振り落さんばかりに棒立ちになつて、わきの方へ飛び退いた。馬の恐怖は人間に傳はつた。

『伏せ！』地びたに臥た副官がかう叫んだ。

アンドレイ公爵は決し兼ねたやうに立つてゐた。榴彈は煙を發しながら、畑と草場の端に茂つた苦蓬の傍に臥てゐる、副官と公爵の間を獨樂のやうにく／＼廻つてゐた。

「これが一體死なんだらうか？」アンドレイ公爵は全く新しい羨望の眼をもつて、草や、苦蓬や、旋回する黒い毬から舞ひ上る煙の流れを見ながら、かう考へた。「俺は死ぬことが出來ない。死にたくない。俺は生活を愛してゐる。この草と土と空氣を愛してゐる……」彼はかう考へ

ると同時に、皆が自分を見てゐるのを意識した。

『恥かしい事ぢやないか、君！』と彼は副官に言つた。『何と云ふ……』

彼は終ひまで言ひ切らなかつた。同時に炸裂の響と、壊れた棒のかげらのやうな物がひうと唸る音がして、火薬の匂がむつと鼻を打つと、アンドレイ公爵はわきの方へけし飛ばされて、片手を上げたまゝ、胸を下に倒れた。

幾人かの將校がその傍へ駆け寄つた。右の脇腹からは大きな血の汚點が草の上に流れ擴つた。命令で擔架を持つて來た民兵は、將校達の後ろに立ち止つた。アンドレイ公爵は胸を下へ向け、顔を草に押しつけて倒れたまゝ、しや嘎れた聲を立てながら苦しきうに息をついてゐた。

『さあ、何をぼんやり立つてゐるのだ、傍へよれ！』

百姓達は近寄つて、彼の肩と足に手を掛けた。けれど彼がさも慄れつばい呻きを立てたので、百姓達は互に顔を見合せながら、また下へおろした。

『さあ、載せろ、どうせ同じことだ！』と誰かの聲が叫んだ。人々は再び彼の肩を持つて擔架に載せた。

『あゝ、何と言ふこつた、本當に何と言ふこつた！腹部に命中するとは！これぢや駄目だ！あゝ、何といふこつた！』と言ふ聲が將校達の間に聞えた。

『耳の直ぐ傍を唸つて行つた、本當に間一髪だつたよ。』と副官は言つた。

百姓達は擔架を肩の上に落ち付けると、自分達の踏みならした路を繃帶所へ急いだ。

『足を揃へて歩け……ちよつ……百姓めら！』不揃ひに歩いて擔架をぐらぐらさせてゐる、百姓達の肩先を掴まへて押し止めながら、一人の將校がかう言つた。

『俺の足に合せろよ、え、フエードル、やい、フエードル。』と前に立つた百姓が言つた。

『いや、成程、これは素的だ。』後棒の百姓は歩調が合つたので、嬉しさうにかう言つた。

『聯隊長殿、もし公爵？』チモーヒンは駆け寄つて、擔架の中を覗き込みながら、慄へ聲でかう呼んだ。

アンドレイ公爵は眼を見開いて、擔架の中に深く頭を沈めたまゝ、自分に話し掛ける者を見やると、そのまゝ、再び目蓋を閉ぢて了つた。

運搬車などが置いてあつて、繃帶所になつてゐる林の傍へ、民兵達はアンドレイ公爵を運んで行つた。繃帶所は白樺林の端に張られた三つの天幕であつた。天幕の裾は捲き上げられてゐた。林の中には運搬車と馬が立つてゐるが、馬が飼糧囊の中で燕麥を喰べてゐると、雀の群がその傍へ飛んで來て、こぼれた粒を拾つてゐた。鳥は血の臭を嗅ぎつけて、待ち遠しさうに鳴きなが

ら、白樺の間を飛び廻つてゐた。天幕の周りでは二町歩^{アシヤチナ}以上に互つて、思ひ思ひの服装をした人達が血みどろになつて、臥たり坐つたり立つたりしてゐた。負傷兵の周囲には、注意ぶかい沈んだ顔附をした擔架卒が群れてゐた。秩序整頓の任務を帯びた將校達は、この連中をその場から追ひ拂はうと、空しく骨を折つてゐた。擔架卒は將校の命令も聞かないで、擔架に凭りかゝつた儘じつと立つてゐた。そしてこの光景の惱ましい意味を解かうとでもするやうに、自分達の眼前で行はれる事を、一心に見守つてゐた。天幕からは意地悪さうな烈しい泣き聲や、慄れつばい呻き聲が交るゝ聞えた。時々中から看護卒が水を取りに駈け出して、次に擔ぎ入れる者を指定して行つた。負傷兵達は天幕の傍で自分の番を待ちながら、しやゝれ聲を出したり、呻いたり、泣いたり、叫んだり、罵つたり、火酒^{ソルト}を求めたりした。中には謔言をいつてゐる者もあつた。アンドレイ公爵は聯隊長と云ふので、まだ繃帯をしない負傷者達を跨ぎ越して、とある天幕の傍へ運ばれた。人々はそこで命令を待ちながら立つてゐた。アンドレイ公爵は眼を見開いたが、自分の周囲がどうなつてゐるのか、長い間悟ることが出来なかつた。彼は草場と、苦蓬と、畑と、くるくる廻る黒い毬と、自分の生に對する愛着の熱烈な發作を想ひ出した。二歩ばかり隔つた處に、頭を繃帯した、脊の高い美しい黒髪の下士が、杖に凭れかゝりながら、何やら大聲に喋つてゐるのが、一同の注意を惹いた。彼は銃丸で頭と脚に負傷してゐた。周りには負傷者や擔架卒が群がつ

て、貪るやうにその話を聞いてゐた。

『俺達がうんとやつ付けてやつたので、やつら何もかも棄て、逃げちまつたんだ。俺達は王まで捕虜にしたんだからなあ。』下士は黒い熱した眼を輝かして、邊りを見廻しながらかう叫んだ。

『丁度その時豫備さへ來りやアなあ、跡も形もないやうにしてやつたんだがなあ。だから本當に俺の言ふ通り……』

アンドレイ公爵は、話手を取り巻いてゐる人達と同じやうに、眼を輝かして其の顔を見つめながら、心中慰藉の念を感じるのであつた。「しかし今はもうどうなつたつて同じこつた。」と彼は考へた。「一體あの世にはどんなことがあるんだらう、そしてまた此の世にはどんなことがあつたと云ふのだ？ どうして俺は生に別れるのがあんなに辛かつたのだらう？ 屹度この世の生活には俺に理解の出来なかつた、そして今も理解出来ない何物かがあつたのだらう。」

三七

血だらけの胸當を着け、血だらけの小さな手をした軍醫の一人が、葉巻を(汚さないやうに)小指と親指の間に挟んだま、天幕から出て來た。この軍醫は頭を上げて邊りを眺め始めたが、その視線は負傷者より上の方に注がれてゐた。察する所、暫く休息したかつたらしい。彼は暫く頭を

右左に動かしてゐるが、やがて溜息をついて眼を落した。

『うん、今直ぐ。』アンドレイ公爵を指さす看護卒の言葉にかう答へて、彼は天幕の中へ入るやうに命じた。

待ちかねた負傷兵の間に不平の聲が起つた。

『どうやら、あの世でも旦那だけが樂をするらしい。』と一人が言つた。

アンドレイ公爵は天幕へ運ばれた。そしてたつた今看護卒が水を掛けて、何やら洗ひ落したばかりの手術臺へ載せられた。アンドレイ公爵は天幕の中にある物を、一々見分けることが出来なかつた。邊りに聞える唸れつばい呻き聲と、脇や腹や脊の惱ましい痛みが、彼の注意を掻き亂したのである。彼が自分の周囲に見たものは、みんな血みどろになつた露はな人間の體といふ、一つの概括的な印象に溶け合つて了つた。この露はな肉體は幾週間か前、あの暑い八月の日に、スモレンスク街道の汚い池を充してゐるが、今もこの低い天幕に溢れてゐるやうに思はれた。さうだ、これはあの時の肉體だ。あれと同じ chair à canon (大砲の餌食) だ。あの時もこの肉塊を見ると、まるで今日を豫言するやうに、自分の心に恐怖を呼び醒したではないか。

天幕の中には三つの手術臺があつた。その中二つは塞がつてゐるので、アンドレイ公爵は三つ目の臺に載せられた。暫くたつた一人取り残されてゐるので、彼は他の二つの臺でしてゐること

を、見るともなしに見て取つたのである。手近な方の臺には韃靼人が坐つてゐた。その傍に投げ出されてゐる軍服で察する所、どうやら哥薩克らしかつた。四人の兵卒が彼を押へてゐた。眼鏡をかけた軍醫が、膚色をした筋骨逞しい脊中の何處かを切つてゐた。

『うー、うー、うー……』と韃靼人は丁度豚が鼻を鳴らすやうに唸つてゐるが、俄かにその頬骨の高い、鼻の平たい、色の黒い顔を持ち上げて、白い歯を剥き出しながら、もがいたり暴れたり、刺すやうな響の高い聲で、引き伸すやうに叫んだりし始めた。人が大勢周りに集つてゐる今一つの臺の上には、大柄な肉付のい、男が頭を後ろへ反らして、仰向けに横たはつてゐた(波を打つた髪の毛や、その色合や、頭の形など、アンドレイ公爵は妙に見覚えがあるやうに思はれた)。幾人かの看護卒が胸の上へ乗しか、つて、この男を抑へつけてゐた。白い肥つた片足は目まぐるしく、熱病やみのやうにびく／＼引つ吊つてゐた。男は痙攣的にしやくり上げたり咽せ返つたりした。二人の軍醫は黙つて——その中一人の方は眞蒼な顔をして、わな／＼慄へてゐた——男の眞赤になつた片足をどうかしてゐた。韃靼人の始末をつけて、上から外套を掛けると、眼鏡の軍醫は手を拭きながら、アンドレイ公爵の傍へ近づいた。

彼はアンドレイ公爵の顔をちらと見ると、急いでそつぽを向いて了つた。

『服を脱がせる！ 何だつてぼんやり立つてゐるんだ？』と彼は腹立たしさうに看護卒を呶鳴り

アナトリーは苦しげに咽び泣いた。「さうだ、あの男だ。さうだ、俺とあの男はなぜかしら重苦しい因縁で、しつかりと結び合されてゐるのだ。」アンドレイ公爵は自分の眼前に生じた出来事を、まだ充分合點する事が出来ないでかう考へた。「だが俺の幼年時代と——俺の生活とあの男との關係は、一體何處にあるのだらう？」と彼は自問したが、答を見出すことが出来なかつた。ふと、アンドレイ公爵は、幼年時代の潔白な愛に充ちた世界から、いま一つ新しい追憶を想ひ浮べた。彼はナターシャを想ひ起したのである。それは千八百年の舞踏會で初めて見たナターシャであつた。頸も手もほつそりして、今にも歡喜に移ることの出来さうな、憎えたやうな幸福の色を顔に現してゐるナターシャであつた。すると彼の心にはナターシャに對する戀しさと懐かしさが、かつて經驗した事のないやうな活氣と力をもつて眼を醒した。彼は今脹れた眼に滿ち溢れる涙を透して、どんより自分を眺めてゐるこの男と、自分との關係を想ひ出した。アンドレイ公爵は何もかも思ひ出した。と、人間に對する感激に充ちた憐愍と愛とが、彼の幸福な胸を一杯にしたのである。

アンドレイ公爵はもう我慢できなかつた。彼は優しい愛に充ちた涙を流して、他人や自分や、又われ人共に抱いてゐる迷ひのために泣いた。

「同胞と、そして愛する者に對する憐愍と愛だ。我々を憎む者に對する愛、敵に對する愛だ。」

さうだ、つまり神がこの地上で宣傳した愛だ。妹のマリヤから教へられながら、理解することの出来なかつたその愛だ——このためにおれは生に未練があつたのだ。もし俺が生きてゐるとすれば、これこそ俺のために残された唯一のものだ。けれど今ではもう遅い。俺にはそれがちやんと分つてゐる！」

三八

死體と負傷者に蔽はれた戦場の物凄しい光景は、頭の中の重苦しい感じと、親しく知つてゐた二十人に近い將軍達の死傷の報知と、曾て強力であつた自分の腕が、今やその力を失つたと云ふ意識と一緒になつて、ナポレオンに意外な印象を與へたのである。彼はいつも戦死者や負傷者を點檢して(彼の考へてゐるところによれば)、自分の精神力を試すことを好んでゐたが、この日戦場で見た恐しい光景は、自分の功業と偉力の源泉と信じてゐた、彼の精神力を壓倒して了つたのである。彼は急いで戦場を去つて、シェヴルチノの土陵へ歸つた。彼は黄色く脹れた重苦しい顔をして、我ともなく砲聲に聞き入りながら、眼を伏せたま、疊み椅子に腰掛けてゐた。その眼はどんより濁つて、鼻の先は赤くなり、聲はしや嘎れてゐた。彼は病的な惱ましさを感しながら、戦ひの終結を待つてゐた。自分はこの事件に深い關係があると承認しながら、而もそれを沮す

ることが出来なかつたのである。一寸の間、個人としての人間らしい感情が、彼の長年奉仕してゐた技巧的な生活の幻影に打ち勝つた。彼は戦場で見た苦痛や死を自分の上に移して見た。頭や胸の重苦しさは、彼自身にも苦痛や死の襲來が可能であることを想ひ起させた。彼はこの瞬間、莫斯科も勝利も名譽も（もう今更名譽など何の必要があらう！）欲しいと思はなかつた。たゞ一つ今の彼が望んでゐるのは、休息と平安と自由であつた。けれど彼がセミョーフスコエの高地へ赴いた時、この高地に幾個所かの砲陣を敷いて、クニャジコーゾの前に群がつてゐる露西亞軍へ、砲火を集中しようと云ふ砲兵司令官の提議を聞くと、彼はそれを承認して、その砲陣がどう云ふ結果を齎すか、報告するやうに命じた。

やがて一人の副官がやつて来て、皇帝の命令どほり二百門の砲を露西亞軍へ向けたが、露西亞軍は依然として同じ所に立つてゐると報告した。

『わが砲火は敵を一時に一列づ、撃ち倒して居りますが、彼等は矢張り退きません。』と副官は言つた。

『Ils en veulent encore ! (奴等はまたやつ付け)』とナポレオンはしや嘎れ聲で言つた。

『Sir (離)』と副官は聞きはぐつてかう訊いた。

『Ils en veulent encore !』とナポレオンは眉を擧めてしは嘎れ聲を絞つた。『donnez leur-en

(だからもつと喰はしてやれ。』)

彼の望まなかつた事は、彼の命令なしに行はれたのである。彼がこんな命令をしたのは、たゞ皆が自分から命令を待つてゐるやうに思はれたに過ぎない。かうして彼は再び、依然たる偉大といふ幻影の技巧的世界に返つて（工場の車輪を廻してゐる馬が、自分のために何かしてゐるやうに思ふのと同様）、自分に授けられた残酷にして悲痛な、重苦しい非人間的役割りを、再び従順しく實行し始めた。

事件の關係者中、誰より一番責任を負擔してゐる、この人の理性と良心が晦まされたのは、何もこの時この日に限つたことではない。彼は一生涯のあひだ最後の日まで、善も、美も、眞も、また自己の行爲の意義も、理解することが出来なかつた。なぜと云つて、その意義を理解すべく、彼の行爲が餘りに善と正義に反し、餘りに一切の人間らしい事柄から隔たつてゐたからである。彼は世界の半ばから讚美された自分の行爲を、否定することが出来なかつた。従つて正義とか、善とか、その他あらゆる人間的なものを否定しなければならなかつた。

彼は戦死者や負傷者の算を亂してゐる（それは彼の考へに依ると、彼の意志によつて行はれた事なのである）戦場を巡廻して、これ等の人々を眺めながら、佛蘭西兵一人に對して露西亞兵が幾人に當るか數へて見て、佛蘭西兵一人に對して露西亞兵五人と云ふことを知つた時、自分で自

分を欺きながら喜びの理由を見出したが、併しそれは敢てこの日に限つた事ではない。彼が『*le champ de bataille a été superbe*』(戰場は實に壯麗であつた。)何故なれば、そこには五萬の死體があつたから。』などと巴里へ書き送つたのは、嘗にこの日ばかりではなかつた。しかし彼は聖ヘレナの島に靜かな孤獨の生活をしてゐる時、自分の行つた偉大な事業の記述に、餘暇を捧げるつもりで、こんなことを書いた。

『露西亞戦争は近代に於て最も著名な戦役たるべきであつた。これは常識と純眞なる利益の戦争であつた。すべての者に安全と平和を與ふる戦争であつた。それは純平和的かつ保守的戦争であつた。』

『この戦争は偶然の災厄に終末を與へて、平和の基礎を置くといふ、偉大なる目的のために行はれたのである。それは新しい未來と新しい事業を展開し、人類に完全なる安寧と福祉を齎すべき戦ひであつた。歐洲同盟は既に礎を置かれてゐるから、問題はたゞそれを如何に組織すべきかと云ふ點に留まつた筈なのである。』

『これ等の大問題に満足を得、至る處に精神の安靜を贏ち得たる後、余もまた自ら國際會議と神聖同盟を起すことは難事ではなかつたであらう。これらは余の思想を剽竊したものである。この諸大國元首の會合に於て、我等は各自の利害を家庭的に評議し、恰も番頭が主人に對する如く、』

我等も國民と利害問題を計つた筈なのである。

『斯くの如くして、歐羅巴は幾ばくもなく事實上一箇の無差別なる國民を形成し、人は如何なる土地を旅行するも、常に共通の故郷にゐるやうな感を抱いたに相違ない。』

『余はすべての河川が萬人のための航路となり、海洋が公海となり、巨大なる常備軍が單に皇帝の親衛隊に縮少される事を宣言したであらう。』

『もし偉大にして力あり、壯麗にして平和なる、美しき祖國佛蘭西へ歸るを得たなら、余はその國境を永久不變と定め、かつ未來に於ける一切の戦ひは常に防禦戰たるを要し、すべての新しき領土擴張は非民族的行爲と見做さるべき旨を、宣言するつもりであつた。而して我子を帝國に結合し、余の獨裁政治に終局を與へ、我子をして立憲政治を開始せしむる筈であつた。』

『その時巴里は世界の首都となり、佛蘭西人はあらゆる民族の義望の的となつたであらう。』
『次に余は我子が帝王學を修めつ、ある間、晩年の餘暇を擧げて悉く旅行に捧げる積りであつた。皇后と共に紛ふ方なき田夫田婦の如く、自用の馬車に乗じて徐ろに國內の隅々隈々を訪れ、民の訴を聽いて不正を退け、至る處に記念建築物と恩恵を撒き歩く心算であつた。』

神の攝理によつて多くの國民の刑手たる役割——自分の意志でどうする事も出来ない悲しむべき役割を授けられた彼が、自分の行爲の目的は各國民の福祉であつた、自分は數百萬人の運命を

左右することが出来たから、権力によつて善行を積むことも出来るなどと、自分で自分に信じさせようとしてゐたのである。

『ギースラ河を渡つた四十萬の兵士の中、』彼は露西亞戦争のことをかう書き續けた。『半数は埃太利人、普魯西亞人、索遜人、波蘭人、バヴリヤ人、ギルテンベルヒ人、メクレンブルヒ人、西班牙人、伊太利人、ナポリ人などであつた。また正確に言へば、皇軍の三分の一は和蘭人、白耳義人、ライン河畔の住民、ピエモント人、瑞西人、ゼネヴ人、トスカニイ人、羅馬人、第三十二師團管區、ブレーメン、漢堡その他の住民から成り立つてゐて、その中佛蘭西語を語る者は、漸く十四萬あるかないかに過ぎなかつた。』

『露西亞遠征に於て佛蘭西の拂つた犠牲は、僅か五萬人弱に過ぎなかつた。然るに露西亞軍は、ギリナから莫斯科へ退却中諸所の戦闘で、佛蘭西軍より四倍の兵力を失つたのである。莫斯科の火災は十萬の露西亞人を、森林の中で寒氣と飢餓のために滅ぼした。最後に莫斯科からオーデルへ退却中、露西亞軍は峻烈な季候のため多くの損害を蒙つて、ギリナに到着した時は五萬、カリシに於ては一萬八千にも満たなかつたのである。』

彼は己れ一箇の意志によつて、露西亞との戦ひが生じたやうに想像してゐたので、行はれた事實の恐るべき意義も彼の心を打つに足りなかつた。彼は大膽に事件の全責任を引き受けた。そし

て彼の悔まされた理性は、幾十萬と云ふ戦死者中、佛蘭西人がゲッセン人やバワリヤ人より少かつたと云ふことに、その辯解を見出したのである。

三九

ダヴィドフ家、又は官有農家に屬してゐる畑や草場に、様々な姿勢で様々な軍服を着けた數萬の人間が、死骸となつて横たはつてゐた。それはボロヂノや、ゴールキヤ、シェヴールヂノや、セミョーノフスコエなど、云ふ村々の百姓達が、幾百年の間も打ち揃つて收穫をしたり、家畜を飼つたりした所であつた。各繙帯所では一町歩ほどの間、土にも草にも血がしみ込んでゐた。さまざまの隊に屬する負傷したのや負傷しない士卒の群は、慄えたやうな顔付をして一方はモジャイスクへ、一方はブルーエゾへとぼくと退却してゐた。疲れて飢ゑ切つた別の群集は、上官に導かれて前方へ進んで行つた。更にまた別な群集はその場に留まつて、射撃を續けてゐた。

朝日を浴びた銃剣の閃きと砲烟で、以前いかにも樂しげに美しく見えてゐた戰場の上には、今や濕氣と烟が霧のやうに立ち罩めて、異様に酸っぱいやうな硝石と血の匂が漂つてゐた。やがて黒い雲が集つて、死んだ者や、負傷した者や、慄えた者や、疲れた者や、ためらつてゐる者の上に、小雨がしとく注ぎ始めた。それは丁度、もう充分だ、充分だ、人間共！ やめろ……もう

正氣に返るがい、一體お前達は何をしてゐるのだ？」とでも言ふやうであつた。

食も取らず休息もしないで疲れ果てた兩軍の士卒は、まだ互に殺し合はなければならぬのだらうか？ とかう云ふ疑念を一樣に抱き始めた。一同の顔には動搖の色が顯著になつて來た。各人の心中には均しく一種の疑念が擡つた。「何のために、また誰のために、俺は殺したり殺されたりしなければならぬのだらう？ 殺したい者は誰かと勝手に殺すがい、したい事を何でもするがい、。だが、俺はもうこれ以上いやだ！」夕方近くなつたとき、この心持は人々の心中で一樣に熟して來た。今にも一同は自分達のしたことに慄然として、何もかも投げ棄てたま、何處でも足の向いた方へ逃げ出しさうに思はれた。

けれど戰鬪の終り近くなつて、自分の行爲の恐しいことを直感した人々は、喜んで中止したいやうな氣持になりながら、まだ一種の不思議な神祕力に支配されてゐた。三人に一人くらの割で残つた砲兵も、火藥と血に滲んだ汗みどろの體をしたま、疲勞のために躓いたり喘いだりしながらも、矢張り彈藥を運んだり、裝填したり、照準したり、火繩をつけたりした。砲彈は依然として兩軍から急激に慘たらしく飛び交つて、人間の肉體を粉碎するのであつた。かうして人間の意志ではなく、人間と世界を支配してゐる者の意志によつて成就される恐しい事が、引き續いて行はれてゐた。

露西亞軍の潰亂した背面を見た者は、佛蘭西軍がもうひと奮發すれば、露西亞軍は跡形もなく全滅すると言つたに違ひない。また佛蘭西軍の後部隊を見た者は、露西亞軍がもう一寸努力すれば、佛蘭西軍を粉碎することが出来る、とかう言つたに相違ない。しかし佛蘭西軍も露西亞軍も、この一奮發が出来なかつた。そして戰の焰はゆるくと燃え盡きて行つた。

露西亞軍がこの一奮發をしなかつたのは、自ら進んで攻撃しかけたのでないからである。戰の當初、彼等は莫斯科街道に立つて、敵の進路を塞いでゐたが、戰の終る頃にも矢張り始めと同じ處に立つてゐた。又たとへ露西亞軍の目的が、佛蘭西軍を撃退することに在つたとしても、彼等にはこの最後の努力が出来なかつたに違ひない。なぜと言つて、露西亞軍の方で戰鬪中に損害を蒙らなかつた部隊は一つとしてなく、各隊とも悉く撃破されて、じつとひと所に立つたま、軍の半ばを失つたからである。

佛蘭西軍は從來十五年間常勝の記憶を有し、ナポレオンの必勝を信じてゐる上に、自分達は戰場の一部分を占領して、しかも兵力はわづか全軍の四分の一を失つてゐるに過ぎないし、まだ少しも手を觸れない二萬の近衛兵がある、といふ意識に鼓舞されてゐたのだから、容易にこの一奮發をすることが出来た筈なのである。それに佛蘭西軍は初めから、露西亞軍を陣地から撃退する目的を以て、攻撃を開始したのであるから、當然この一奮發をすべき筈であつた。なぜと言つて、

露西亞軍が戰爭前と同じやうに、莫斯科街道を阻んでゐる限り、佛蘭西軍の目的は達せられないばかりでなく、その努力と損失は悉く空に歸して了ふからである。けれど佛蘭西軍はこの一奮發をしなかつた。或る歴史家は、ナポレオンが勝利を得るためには、新銳の舊近衛隊を繰り出すべきであつたと言つてゐる。しかし、ナポレオンが舊近衛隊を出したらどうだらう、など、言ふのは、もし春が秋になつたら何うだらう、と言ふのと同じことで、そんなことは到底あり得べき筈がない。ナポレオンが近衛隊を出さなかつたのは、出したくなかつたからではなく、出すことが出来なかつたからである。佛蘭西側の將軍も將校も兵卒も、皆その不可能なことを知つてゐた。消沈した軍の士氣がこれを許さなかつたからである。

恐しい力を籠めて振り上げた手が、力なく落ちて了ふと云ふやうな、夢によく似た感じを経験したのは、たゞナポレオン一人きりでなかつた。佛蘭西軍の將官一同を始めとして、すべての參加兵不参加兵は、常に今度の十分一ほどの努力で敵を敗走せしめた、以前の戰爭の經驗に引き較べて、戦ひの終りに近づいても、軍の半ばを失ひながら、開戦當初と同じく儼然と立つてゐる敵に對して、一樣に恐怖の念を感じたのである。佛蘭西攻勢軍の精神力は盡き果てた。軍旗と名づけられる棒に附けた布切れの鹵獲數や、軍隊の占めてゐる土地の面積や、さう云ふもので決定される勝利ではなく、故に我の精神的優越を示し、自己の無力を認めしむる精神的勝利を、露西亞

軍はボロヂノに於て勝ち得たのである。佛蘭西の侵入軍は、勢ひ込んで疾驅してゐるうち致命傷を受けた荒れ狂ふ野獸のやうに、自分の滅亡を直感したのである。しかし半數の兵力しか持たぬ露西亞軍が、退却せずにもられなかつたと同じやうに、佛蘭西軍は留まることが出来なかつた。一度衝動を受けた佛蘭西軍は、その勢で更に莫斯科まで轉がり込むことが出来た。しかし其處では露西亞側の新しい努力を俟つまでもなく、佛蘭西軍はボロヂノで受けた致命傷のために、血を流し盡して滅亡しなければならなかつた。ボロヂノ戰の直接の結果は、ナポレオンが何の原因もなく莫斯科を逃走して、元のスモレンスク街道を退却した事と、五十萬の侵入軍の滅亡と、始めてボロヂノの野で精神的に優秀な敵から打撃を受けた、ナポレオンの治下に於ける佛蘭西の國滅亡であつた。

運動の絶對的連續は人智の理解し得ないところである。どんな運動であらうと、その法則が人間に理解されるのは、任意にその運動の單位を取つて觀察する時だけである。しかしそれと同時に、人間の迷妄の大部分は、不斷の運動を自分勝手に、断片的な單位に分割することから生ずるのである。

古人の所謂詭辯で有名なものがある。外でもない、アキレスは龜より十倍の速力で歩くにも拘らず、前に進む龜をどうしても追ひ越すことが出来ない、とかう言ふのである。即ちアキレスが自分と龜を距て、ある空間を過ぎる間に、龜はこの空間の十分の一だけ先へ出る。アキレスがその十分の一を歩いたとき、龜は百分の一を進んでゐると云ふ具合に、際限なく續く譯である。この問題は古人に取つて不可解なものと思はれた。しかし、アキレスがどうしても龜を追ひ越せないといふこの無意義な解答は、アキレスと龜の運動が不斷のものであるにも拘らず、運動の断片

的單位を任意に許容したために生じたものである。

運動の單位を段々小さくして行くと、我々はたゞ問題の解決に近づくだけで、決して解決そのものを得ることは出来ない。たゞ無限に小なる一つの數と、それから生ずる級數を十分の一まで許容し、この幾何級數の總和を採ることによつて、はじめて問題の解決に到達し得るのである。數學の新しい分野は無限小なる數の取り扱ひ方を發見したので、今では他のより以上複雑な運動の問題中、不可解に思はれてゐた難問にさへ解答を與へてゐる。

古人の知らなかつたこの新しい數學の分野は、運動問題研究の際、無限小の數、すなはち運動の主要條件たる絶對連續を許容することによつて、在來連續的運動を見ずして、運動の個々の單位を見てゐた人々に、免かれ難い誤謬を正してゐる。

歴史的運動の法則を研究する場合も、矢張り同じことである。

人類の運動も無數の人間の自由意志から流れ出ながら、連續的に行はれるものである。

この運動の法則を究めるのが歴史の目的である。しかし人間の自由意志の總和の連續的運動の法則を發見するために、人間の智力は勝手に断片的單位を許容する。歴史の第一の研究法は、連續せる事件を幾つか勝手に選み取つて、それを他の事件から引き離して觀察する事である。然るに、如何なる事件でも決して始めと云ふものはない、又あり得べきでない。常に一つの事件は他

の事件から断えず流れ出るものである。第二の研究法は或る一個人、即ち帝王とか將軍とかの行動を、人々の自由意志の總和として觀察することである。然るに人間の自由意志の總和は、決して一個の歴史的人物の行動に表現されるものでない。

史學は進むに従つて、研究材料として益々小さい單位を求め、かくして眞理に近づかうと努力してゐる。しかし歴史の採用する單位がどんなに小さくても、他から分離された單位、即ち或る現象の根元を容認して、萬人の自由意志は或る一個の歴史的人物の行動に表現される、などと假定するのがそれ自身誤りである事を、我々は痛感せずにはゐられないのである。

あらゆる歴史上の斷案は、批評家はその觀察の對象として、大小に拘らず斷片的單位を選び取つただけで、その上格別の努力を拂ふまでもなく、塵の如く消滅して痕跡をも留めないであらう。歴史家の採つた單位は常に任意なものであるが故に、批評家は常にさうする權利を有してゐる。

たゞ觀察の對象として無限小の單位——歴史の微分、即ち同じ種類に屬する人類の衝動——を容認し、積分法（即ちこれら無限小の總和を計る事）に成功したとき、始めて我々は歴史的法則の理解を期待し得るのである。

十九世紀の最初の十五箇年は、歐羅巴に於ける數百萬の人々が、未曾有の大移動を行つた時代

である。人々は慣れた仕事を棄て、歐羅巴の一端から一端へ赴き、掠奪したり、互に殺し合つたり、得意になつたり、絶望したりした。生活の歩みは數年の間すつかり一變して、一つの熾んな活動となつた。その活動は初め次第に擴大し、やがて段々衰微に赴いた。一體この活動の原因は何であつて、どう云ふ法則に基づいて行はれたのか？——かう人間の理性は質問を發する。

歴史家はこの問題に對する答として、巴里市の或る建物の中に行はれた、數十の人々の行動や演説（これを一口に革命と呼んでゐる）を述べ、次にナポレオン、及び彼に共鳴（もしくは反對）した數名の人物の傳記を詳細に記し、これらの人物中の或る者が、他の者に與へた影響を物語つた擧句、かう云ふ譯でこの運動は起つたので、これが其の法則である、と言つてゐる。

しかし人間の理性はこの説明を拒否するばかりでなく、却つてその説明法を不確實だと斷言する。何故なればこの説明によると、最も弱い現象が最も強い現象の原因とされるからである。たゞ人間の自由意志の總和のみが、革命とナポレオンを生み出し、彼等のために苦しんで、さうして彼等を亡ぼしたのである。

『しかし征服のある處には必ず征服者がある。國家に變動が生じる時には必ず偉人が現れる』と歴史は云ふ。實際、征服者が現れたときには必ず戦争があつた、とかう人間の理性は答へる。しかし、それは征服者が戦争の原因であるとか、または或る一個人の行動に戦争の法則を見出し得

る、などと云ふことを證明する譯でない。いつも私が自分の時計を眺めて、短針が十時に近づいたのを見る時には、必ず隣の教會で式の開始を知らせる鐘が鳴り出す。けれど教會の鐘が鳴り出す時、短針が必ず十時を指すと云ふことからして、短針の位置は鐘の運動の原因だと論結する權利を、私は持つてゐないのである。

機關車の運動を觀察してゐると、必ず汽笛の響が聞え、安全瓣が開き、車輪が廻轉するのが見える。しかし私はこの事實からして、汽笛と車輪の廻轉が機關車の運動の原因である、などと云ふ權利を持つてゐない。

百姓達は、晩春になると寒い風が吹くが、それはつまり櫛が芽を出すからだ、とこんな事を言ふ。全く毎年春になつて櫛が芽を出す頃、屹度寒い風が吹く。どうして櫛が芽を出す頃に、寒い風が吹くか、その譯は私にも分らないけれど、寒い風の原因を櫛の芽出しに歸する百姓の説には、到底同意することが出来ない。なぜと云つて、風の力は芽の影響外に在るからである。私はたゞあらゆる生活現象に見受けられる、數箇の事情の暗合を見るだけである。時計の針や、機關車の安全瓣や車輪を、どんなに詳しく觀察しても、鐘や機關車の運動も、春の風の原因も知り得ない、といふ事を悟るだけである。これを知るためには全く視角を變へて、蒸汽や鐘や風の運動法則を研究する必要がある。歴史も矢張り同様でなければならぬ。しかもこの試みは既になされてゐる。

歴史の法則を研究するには、全然觀察の對象を變へなければならぬ。すなはち皇帝や大臣や將軍は打ち棄て置いて、大衆を指導してゐる無限に小さい、同種の要素を研究すべきである。この方法で人間がどれだけ史的法則の理解に到達し得るか、それは誰一人明言し得るものはない。しかしたゞ、此の方法によつてのみ、史的法則を捕へ得ることは明かである。また過去に於て、歴史家が様々な皇帝や將軍や大臣の活動を記述し、かつこれらの活動に關して、自己の考察を述べるために費した努力の百萬分の一をも、人智がこの方面に注いでゐないと云ふことも、極めて明瞭な事實である。

二

歐羅巴に於ける十二の國語を含む軍勢は露西亞へ闖入した。露西亞の軍隊と住民は、衝突を避けながらスモレンスクまで退却し、スモレンスクから更にボロヂノまで退却した。佛蘭西軍は絶えず増して行く加速度を以て、その運動の目的たる莫斯科をさして進んだ。恰も落下する物體が地面へ近づくに従つて速度を加へるやうに、佛蘭西軍の突進力は目的へ近づくにつれて増して來た。後方には餓ゑ衰へた數千露里の敵地があり、前方には僅か數十露里が目的地を隔てるのみで

あつた。これはナポレオン軍の兵士が一人の例外なしに感じた所である。かうして侵入はたゞ突進力一つだけで自然に行はれたのである。

露西亞の軍中では敵に對する憎惡の念が、退却するに従つて益々熾んに燃え上り、次第に集中し膨脹して行つた。その中ボロヂノ附近で衝突が起つた。兩軍とも崩潰はしなかつたが、丁度一つの玉が、より以上の速力で走つて來た他の玉に打つ突かつたとき、かならず後ろへ跳ね返るやうに、露西亞軍の方は佛蘭西軍との衝突後、直ちに必然的に退却した。幕地に走つて來た球は、衝突のために有りたけの力を失ひながらも、矢張り必然的になほ若干の距離を轉がつて行くものである。

露西亞軍は百二十露里の彼方——莫斯科の後方へ退却した。佛蘭西軍は莫斯科まで着くと、そこで行を止めた。この後五週間と云ふもの一度も戦闘がなかつた。佛蘭西軍は動かなかつた。丁度致命傷を受けた野獸が、出血のために衰へながら傷口を甜め廻してゐるやうに、彼等は五週間といふもの、何一つしないで莫斯科に留まつてゐた。そして不意に何ら新しい原因もなく退却を始め、カルーガ街道さして突進した（而もそれは戦勝後の出來である。何故なればマロ・ヤロスラーエツツの役に於て、戰場は再び佛軍の手に委せられたからである）。その後一度も決戦をしないで、いよく急にスモレンスクへ退却し、更にスモレンスクからギリナ、ベリョージナへと退

いて行つた。

八月二十六日の晩には、クトゥゾフも露西亞軍全體も、ボロヂノ役の勝利を信じてゐた。で、クトゥゾフはその通り皇帝に報告した。彼は敵を完全に撃破するため、新しく戦闘の準備を命じた。それも別に誰を欺かうと云ふつもりではなく、戦争の参加者全部と同じやうに、敵の敗北を信じてゐるたからである。

しかし其の晩から翌日へかけて、損害は前後未曾有のものであつて、軍は半ば失はれたと云ふ報知が、相ついで到着し始めた。新しい戦闘は實際的に不可能だと言ふ事が分つた。

まだ情報も充分集らず、負傷者も收容されず、彈藥も補充されず、戦死者の數も明瞭でなく、戦死した各隊長官の後任も任命されず、士卒が食事も睡眠もしないのに、戦闘を始めるといふ事は不可能であつた。同時に、戦闘が終つた直ぐその翌朝、佛蘭西軍は（距離の自乘に逆比例して運動量が増加したために）もう自然と露西亞軍の方へ押しよせて來た。クトゥゾフは翌日攻撃しようと思つてゐたし、また全軍もそれを望んでゐた。しかし攻撃するには、しようと思ふ希望ばかりでは不充分で、その可能がなければならぬ。然るにその可能がなかつたのである。つまり一行程だけ退却しない譯に行かなかつた。それから又同じやうに第二、第三行程と退却せずに行られなかつた。最後に九月一日となつて、軍が莫斯科へ近づいたとき、各隊の間に熾んな士氣が

湧起したにも拘らず、時の勢は軍が莫斯科以東へ退却することを要求した。かうして軍は更になほ一行程——最後の一行程だけ退却して、莫斯科を敵手に委ねたのである。

丁度我々が書齋で地圖を按じながら、かくかくの戦鬪に於ては、如何に軍隊を指揮すべきか、などと考へると同じやうな場合に、軍指揮官も戦役や戦鬪の計畫を作成するのだらう——こんな考へ方に慣れてゐる人にとつては、自然次のやうな問題が起つて来る。なぜクトゥゾフは退却の際かくかくの行動を採らなかつたか、なぜフィーリへ赴く前に陣地を占領しなかつたか、なぜ莫斯科徹退後すぐカルーガ街道へ退却しなかつたか？ 云々云々。かう云ふ考へ方に慣れた人は、常にあらゆる總指揮官の行動の背景となる、避け難い實際の状況を忘れてゐるのか、さなくばそれを知らないのかである。軍指揮官の行動は、我々が勝手に書齋に坐つて、圖面の上で何かの戦役を研究しながら、兩軍の兵數や位置を自由に決めたり、考察の出發點を或る一定の瞬間に置いたりして想像するのは、まるで似つかぬものなのである。總指揮官は、我々が或る事件を研究する場合に假定するやうな、發端など、いふ状況に置かれることは決してない。總指揮官は常に移動せる幾多の事件の中間に立つてゐて、しかも何時如何なる瞬間にも、現行はれつゝある事件の意義全體を、考へる事の出来ない立場に置かれてゐるのである。事件は何時とはなく一刻々々その意義を現すので、この逐次的な止み間なき意義表現の各瞬間ごとに、總指揮官は

陰謀と、配慮と、束縛と、権力と、計畫と、忠言と、威嚇と、僞瞞の錯綜した中心に立ち、かつ自分に提出される無数の問題——常に相矛盾せる問題——に答へなければならぬ地位に置かれてゐるのである。

兵學者が大眞面目で我々に語るところによると、クトゥゾフはフィーリへ行くよりずつと前に、軍をカルーガ街道へ進めるべきであつた。しかも、誰かさう云ふ案を提出した者さへあつたとの事である。しかし何時でも——殊に状態が困難な場合、總指揮官の前には一つや二つでなく、同時に數十の案が提出される。おまけに軍略や戦術に基づいたこれ等の案は、みんな互に矛盾してゐるのが常である。總指揮官はこれ等の提案中どれか一つを選択したら、事が足りるやうに思はれるけれど、しかしそれさへ中々出来ないものである。事情と時が人を待つてくれない。例へば、二十八日にカルーガ街道へ移ると云ふ提案があつたと假定する。ところがこの時、ミロラードギッチの副官が驅けつけて、今すぐ佛蘭西軍と砲火を交へたものか、それとも退却したものかと訊ねる。彼は即座に命令を發しなればならない。しかし退却命令は我が軍のカルーガ街道へ轉ずる計畫を妨げる。副官に續いて今度は兵站部長が、糧食は何處へ運んだらいい、かと訊ねるし、野戦病院長は何處へ負傷兵を移したものと訊く。その上、彼得堡からは急使が皇帝の親翰を持つて來て、莫斯科を棄てる事は許さぬと云ふ。總指揮官の競争者、即ち彼の足下に陥穽を穿つて

るる者は（さう云ふ連中は何時もゐる、しかも一人や二人ではない）、カールガ街道へ出ようと云ふ計畫とは、對角線的に正反對な新しい案を提出する。然るに總指揮官自身の體力は睡眠と補強を要求する。行賞に洩れた名譽ある將軍は不平を言つて来る。住民は保護を願ひ出る。地形の視察に派遣された將校は歸つて来て、前の將校と全く反對な報告をする。斥候、捕虜、偵察をして来た將軍——かういふ人達はみんな思ひ／＼に敵情を傳へる。すべての總指揮官の行動から切り離すことの出来ない、この必然的な事情を理解し慣れない（もしくは忘れた）人々は、例へばフィーリに於ける軍の状況を我々に説明する事によつて、九月一日に莫斯科を棄てるか防禦するかと云ふ問題を、總指揮官が全く自由に解決し得たものと假定してゐる。然るに露西亞軍の状態を以てしては、莫斯科から五露里へだつた處まで来て、かう云ふ解決は不可能なのであつた。しからば、問題はいつ解決されたか？ それはドリッサでも、スモレンスクでも解決されたが、殊に明晰に感じられたのは二十四日のシェヴールヂノ、また二十六日のボロヂノの役であつた。それどころか、進んでボロヂノからフィーリまで退却する間ぢう、一日一日、一刻一分毎に解決されてゐたのである。

三

陣地視察のためクトゥゾフに派遣されたエルモーロフが、この莫斯科附近の陣地で戦ふことは出来ない、宜しく退却すべきであると元帥に言つた時、クトゥゾフは無言のまま、彼を見つめた。『手を貸して見給へ。』と彼は言つた。そして其の手を裏返して、脈を見ながらかう言つた。『君は、どうも健康でないよ。一つ自分の言つた事を考へて見給へ。』

戦はずして莫斯科を退却しようとは、クトゥゾフもその時分まだ考へてゐなかつたのである。

クトゥゾフはドロゴミーロフスキイ門から六露里隔つた、ボクロンナヤの丘で馬車を降り、路傍の床几に腰を下した。將軍連が大群をなして周圍に集つた。莫斯科から来たラストープチン伯爵も、彼等の仲間に加はつた。この華々しい一行は幾つかのサークルに分れて、陣地の有利不利、軍の状況、さまざまの提案など、一般軍事上の問題を語り合つてゐた。一同は別にそんな目的で招集されたのでもなければ、さういふ名義も付けられなかつたけれど、事實これは軍事會議だと感じたのである。會話はすべて一般的な問題の範圍内に限られてゐた。誰か個人に關する噂を傳へたり訊ねたりする人があつても、それは小さな聲で囁き合ふだけで、また直ぐ一般問題に移るのであつた。これ等の人々の間には冗談や高笑ひは愚か、微笑すら認めることが出来なかつた。みんな高調した其の場の氣分から外れまいと、骨を折つてゐるやうであつた。そして各サークルとも、仲間内で話し合ふにも、なるべく總指揮官の傍を（總指揮官の床几はこれらのサーク

ルの中心を形作つてゐた) 離れまいと努め、總指揮官に自分達の言葉が聞き取れるやうに努力した。總指揮官はそれを聞きながら、時々自分の周圍で話し合つてゐる事を問ひ返した。しかし自分では話の仲間入りもしなければ、また何一つ意見も述べなかつた。彼は何かの話を聞き了ると、大抵失望したやうな顔付で——彼等の話し合つてゐる事は、皆自分の知らうと思ふ事と違つてると言つた風に、そつぽを向いて了ふのであつた。或るものは選定された陣地の話をしながら、陣地その物より、寧ろ其の陣地を選んだ人の腦力を批評してゐた。或る者は誤謬はもう前から生じてゐた、決戦は三日前にしなければならなかつたのだと力説した。また或る者はサラマンカの戦争談をしてゐた。それはたつた今西班牙の軍服を着て到着したばかりの、佛蘭西人クロサールから聞いたのである(この佛蘭西人は露西亞軍に勤めてゐる獨逸諸公の一人と共に、サラゴサの包圍を分析批評しながら、それと同じやうに莫斯科をも防禦できると主張してゐた)。第四のサークルではラストープチンが、自分は何時でも莫斯科の士族團と共に、首都の城下で死ぬる事を辭さないが、それにしても自分の地位の曖昧な事を悲しまない譯に行かない、もし前にそれを知つてゐたら、何とか別な方法もあつたらうに……など、言つた。第五のサークルは自分達の深遠な戰術の知識を示しながら、軍の探るべき方針を語り合つた。第六のサークルは全然無意味な話をしてゐた。クトゥゾフの顔は段々不安と悲哀の色を現して來た。彼はかう云ふ様な會話の中

から、ただ一つの事實を見抜いたのである。それは莫斯科を防禦する實際的可能が全然ない、この言葉の完全な意味に於て存在しないと云ふ事である。たとへ誰か無鐵砲な總指揮官が戦ひを決したとしても、たゞ混亂を引き起すだけで、結局戦ふことが出来なくなる。それほど戦闘の可能が缺如してゐるのであつた。それは高級指揮官達が、單にこの陣地を不適當なものと認めてゐるのみならず、この陣地を放棄した後のことばかり評議してゐるのに徴しても明白である。不適當と認めてゐる戰場へ、どうして長官が自分の軍隊を率ゐて行かれよう? 下級指揮官も、人並みに判斷力を持つてゐる兵卒も、みな陣地の不適當を認めてゐるから、敗北を確信して戦闘に出る譯に行かなかつた。たとへベニグセンがこの陣地の防禦を主張しても、また他の人がそれを審議しても、この問題はもうそれ自身意義を失つて、ただ爭論と陰謀の口實として、特種な意味をもつてゐるに過ぎなかつた。クトゥゾフもそれを悟つてゐた。

ベグニセンは自分がこの陣地を選んだので、熱心に露西亞人なみの愛國心をひけらかしながら(クトゥゾフは顔を擧めずにそれを聞いてゐられなかつた)、莫斯科の防禦を主張した。クトゥゾフは火を睹る如く明瞭に、ベニグセンの目算を見抜いてゐた。外でもない、防禦が不成功に了つた場合には、戦はずして雀ヶ岡まで軍隊を退却させた罪を、クトゥゾフに塗り着けるし、成功した場合にはそれを自分の手柄にする。もし自説が斥けられた場合には、莫斯科放棄の罪に係り合

ふまいと云ふのであつた。けれどかうした陰謀はいま老將軍の興味を引かなかつた。彼の心を充たしてゐるのは一つの恐しい問題であつた。而もこの問題に對する答へを、誰の口からも聞くことが出来なかつた。その時彼に取つては、次のやうなことが問題なのであつた。「一體ナポレオンを莫斯科へ入れたのは俺だらうか？　いつ俺はそんな事をしたのだらう？　いつそれが決しられたのだらう？　昨日俺がブラートフに退却命令を傳へた時だらうか？　それとも一昨日の夕方居眠りをしながら、ベニグセンに指揮を吩咐けた時だらうか？　或ひはそれよりもつと前だらうか？……本當にこんな恐しい事がいつの間にか決しられたのだらう？　どうしても莫斯科は棄てなければならぬ。軍隊は退却しなければならぬ、そしてこの命令は是非發しなければならぬのだ。」この恐しい命令を發するのはクトゥゾフにとつて、軍隊の指揮を辭するのと同じ事に思はれた。しかし彼は權力を好み、かつそれに馴れてゐたばかりでなく（土耳其にゐる時、自分の長官プロゾーロフスキイ公爵が、異常な尊敬を受けるのを見て、密かに心を苛立たせたものである）、自分は露西亞を救ふべき使命を帯びてゐる、それ故にこそ皇帝の意に逆らつてまで、民意を受けて總指揮官に選ばれたのだと信じてゐた。この困難な條件の下に、軍の首腦たり得る者はたゞ自分一人だけだ、到底打ち勝つ事の出来ないものとされてゐる、ナポレオンを敵として恐れない者は、ただ自分一人あるのみだと信じてゐた。で、彼はこの命令を發しなければならぬと

考へたとき、思はず慄然としたのである。しかし彼は何とか決心して、餘りに自由な性質を帯びて來た周圍の議論を、中止させなければならなかつた。

彼は年長の將軍達を呼び寄せた。

『*Ma tête, fût-elle bonne ou mauvaise, n'a qu'à s'aider d'elle-même* (わたしの頭が良うにしろ悪うにしろ、だからそれは床几から立ち上りながらかう言つて、自分の馬車を置いてあるフィーリの方へ馬を驅つた。なあ。)』

四

百姓アンドレイ・サズスチャーノフの廣い綺麗な方の小屋では、二時から會議が開かれた。この百姓家の大勢の家族——男連や女房連や子供たちは、表廊下を隔てた居間の方で窮屈さうにぐちやぐちしてゐた。たゞ一人アンドレイの孫に當る、今年六つのマラーシャと云ふ女の子だけは、元帥に可愛がられて、茶の時に砂糖のかけを一つ貰ふと、その儘大きな小屋の煖爐の上に残つてゐた。マラーシャは後からぐち小屋へ入つて來て、上座の聖像の下に置かれた、幅の廣い床几に腰を下す將軍たちの顔や、軍服や、勳章などを、おづ／＼と嬉しさうに煖爐の上から眺めてゐた。お爺さん（マラーシャは心の中でクトゥゾフをかう呼んでゐた）は一人外の者から離れて、煖爐

の向うの暗い隅に腰を掛けてゐた。彼は疊み椅子に深く體を埋めて、絶えず喉を鳴らしたり、上衣の襟を直したりしてゐた。上衣の釦は外してあつたが、それでも襟が頸を締め付けるやうな具合であつた。後からく入つて来る人たちは、元帥の傍へ寄つた。すると元帥は或る者には手を握つてやり、或る者には一寸うなづいて見せるのであつた。副官のカイサーロフが、クトゥゾフの眞向ひにある窓の帷カマドを絞らうとしたとき、クトゥゾフは腹立たしげに手を振つて押し止めた。で、カイサーロフは、閣下は顔を見られるのが厭なんだな、と悟つた。

地圖や、作戰計畫や、鉛筆や、書類などの載つてゐる、如何にも百姓家のものらしい樞の卓子ダイズの周りには、非常に大勢の人が集つてゐたので、従卒は更に一脚の床几を持つて来て、卓子の側に据ゑた。この床几には今來たばかりのエルモローフと、カイサーロフと、トールが腰を下した。聖像の眞下に當る上座には、ゲオルギ勳章を頸に懸けたバルクライド・トリーが坐つてゐた。高い額は禿けた頭に續いてゐたが、その顔は蒼褪めて病的な色を帯びてゐた。彼はもう二日間熱に苦しめられた擧句、猶この時も悪寒がしたり、頭がづき／＼痛んだりするのであつた。その傍に並んで腰をかけてゐたウヴローフは、皆と同じやうに餘り高くない聲で、忙しさうな身振をしながら、バルクライに何やら話してゐた。小柄な丸々したドフトゥロフは眉を吊りあげて、兩手を腹の上に組み合せた儘、注意深く耳を傾けてゐた。今一方にはオステルマン・トルストイ

伯爵が、輪廓のはつきりした顔に目を輝かしながら、その大きな頭を片手に載せて腰掛けてゐたが、何か考へに沈んでゐる様子であつた。ラーエフスキイはもどかさうな顔付をして、馴れた手付で黒い兩鬢の毛を前の方へ掻きながら、クトゥゾフの顔と入口の戸を、交る／＼見比べてゐた。コノヴニーツインのしつかりした、美しい、善良さうな顔は、優しい狡猾な微笑に輝いてゐた。彼はマラーシヤの視線に出會すと目で合圖をした。それが少女に微笑を強ひるのであつた。一同はベニグセンを待つてゐた。彼は新しい陣地の視察と云ふ口實の下に、ゆつくり美味しい食事をした、めてゐたのである。皆は四時から六時まで待つた。その間會議にかゝらないで、小聲に四方山の話をしてゐた。

ベニグセンが小屋へ入つて來ると、クトゥゾフは片隅から身を乗り出して卓子へ近づいたが、それも卓子の上に立つてゐる蠟燭の光が、自分の顔に落ちないくらゐの程度であつた。

ベニグセンは、『戦はずして露西亞の聖なる古都を棄つべきか、あるひは防禦すべきか？』といふ質問で會議を始めた。長いあひだ一座に沈黙が續いた。人々は顔を擧めてゐた。たゞしんと静まり返つた中に、クトゥゾフの腹立たしげに鼻を鳴らす音と、咳拂ひの聲が聞えるだけであつた。一同の眼は彼の方へ注がれた。マラーシヤも矢張りお爺さんを見詰めてゐた。少女は一番元帥に近かつたので、彼の顔に皺が寄つて、今にも泣き出しさうになつたのに氣が付いた。が、そ

れも永くは續かなかつた。

『露西亞の聖なる古都！』腹立たしさうな聲でベニグセンの言葉を繰り返しながら、彼は突然口を切つた。それはこの言葉の虚偽な調子を指摘するためらしかつた。『閣下、失禮ながら、さう云ふ質問は露西亞人にとつて、何の意味もない事です（彼はその重い體を揺つて、前の方に乗り出した）。さう云ふ問題の立て方は不可能だし、さういふ質問は何の意味もないことです。わたしがこの方々にお集りを願つて、解決したいと思つたのは軍事上の問題です。その問題と云ふのは外でもありません。露西亞の救ひは軍隊に在る。戦ひに應じてその軍隊と莫斯科を失つた方がよいか、或ひは戦はずして莫斯科を渡した方がよいか？』とかう云ふ點に存するのです。わたしはこの問題について、諸君の意見を伺ひたいのです。』（彼は又からだを一揺りして、安樂椅子の脊へどつかと凭りかかつた。）」

討論が始つた。ベニグセンは未だこの勝負を、自分の負けと思つてゐなかつた。フィーリの防禦戦は不可能だと云ふ、バルクライその他の説を是認しながらも、露西亞に對する憂國の心と、莫斯科に對する愛情に充ちた態度で、軍隊を夜中に右翼から左翼へ移し、翌日佛蘭西軍の右翼を攻撃することを主張した。意見は區々になつて、ベニグセン説に對する賛否の議論が沸騰した。エルモローフ、ドフトゥロフ、ラーエフスキイは、ベニグセンの意見に同意した。彼等は舊都を

棄てる前に、何か犠牲を拂ひたいと云ふ感情に支配されてゐるのか、或ひは他に個人的考量があるのか、兎に角、今となつて幾ら會議をしても、避け難い成行を變へることは出来ないから、莫斯科は既に放棄されてゐるに均しいと云ふことが、これ等の將軍達には會得できない様子であつた。その他の將軍達はこれを悟つてゐたので、莫斯科問題を第二段として、退却の場合に軍隊の探るべき方針を語つた。目の前で行はれてゐる事を、わき眼もふらずじつと見つめてゐたマラーシャは、この會議を別な意味に解釋してゐた。つまり彼女の目には、『お爺さん』と『裾の長い人』（彼女はベニグセンにかう云ふ名をつけた）の個人的爭論のやうに思はれたのである。彼女は二人が毒々しい調子で話し合つてゐるのを見て、心ひそかにお爺さんの肩を持つた。彼女はお爺さんが話の途中で、明らかに狡猾な視線をベニグセンの方へ投げたのに氣がついた。やがてそれに續いて、お爺さんが何か言つて、裾長をへこましたのを見ると、娘は嬉しくて堪らなかつた。ベニグセンは急に眞赤な顔をして、腹立たしげに小屋の中を歩き出した。ベニグセンにこれ程の利き目を與へた言葉は、クトゥゾフが落ちついた靜かな聲で述べた評言であつた。外でもない、彼は夜に乗じて軍隊を右翼から左翼へ移し、佛蘭西軍の右翼を攻撃しようとして云ふ、ベニグセン説の可否を論じたのである。

『諸君、わたしは、』とクトゥゾフは言つた。『伯爵の計畫に賛同することが出来ません。敵陣

に近く軍隊の位置を變へると云ふことは、常に危険を伴ふもので、戦史もこの見解を裏書して居ります。つまり例へば……(クトゥゾフは適当な例を探しながら、明るい無邪氣な眼付でベニグゼンを見つめて、何か考へ込むやうな様子をした) さうです、現にあのフリードリンドの戦がさうです。あの戦闘は伯爵もよくご存じの通り……餘り成功したものは言はれません。それは我が軍があまり敵に近い距離で、陣形を變へたためです……』

束の間、沈黙が続いた。それは一同に取つて非常に長く思はれた。

討議はまた始つたが、幾度も中絶された。人々はもう何も云ふことがないやうな気がした。

一度かう云ふ風に議論が中絶した時、クトゥゾフは何か言ひ出しさうに、重々しく溜息をついた。みんなその方をふり返つた。

『Eh bien, messieurs! Je vois que c'est moi qui payerai les pots cassés (さや、諸君、壊れた壺の價をだらう)』と彼は言つた。そして徐ろに立ち上りながら卓子テーブルに近寄つた。『諸君、わたしは諸君のご意見を聞きました。中には不賛成の方もをられませうが、わたしは(と彼は言葉を切つた)我が皇帝と祖國より委ねられた権力に依つて——退却を命じる。』

それに續いて將軍達は、まるで葬式の後のやうに黙り込んだまゝ、ものくしい用心深い態度で散り始めた。

二三の將軍は、會議の時とはまるで違つた調子で、小聲に總指揮官に何やら傳へてゐた。

先刻から晩飯に呼ばれてゐたマラーシャは、跣足の爪先を煖爐の凹みへ引つ掛けながら、用心深く寢板から後ろ向きにおりた。そして將軍達の足にからまりながら、戸の外へ迂り出た。

將軍達を歸して了ふと、クトゥゾフは長い間卓子に眩突きをして腰掛たまゝ、何時までも例の恐しい問題を考へてゐた。

「一體何時こんな事になつたのだらう、莫斯科が放棄されるなんて、何時そんな事が決つたのだらう? 一體何時の間にこの問題を決するやうな事が、行はれたのだらう? 一體これは誰の責任だらう?」

『かうならうとは、こんな事にならうとは俺も豫期しなかつた。』もう夜が更けてから、部屋へ入つて來た副官のシュナイデルに向つて、彼はかう言つた。『かうならうとは俺も豫期しなかつた! かうならうとは俺も思はなかつたよ!』

『閣下、あなたはご休息なさらなければなりません。』とシュナイデルは言つた。

『なに、駄目だ! 奴等は土耳其人のやうに馬肉を啖くはふんだぞ。』クトゥゾフは返事もせず、ふつくりした拳で卓子を叩きながら叫んだ。『啖くははしてやるとも、たゞ……』

丁度その頃、軍隊が戦はずして退却するよりもつと重大な事件——即ち莫斯科の放棄とその焼却について、この事件の指導者と思はれてゐるラストープチンは、クトゥゾフと全く正反對な活動をしてゐた。

この事件——莫斯科の放棄とその焼却——は、丁度ボロヂノの戦争後、軍隊が戦はずして莫斯科以東へ退却したのと同じく、やはり避ける事の出来ない必然であつた。

すべての露西亞人は推理の力に依らないで、我々及び我々の祖先の内部に潜んでゐる感情に基づいて、あの事件を豫言することが出来たに相違ない。

スモレンスクを始めとして、露西亞のあらゆる町々村々では、ラストープチン伯爵やその布告を待つまでもなく、莫斯科と同じことが起つた。人民は暢氣に敵を待つてゐた。一揆も起さず、狼狽もせず、また誰一人八つ裂きにもせず、最も困難な場合に處して、自己のなすべき事を見出し得るといふ自信を抱きながら、泰然として己れの運命を待つてゐた。一旦敵が近づいて來るや否や、富者は産を棄て、去り、貧者は留まつて、後に残つた物を焼き亡した。

これはかくあるべきだ、また何時でもかくあらねばならぬと云ふ意識が、當時露西亞人の心に

潜んでゐた、いな、今も矢張り潜んでゐる。この意識、殊に莫斯科が占領されるに相違ないと云ふ豫感は、間違ひなく千九百十二年の莫斯科社會に潜んでゐた。既に七月から八月の初旬にかけて、莫斯科を立ち退き始めた人々は、彼等が早くもこれを豫期してゐたことを、この行爲によつて示してゐる。家を捨て財産の半を捨て、持ち得るだけの物を持つて立ち退いた人々は、かの隠れたる (latent) 愛國心に従つて行動したのである。その愛國心は徒らに大言壯語したり、祖國救済のためと稱して子供を殺したり、さう云ふ不自然な行爲によらないで、目立たぬやうに、素朴に、有機的に現れるもので、従つて常に力強い結果を生むのである。

『危険を恐れて遁れるのは恥づべきことだ。ただ臆病者だけが莫斯科から逃げ出すのだ。』と彼等は言ひ聞かされた。ラストープチンは自分の宣傳びらで、莫斯科から逃げ出すのは屈辱であると説き諭した。彼等は臆病者の名を受けるのが恥かしかつた、逃げるのも極りが悪かつた。しかしそれでも彼等は矢張り逃げた。それはかうするより他に仕方がない、と云ふことを知つてゐたからである。何故彼等は逃げ出したか？ それはラストープチンが、占領地に於けるナポレオンの様な恐しい行爲を説き立てて、彼等を憎やかしたためとは想像出来ない。眞先に支度をして逃げ出したのは、富裕な智識階級の人々であるから、維納や伯林が少しも破壊されなかつたことも、これらの町がナポレオンに占領された時、市民は愛すべき佛蘭西人と共に楽しく時を過し

たことも、彼等はよく知つてゐた。しかも當時露西亞人——殊に婦人は、非常に佛蘭西人を愛慕してゐたのである。

彼等が立ち退いたのは外でもない、佛蘭西人の支配を受けながら莫斯科で暮すのが、露西亞人にとつて善いとか悪いとか、さう云ふ事が頭から問題にならなかつたからである。佛蘭西人の支配下に暮すことは到底出来ない。それは何よりも悪い事であつた。彼等はボロヂノ役の以前にもぼつ／＼逃げ出してゐたが、ボロヂノ役の後には、首都防禦の檄が飛ばされたり、莫斯科總督がイゼーリの聖母像を掲げて、出征しようと云ふ計畫を發表したり、佛蘭西人を滅すために氣球を造つたり、或ひはラストーブチンが例のびらの中に、色んな馬鹿々々しいことを書いたりしたにも拘らず、益々市民の立ち退きが急になつた。戦ふべきものは軍隊である。もし軍隊にその力がないなら、令嬢や下男共と一緒に三山^{トライヨール}へ行つても、ナポレオンと戦ふことは出来ない。だから如何に自分の財産を放棄するのが惜しくとも、結局逃げ出さなければならぬ——それを彼等は知つてゐた。かうして、住民に棄てられた富裕な大都會の、偉大なる意義を考へないで、彼等は立ちのいた。ところが、それは焼かれるに決つてゐたのである(見捨てられた家を壊したり焼いたりしないのは、露西亞の國民性にふさはしくなかつた)。彼等が去つたのは銘々自分のためであつたが、しかし彼等が立ち退いた結果、露西亞國民の最大なる光榮として、永久に記憶さるべき偉

大な事件が行はれたのである。當時、自分はナポレオンの召使でないと云ふ漠然たる意識と、ラストーブチン伯爵の命令に引き止められはせぬかと云ふ恐れを感じながら、もう六月頃から黒ん坊や道化女を引きつれて、莫斯科からサラトフの田舎へ避難した貴婦人は、この行爲に依つて單純にかつ眞實に、露西亞救済の偉大なる事業を成就したのである。しかるにラストーブチン伯爵は、立ち退くものを侮辱したり、諸官廳を移したり、酔つ拂つた烏合の衆に役にも立たぬ武器を渡したり、聖像を持ち出したり、アウグスチン^(莫斯科司祭長)に聖者の遺骨や聖像を運び出すのを禁じたり、莫斯科にある私有の荷車を悉く徴發したり、百三十六臺の荷車でレピッヒの造つた氣球を運搬したり、莫斯科の焼棄を仄めかしたり、自分の家を焼き拂つたことを自慢したり、佛蘭西人に宣言書を送つて、彼等が幼子の避難所を破壊した罪を、莊重な調子で罵つた顛末を吹聴したり、莫斯科焼却の名譽を引き受けたり、またそれを否定したり、間牒を一人残さず捕まへてつれて來いと市民に命じたり、かと思ふとそれを實行した者を譴責したり、佛蘭西人を残らず莫斯科から追ひ拂ひながら、莫斯科に於ける佛蘭西人仲間の中心となつてゐる、婦人服屋のオーベル・シャリメーに市内居住を許したり、これと言ふ罪もないのに、世人に尊敬されてゐる郵便局長クリュチャーレフ老人を捕縛して追放したり、佛蘭西軍と戦ふために三山^{トライヨール}へ人民を集めたり、この群集を振り放すために人を殺させて、その間に裏門から逃げ出したり、自分は莫斯科の不幸に耐へ得な

いと云つたり、自分がこの事件に關係した事を、佛蘭西語の詩につやつてアルバムに書いたりした——しかし結局、彼は進行しつゝある事件の意義を解せず、ただ何かして人を驚かせたい、何か愛國的英雄的行爲をしたいとあせるのみであつた。そして莫斯科の放擲燒却と云ふ偉大にして必然な事件を、子供のやうに面白がつて騒ぎながら、彼自身をも一緒に押し流して行く國民的大奔流を、その小さな手で掻き立てたり、制止したりしようと蹴いてゐたのである。

* Je suis né Tartare. Je voulais être Romain. Les Français m'appelèrent barbare, les Russes—Georges Dandin. 即ち、我は韃靼人に生れしが、羅馬人たるを欲しぬ。佛蘭西人は我を夷狄と呼べど、露西亞人はジヨルヂ・ダンダンとなすの意。

六

エレンは宮廷と一緒にギリナから彼得堡へ歸つて來ると、非常に面倒な立場におかれた。

エレンは彼得堡で國政の樞機に參じてゐる一人の大官から、特別の庇護を受けてゐた。所が、ギリナで若い外國の親王と近づきになつた。彼得堡へ歸つた時、親王も大官も二人ながらこの地にあるて、互にその權利を主張した。で、エレンは何方にも恥を掻かさないうで、何方とも親しい關係を保たなければならぬと云ふ、今まで經驗した事のない新しい難問に逢着したのである。

もし他の婦人であつたなら、到底に手に合はないほど難かしく考へる事でも、無比の賢婦人と

云ふ名聲を恣にしてゐるベズーホフ夫人から見れば、無論深く思ひ悩むほどの價值はなかつた。

もし彼女が自分の行爲を隠しながら、小刀細工でその氣拙い状態から遁れようとすれば、却つて自分の罪を意識して、事を打ちこはしてしまつたに相違ないが、エレンはそれと全く正反對に、何でもしたい事の出来る眞の偉人のやうに、頭から自分を正義の位置において（彼女は心からそれを信じて疑はなかつた）、他の者をみんな不正の位置に落したのである。

初めて若い外國の親王が、無駭にもエレンの罪を責めたとき、彼女はその美しい首を傲然と反らして、半ば對手の方へ振り向けながら、きつぱりとかう言つた。

『Voilà l'égoïsme et la cruauté des hommes (それが男の利己主義と殘忍性とうゝものですよ！) わたくしもちゃんとそれを覺悟してゐました。女はあなた方の犠牲になつて苦しんでゐるのに、その報いがこれなんですものね。殿下、あなたはわたくしの感情や友誼まで詮索あそばすなんて、一體そんな權利をもつてゐらつしやるのでせうか？ あの人はわたくしにとつて、父より大事な人なのでございます。』

親王が何か言はうとしたが、エレンはそれを遮つた。

『Eh bien, oui (え、はい、さ)』と彼女は言つた。『あの方がわたくしの事を思つて下さる感情は、父親の心持とばかりは言へないかも知れませんが、それかと言つてあの方の訪問をお断りする譯にも參りませぬわ。Je ne suis pas un homme pour être ingrate (わたくしは男のやうに、恩知らずな眞似は出来ませんからね。)』けれど

も、自分の胸の奥深く秘めてある心持に就いては、わたくし神様と良心だけに責任を負ふつもりでございます。どうかそれを承知下さいまし。』彼女は高く盛り上つた美しい胸に片手を當てて天を眺めながらかう語を結んだ。

『だが、どうか後生だから、わたしの言ふことを聞いて下さい。』

『わたくしと結婚して下さいまし。そしたら、わたくしあなたの奴隷になりますわ。』

『けれどそれは出来ない事ですよ。』

『あなたはわたくしと結婚遊ばすのを、お身分にか、はる事だと思つてゐらつしやるのでございませう、あなたは……』エレンは泣きながらかう言つた。

親王は彼女を慰めに掛つた。するとエレンは、自分の結婚を妨げるものは誰もない、さう云ふ例は世間にもある(その時分まださう云ふ例は少かつたが、彼女はナポレオンや、其他高貴な人の名を挙げた)、自分は一度も今の良人の妻であつたことはない、たゞ人身御供に上げられただけだと、涙ながら(前後を忘れたと云ふやうな風で)搔き口説いた。

『でも法律や宗教が……』と親王はもうそろ／＼降参しながらかう言つた。

『法律、宗教……もし法律や宗教にこれだけの力がないなら、一體何のために考へ出されたのか、譯が分らないぢやありませんか』とエレンは言つた。

高貴な人はこんな單純な分別が、頭に浮ばなかつたのに驚かされた。そして自分に密接な關係がある、イエス協會の僧侶に相談を持ちかけた。

それから二三日経つて、よく石島カレンス・イーストロフの別荘で開かれるエレンの豪華な宴會の席で、雪白の髪と黒い光のある眼を持つた、餘り若くないけれど魅力に富んだ、モッシュ・ド・ジョーベルイム・ド・ジョーベルが彼女に紹介された。この人は un jésuite à robe courte (短衣のゼイット)であつた。彼は庭の裝飾燈の光を浴びて奏樂の響を聞きながら、神と基督と聖母のみ心に對する愛や、また唯一にして神聖なる加特力教によつて得られる、現世と來世の慰藉などと云ふことを、長い間エレンに話して聞かせた。エレンは感動した。彼女の眼にもジョーベルの眼にも、幾度か涙がにじみ出て、聲が震へた。その中に一人の男子カッレルが舞踏の相手としてエレンを呼びに來たので、彼女は未來の directeur de conscience (良心の指導者)との談話を妨げられた。けれどその翌晩、ジョーベルは一人でエレンを音づれた。そしてこの時から彼は始終彼女の家へ出入するやうになつた。

或る日彼は伯爵夫人を加特力の會堂へ案内した。彼女は導かれる儘に祭壇の前へ跪いた。餘り若くないが魅力に富んだ佛蘭西人は、彼女の頭に兩手をのせた。その時彼女は(後に自分で語つた所によると)何か爽やかな風のやうなものが、心の中へ吹き込むのを感じた。彼女はそれが

la grâce (恩寵)だと説明して聞かされた。

それから彼女の處へ a robe longue (綴の長衣) 修道院長が案内されて來た。彼は夫人の懺悔を聞いてその罪を許した。翌日使の者が聖餐を入れた箱を持つて來て、家で用ひるやうにと置いて行つた。幾日かの後エレンは、自分がもう聖なる加特力教へ入つたと云ふ事、近々法王も彼女の入門を知つて、何かの書類を送つて來る筈だといふ事などを聞いて、心から満足したのである。

この間に彼女の周圍や、その身の上に行はれた一切のこと——多くの賢明な人達から氣持のいい、洗練された形式で表現された注意や、今彼女を包んでゐる鳩のやうな清らかさ(エレンはその頃いつも白いリボンをつけた白い服を着てゐた)などは、すべて彼女に満足を與へたが、併しこれしきの満足のために、一瞬間でも自分の目的を見失ふやうなエレンではなかつた。いつも狡猾な仕事にかけては、愚かな人間が却つて伶俐な人を操るものであるが、彼女もこれ等の様々な言葉や手続きが、重に自分を加特力派へ引き入れて、ゼスイット教會のために金を搾るのを目的としてゐる、と云ふことを悟つた(彼女はこの事を匂はされたのである)。そこで、金を出すより先に、まづ良人から解放して貰ひたいと主張した。彼女の考へによると、すべて宗教なるもの、意義は、ただある程度の體面を保ちながら、人間の慾望を満足させることにあつた。彼女はこの目的を以て、あるとき自分の懺悔司僧と話をしてゐる中に、今の結婚がどの位まで自分を縛つてゐるかと思ふ疑問に對して、執拗く答へを求めたのである。

二人は客間の窓際に腰を掛けてゐた。それは黄昏時であつた。窓からは花の香が漂つて來た。エレンは胸や肩の邊のすき通る白衣を着てゐた。滑らかに刺り上げたふつくり肉附きのよい顔と固く締つた氣持のよい口を持つた、如何にも營養のよさ、うな修道院長は、白い手をつ、ましく膝の上に組み合せたま、エレンの傍にちか／＼と腰を掛けて、唇に微妙な笑みを浮べながら、彼女の美に感じ入つたやうな、しかも平和な眼ざしで時々相手の顔を見た。さうして二人の心を占めてゐる問題について、自分の見解を述べるのであつた。エレンは落着きのない微笑を浮べて、相手のうね／＼渦卷いた髪や、滑らかに刺り上げた、黒味がかつた、肉附きのよい頬を見詰めるが、今か／＼と話の局面一轉を待つてゐた。しかし僧は話相手の美を味はひ楽しみながらも、自分の業の巧みさに一人で夢中になつてゐた。

良心の指導者は次のやうに論歩を進めて行つた。エレンは自分のなさんとしてゐる行爲の意味を知らないで、或る人に妻として永久の貞操を誓つた。ところが、その人もまた結婚の宗教的意義を信ぜずに結婚して、瀆神の罪を犯したのである。で、この結婚は本來有すべき二重の意義をもつてゐなかつた。しかし、それにも拘らず、彼女は矢張り自分の誓ひに縛られてゐる。所が、彼女はその誓ひを破つた。これは果して何を意味するであらう? Pêché véniel ou péché mortel (許さるべき罪か、それとも死に當る罪か?) 無論許さるべき罪である。なぜと言つて、それは悪意なくして行つたものだから

らである。で、もし彼が子供を儲ける目的で新たに結婚するならば、その罪は許され得る筈である。しかし問題はまた二つに分れる、第一には……

『でも、わたくしかう考へますの。』もう退屈し切つたエレンは、例の妖艶な微笑を浮べながら、突然かう言ひ出した。『わたくしはもう本當の宗教に入つたんですから、偽りの宗教の定められた掟に縛られる筈はありません。』

良心の指導者は餘りにも無造作に、目の前へコロンブスの卵を突き出されたので、吃驚して立つた。彼は自分の弟子の進歩が意外に速いのに感心したが、しかし自分が粒々辛苦の末に築き上げた論證の建物を、やす／＼と思ひ切るわけに行かなかつた。

『Entendons-nous, comtesse (伯爵夫人、お互に理解し合はうではありませんか。)] 彼は微笑を含みながらかう言つて、教への娘の意見を駁し始めた。

七

エレンは宗教上の見地から見ると、この事件が非常に單純で、容易なことを悟つてゐた。しかし彼女の指導者達は、俗權がこの問題をどう見るかと云ふ點を心配してゐたので、いろ／＼面倒な事を言ひ出した。

その結果エレンは社交界でも、少し下地を作つて置かねばならぬ、とかう決心した。彼女は老
大官の嫉妬を呼び醒して、最初の戀人に言つたのと同じ話しを持ち出した。つまり、彼女に對する權利を獲る唯一の方法は、結婚より外にないと言ふのであつた。最初は老大官も若い親王と同じやうに、存命中の良人を捨て、結婚しようなどと云ふ、彼女の申し出に驚かされた。しかし、それは處女の結婚と同様に單純で自然なものだと云ふ、エレンの確乎不拔な信念が老人を動かした。もし當のエレンに少しでも動搖や、羞恥や、祕密の色が認められたら、確かに事は失敗に終つた筈であるが、單にさういふ祕密や羞恥の影が認められないばかりか、却つて彼女は單純で正直で無邪氣な態度を以て、自分の親しい友達——つまり彼得堡全體——に向いて、親王と大官が同時に結婚を申し込んだが、自分は二人を同じやうに愛してゐるので、何方を悲しませるのも心苦しいといふ話をした。

見る／＼中に彼得堡全體へ擴まつたのは、エレンが良人との離婚を企ててゐると云ふ噂ではなくて(もしこんな噂が擴まらうものなら、多くの人々はこの不法な意向に反對したに違ひない)、あの興味のある不幸なエレンが、二人のうち何方と結婚しようかと、思ひ惑つてゐると云ふ噂であつた。それがどの位の程度まで可能であるか、と言ふやうな事はもう問題にならなかつた。たゞ何方と結婚した方が有利であるか、宮中ではどう云ふ風にこの事を見るか、と云ふことが重大

問題であつた。事實、中には頑固な分らずやがるて、高遠な問題の眞髓に達する事も出来ないくせに、この事を以て結婚の神聖を瀆すものと見做した。しかし、さう云ふ連中は少かつた上に、大抵沈黙を守つてゐた。多くはエレンを音づけた幸福と云ふ問題に興味を持つて、何方を選んだ方が有利だらうか、と云ふ風に語り合ふだけで、良人在生中に結婚してもよいかどうか、などと云ふ事についてはまるで口を開かなかつた。なぜと云つて(彼等の口吻を借りると)、「お互に我々風情」と違つた賢い人達に取つては、こんな事など明かに疾くの昔解決された問題で、この解決の正非を疑ふのは、自分の無智や世間知らずを表明する虞があつたからである。

息子の一人に會ふために、この夏彼得堡へ出て來たマリヤ・ドミートリエヅナ・アフロシーモワだけは、たゞ一人輿論に反した意見を剥き出しに述べた。ある舞踏會でエレンに出會つたとき、マリヤ・ドミートリエヅナは彼女を大廣間の眞中に呼び止めて、満座の静まり返つてゐる中で、持前の粗つぽい聲でかう言つた。「お前さん方の仲間では、この頃旦那を捨て、嫁に行く事が流行り出したんだつてね。お前さんはそんな事をして、何か新奇な事でも考へ出した積りなんだから? 所が、お生憎さま、先を越されましたよ。もう疾くに考へ出されたことで、どこでも……そんな風にやつて居りますよ。」マリヤ・ドミートリエヅナはかう言ひながら、例の恐い身振りで廣い袖をたくし上げ、嚴つい眼つきで邊りを見廻し、部屋を通り抜けて行つた。

彼得堡の人達は内心恐れてゐる癖に、マリヤ・ドミートリエヅナをまるで道化者のやうに考へてゐた。それ故彼女が言つた事の中で、たゞ亂暴な言葉にばかり氣を付けて、それを互に囁き合ふのであつた。彼等はこの言葉だけに話の面白味が、含まれてゐるやうに想像したのである。

近頃殊に自分の言つた事をよく忘れて、同じことを百遍ぐるる繰り返すやうになつたヴシーリイ公爵は、娘を見る度に必ずかう言ふのであつた。

「Hélène, j'ai un mot à vous dire (エレン、わしはお前だ) 彼は娘をわきの方へつれて行つて、その手をぐいぐい下へ引つ張りながらかう言つた。「わしは或る計畫を噂に聞いたんだがね……それから、お前も知つてゐるあの事さ。なあエレン、お前にも分るだらう、わしは父親として心から喜んでゐるのだ、そのお前が……お前も随分苦勞したからなあ……しかし、エレン……お前は自分の良心が命じるやうにするがよい、これでわしの忠告はお終ひだ。」

かう言つて彼は何時も同じ興奮を隠しながら、自分の頬を娘の頬に押し當て、彼女の傍を離れるのであつた。

最も聰明な人と云ふ名聲を失はずにゐるピリピンは、野心のないエレンの親友であつた。つまり華々しい婦人の傍に必ず無くてならぬ親友——決して戀人の役目に移る事の出来ない親友の一人であつた。或る日ピリピンは petit comité (小さな親しい仲間同士の席) で、親友のエレンに今度の事件に對す

る自分の意見を述べた。

『Ecoutez, Bilbine (リバン)』(エレンはビリビンのやうな親友を、いつも姓だけで呼んでゐた)——かう言つて彼女は指環を一杯飲めた白い手で、相手の燕尾服の袖にちよいと觸つた。「ねえ、ビリビン、どうしたらいいでせう、わたしを妹だと思つて教へて下さいな、一體二人のうち何方にしたものでせうね?」

ビリビンは眉の上に皺を寄せて、唇に微笑を浮べながら考へ込んだ。

『それはわたしにとつて、別段不意打ちでもありませんよ。』と彼は言つた。「わたしは心からの友達として、あなたの問題を長い間考へて見ました。いいですか、もしあなたが親王と(これは若い人の事であつた)結婚なされば、』彼は一本の指を折つた。「あなたは永久にもう一人の方の夫人となる可能を失ふ譯です。のみならず、宮中でも不満に思はれるでせう(そこには親戚關係も交りますからね)。所が、もし老伯爵と結婚なされば、あの人の晩年を幸福にしてお上げになる譯ですし、それに後から……親王と結婚なされるにしても、大官の未亡人なら大して不釣合ぢやありませんからね。』かう言つてビリビンは額の皺を伸した。

『Voilà un véritable ami (あなたは本當にわたしのお友達ですわ!)』エレンは满面笑み輝きながら、もう一度ビリビンの袖に觸つてかう言つた。「けれどわたしは両方とも愛してゐますから、どちらにも厭な思ひを

させたくないんですの。わたしお二人を幸福にするためなら、命なんか何時でも投げ出しますわ。』と彼女は言つた。

ビリビンは肩を竦めながら、さう云ふ悲しみになると、もう自分でさへどうする事も出来ない、と云ふ意を見せた。

「どうも偉い女だ! Poser carrément la question (問題を横から見る)とはこんなのを言ふのだ。この女なら同時に三人の男の妻にもなり兼ねないだらうなあ。」とビリビンは考へた。

『しかしね、ご主人はこの事件をどうご覽になるでせう?』と彼は言つた。こんな幼稚な問を發しても、すつかり固定した自分の名聲を落すやうなことはあるまいと思つたので。「あの人は承知されるでせうか?」

『Ah! Il m'aime tant (あ! あの人には本當にわたしを愛してゐるんですもの!)』とエレンは言つた。彼女は何かビエールが、矢張り自分を愛してゐるやうに思はれたのである。「Il fera tout pour moi (あの方はわたしのためにならま)』

ビリビンはこれから警句が出ますぞと云ふやうに、額に皺を寄せた。

『Même le divorce (離婚)』と彼は言つた。

エレンは笑ひ出した。

エレンの計畫してゐる結婚の正非を疑ふ不心得者の中には、エレンの母たるクラリーギナ公爵夫人も交つてゐた。彼女はいつも現在の娘に對する羨望に苦しめられてゐたが、今度は自分の心に一番近い者が嫉妬の原因になつたので、どうしても妥協することが出来なかつた。公爵夫人はあゝ露西亞人の僧侶に相談して、在世中の良人と離別してほかの男と結婚することが、如何なる程度まで可能であるか糺して見た。僧侶はそれを不可能だと云つて、聖書のテキストを示して彼女を喜ばした。それは良人の存命中に、ほかの者と結婚することを、直截に否定したものであつた。

到底反駁できさうもないこの證明を武器として、公爵夫人は娘一人だけに會ふつもりで、朝早く彼女の許へ馬車を驅つた。

母の反對を聞き終ると、エレンはつゝ、ましけな嘲笑を浮べた。

『だつて聖書にもちやんと云つてあるでせう、離婚したる女を娶るものは……』と老公爵夫人は言ひかけた。

『Ah, maman, 馬鹿々々しいことを仰しやるもんぢやなくつてよ。あなたは何もお分りにならないんですわ。 Dans ma position j'ai des devoirs (わたしの境遇にはあるべき義務がありますから。)] エレンは露西亞語から佛蘭西語に翻譯しながら言ひ出した。彼女は何時も露西亞語で話をする、何だか筋道がはつきり

しないやうな氣がしたのである。

『でも、お前……』

『Ah, maman, あなたはどうしてお分りにならないのでせう。赦免の權利を持つてゐらつしやる神父さまが……』

エレンの家に寄食してゐる話相手の婦人が、この時部屋へ入つて來た。そして殿下が廣間で待ちながら、エレンに會ひたいと云つてゐる由を取り次いだ。

『いやです、わたしあの人に會ひたくないつて、さう言つて下さいな、あの人は約束を守らないから、わたしもう腹が立つて堪らないんですの。』

『Comtesse, à tout péché miséricorde (伯爵夫人、どんな罪にせよ許しがあります。)] 長い顔に長い鼻をした、髪の毛の白つぽい若い男が、入りながらかう言つた。

老公爵夫人は恭しく立ち上つて小腰を屈めた。けれど入つて來た若い男は、そんなことにまるで注意を向けなかつた。公爵夫人は一寸娘に點頭いて、する／＼と戸口の方へ迂つて行つた。

「なる程、あれの云ふ通りだ。」と老公爵夫人は考へた。殿下の出現と共に、夫人の信念はすつかり崩れて了つたのである。「なる程、あれの言ふ通りだ。わたし達は二度と返らぬ若い時代に、どうしてあゝ云ふ事に氣がつかなかつたのだらう？ 本當に何でもない事ぢやないか。」老

公爵夫人は馬車に乗りながらかう考へた。

八月の初め、エレンの事件はすつかり決つて了つた。彼女は自分の良人（エレンの考へによると、非常に彼女を愛してゐる良人）に手紙を書いて、自分は今度N・Nと結婚しようと思つて、唯一の眞實な宗教に入つたから、この狀持參人の指圖に依つて、離婚に必要なあらゆる形式を履行して貰ひたい、とかういふ意味を通知した。

『Mon ami (わが友よ) 終りに臨み、おん許様が聖くして力強きおん神の庇護の下におはさんことを祈り上げ參らせ候。親しき友なるエレンより。』

この手紙はピエールがボロヂノの戰場にゐたとき、彼の家へ届けられたのである。

八

もうボロヂノの戦も終る頃、再びラーエフスキ砲臺から駈け下りたピエールは、兵士の群とともに谷を傳つてクニャジコーブへ向ひ、繃帶所まで辿り着いた。けれども血を見たり、叫びや唸きの聲を聞いたりすると、またもや兵士の群に紛れ込んで、急いで先へ歩き出した。

ピエールが今心の底から一心に願つてゐるのは、この日一日浸つてゐた恐しい印象から、少しも早く遁れ出て、ふだんの生活條件に歸り、自分の部屋の寢臺の上で靜かに眠る、と云ふことだ

けであつた。ふだんの生活條件に入りさへすれば、自分自身も、自分が見かつ経験したことも、すべて理解出来るだらうと思つたのである。しかしこの不斷の生活状態はもう存在しなかつた。今彼の歩いてゐる街道では、砲彈や銃丸こそ唸つてゐなかつたが、しかし四方の光景は矢張りあの戰場と同じであつた。矢張り同じ苦しさうな疲れた顔（どうかすると變に無關心な顔もあつた）、同じ血、同じ軍隊外套、遠くはなつたけれど、依然として恐怖を誘ふ同じ砲聲——しかもその上に蒸すやうな暑さと埃。

モジャイスク大街道に沿つて三露里ばかり行くと、ピエールは路ばたにべつたり坐つて了つた。黄昏は地上に降つて、大砲の轟きも靜まつた。ピエールは肘杖ついて横になつた。そしてくら闇の裡を通り過ぎる黒い影を眺めながら、長い間かうしてじつと臥つてゐた。砲彈が絶え間なく恐しい唸りを立てながら、自分の方へ飛んで来るやうに思はれた。彼はその度に身慄ひしながら身を起した。彼はどのくらゐ其處にゐるか、まるで覺えがなかつた。夜中に三人の兵士が木の枝を引き摺つて来て、彼の傍に陣取つて火を焚き始めた。

二人の兵士は横眼でピエールを見ながら火を焚きつけ、その上に鍋を載せた。そして鍋の中へ粉々に砕いた乾麵麩と脂を入れた。脂つこい食べ物のかい香りが、煙の匂に混り合つた。ピエールは身を起してほつと吐息をついた。兵士等は（彼等は三人づれであつた）ピエールには目もく

れずに、喰べたり話し合つたりしてゐた。

『ときに、お前は何隊のものだね?』一人の兵卒が突然ビエールに聲を掛けた。察するところ、彼はこの間によつて、ビエールが考へてゐる事を匂はせたものらしい。つまり、もしお前が喰べたいのなら遣りもするが、たゞお前は正直な人間かどうか先づそれを言へ、とかう云ふ意味らしかつた。

『わたしかね? わたしかね? : : :』とビエールは言つたが、兵士らに接近してその理解を得るには、なるべく自分の社會上の地位を低くする必要があると感じた。『わたしは、實の所、民兵將校なんだが、部下のものがあるないんだ。わたしは戦争に來て部下をなくして了つたんだ。』

『へえ、なるほど!』と一人の兵卒が言つた。
いま一人の兵卒は頭を振つた。

『どうだね、宜かつたらごつた汁を一杯やりなさいな!』最初の兵卒はかう言つて、木匙を舐め廻しながらビエールに渡した。

ビエールは焚火に近く腰をおろし、ごつた汁を啜り始めた。鍋の中に入つてゐるこの食べ物、今まで食べたどんな料理よりも、一番美味い物のやうに思はれた。彼が鍋の上に屈み込んで、木匙で大きくしやくひながら、一杯々と食するやうに呑み下してゐる間、兵士らは焚火の光に照

し出されたその顔を、黙つてまじく見つめてゐた。

『お前さん何處へ行くんだね? 言つて聞かせなさい?』とまた一人が訊いた。

『わたしはモジャイスクへ行くんだ。』

『ちや、お前さんは旦那だね?』

『さうだ。』

『そんなら名前は何と云ひなさる?』

『ビョートル・キリーロギッチ。』

『ちや、ビョートル・キリーロギッチ、一緒に行かうよ。おれ達お前さんを送つてあげるから。』兵士らは眞暗な闇の中を、ビエールと一緒にモジャイスクさして出かけた。

彼等がモジャイスクへ着いて、町の険しい坂を登り始めた時には、もう鶏が鳴いてゐた。ビエールは自分の宿が坂の下にある事も、もう其の前を歩き過ぎて了つたことも忘れて、兵士らと一緒に歩いてゐた。もし坂の途中で自分の調馬師に出會はなかつたら、彼はそんなことなど想ひ出しもしなかつたに違ひない(彼はそれほど放心状態に陥ちてゐるのである)。調馬師は彼を捜して町ぢう歩いた揚句、いま宿へ引つ返してゐるところであつた。彼は闇の中に白く見える帽子で、ビエールを見分けたのである。

『ご前、』と彼は聲をかけた。『わたくし共はもう諦めてゐた所でございます。どうして又お徒歩で？ 一體何處へいらつしやいますので？ どうか此方へ！』

『あ、さう。』とピエールは言つた。

兵士らは立ち止つた。

『何かね、部下が見付かつたのかね？』と一人の兵卒が言つた。『ぢや、左様なら！ ピョートル・キリーロギッチ——たしかさう云ふんだつたね？』

『左様なら、ピョートル・キリーロギッチ！』と他の兵士らも言つた。

『左様なら。』とピエールも言つて、調馬師と一緒に宿の方へ歩き出した。

「あの連中に金をやらなきやなるまい！」ピエールは衣囊へ手を當てながら考へた。「いや、やらない方がいゝ。」ある心内の聲が彼にかう言つた。

宿は何處もかしこもみんな塞がつてゐた。どの部屋も人で一ぱいであつた。ピエールは庭へ出て、頭からすつぽり外套を被つたまゝ、自分の幌馬車に身を横たへた。

九

ピエールは枕に頭を觸れるが早いか、もう眠りに落ちて行くのを感じた。と、不意に殆ど現實

と同じ明瞭さを以て、どん、どん、どんと云ふ砲聲が聞えた。そして人の呻いたり叫んだりする聲や、砲弾が柔い物にぐしやりと當る音も聞えれば、なま血や火薬の匂もした。死の恐怖が彼を捕へた。彼は憎えたやうに眼を見開いて、外套の下から頭を持ち上げた。庭の中はどこもかしこもしんとしてゐた。たゞ門の傍を従卒らしい男が庭番と話しながら、ぬかるみをぴちやく／＼言はして歩いてゐるだけであつた。ピエールの頭上つひさに當る薄暗い板庇の蔭で幾羽かの鳩が、ピエールの身を起す氣配に驚いて羽ばたきした。いかにも宿屋らしいのんびりした匂——乾草や肥料こやしやタールなどの匂が、庭一面に濃く漂つてゐた。それがこの場合ピエールに取つて喜ばしかつた。二つの黒い庇の間には澄んだ星空が見えてゐた。

「有難い、もうあんな事はないだらう。」また頭からすつぽり外套を被りながら、ピエールはかう考へた。「あ、何といふ恐しいこつたらう。そして何だつて俺はあんなに見苦しく、恐怖に打ち負かされて了つたのだらう！ ところが彼等は……彼等は最後までびくともせずに着いてゐたつけ……」と彼は考へた。

ピエールの心の中で、彼等と云ふのは兵士らであつた。砲臺で働いてゐたのや、彼にごつた汁を喰はせたのや、聖像に祈禱したのや——さう云ふ兵士らであつた。ピエールが今まで知らなかつた不思議な彼等——この彼等は彼の心の中ではつきり他の人と區別されてゐた。

「兵卒になるんだ。たゞもう兵卒になりさへすればいいんだ。」とピエールは眠りながら考へた。「あの共同生活に自分の全存在を打ち込んで、彼等をあゝ云ふ風にした或る物に滲透しなければならん。しかしどうしたらかう云ふ餘計な、呪はしい、外的人間の重荷を残らず棄てること出来るだらう？ 一時は俺もあゝ云ふ人間になれさうだつた。俺は自分の望んでゐた通り、親父の家から逃げ出すことも出来たのだ。それから又ドーロホフとの決闘後だつて、一兵卒になり得る機会もあつたのだ。」すると、ドーロホフに決闘を挑んだ俱樂部の晚餐會と、トールシユクで出廻つた恩人の事が、ピエールの想像の中に閃いた。かと思ふと、ピエールの目には莊嚴な組合の會食の光景が映つた。この會食は英吉利俱樂部で行はれてゐるのだ。誰か見覚えのある親しく貴い人が、食卓の一端に腰を掛けてゐる。さうだ、これはあの人だ！ これは自分の恩人だ。「だが、あの人は死んだぢやないか？」とピエールは考へた。「さうだ、死んだのだ。しかし俺はあの人が生き返つたことを知らなかつたのだ。俺はあの人の死んだのが實に残念だ。しかしあの人が生き返つたのは實に嬉しい！」食卓の一方の側にはアナトリーや、ドーロホフや、ネスギーツキイや、ヂュニソフや、その他これに似寄つた人達が腰掛けてゐた（ピエールの心の中では、彼が彼等と名づけてゐる人々の範疇と同じく、かう云ふ人々の範疇も夢ながらはつきり定められてゐた）。そしてかう云ふ人々、即ちアナトリーやドーロホフなどは、大聲で叫んだり歌つたり

してゐた。けれど彼等の叫び聲の陰から、絶えず何やら話してゐる恩人の聲が聞えた。その話し聲は戦場のどよめきのやうに、絶え間なく意味ありけに續いてゐたが、しかし快い慰めるやうな響をもつてゐた。ピエールは恩人の言つてゐる事が分らなかつたが（思想の範疇も矢張り夢の中ながら明瞭であつた）、いづれ善行の話や、彼等のやうになることも出来ると云ふ話に違ひない、それはちやんと分つてゐた。彼等は單純で人の好きさうな、しつかりした顔附をして、四方から恩人を取り巻いてゐた。みな善人ではあるけれど、しかしピエールの方を見向きもしなければ、また彼の存在を知らうともしなかつた。ピエールは彼等の注意を自分の方へ惹きつけて、何か言ひたいと思つた。彼は少し身を起した。と、その瞬間、兩足が冷えて露はになつた。彼は恥しくなつたので、片手で自分の足を蔽うた。實際外套が足からすり落ちたのである。ピエールは外套を直しながら一寸の間目蓋を見開いた。すると例の庇や柱や庭が目に入つた。けれどこれらのものは今青みを帯びて、露のためか凍のためか、明るくきら／＼光つてゐた。「夜が明けて来るんだ。」とピエールは考へた。「だが、そんなことは問題ぢやない。俺は恩人の話を終ひまで聞いて、その意味を悟らなければならぬ。」彼はまた外套を引つ被つたが、もう食卓も恩人も見えなかつた。たゞ言葉ではつきり言ひ現される思想があるばかりだつた。それは誰か人が言つたのか、それともピエール自身が考へたのか、よく分らなかつた。

その後ピエールはこの思想を想ひ起す度に、それが晝間の印象に呼び醒されたものだとは承知しながら、自分以外の誰か言つて聞かせてくれたものと、固く信じて疑はなかつた。うつ、でこんな風に思索して、こんな風にその思索を表現する事は、到底出来ないやうに思はれた。

「一番難かしいのは、人間の自由を神の掟に従はせることだ。」と何かの聲がかう言つた。「淳朴とは神に對する従順である。神の掟を遁れることは出来やしない。それで彼等は淳朴なのだ。彼等は口で言はないで實行してゐる。口から出た言葉は銀だが、口から出ない言葉は金だ。人間も死を恐れてゐる間は、何物をも領有する事が出来ない。たゞ死を恐れない者にのみすべてが與へられるのだ。苦痛と云ふものがなければ、人間は自分の分限を知ることが出来ない。自分自身を知ること出来ない。一番難かしい事は（ピエールは矢張り夢でかう考へてゐた——と云ふより寧ろ聞いてゐた）、心の中にすべての物の意義を結合することだ。すべてを結合する？」とピエールは自問した。「いや、結合するんぢやない。思想を結合することは出来ない。つまり、かういふ思想を残らず繋ぐんだ。こいつが必要なんだ！ さうだ！ 繋がなきやならない、繋がなきやならない！」ピエールはこの言葉に依つて、全くこの言葉のみによつて、自分の言ひたいと思ふことが表現され、自分を苦しめてゐる問題が全部解決されるのだと感じて、内心の歡喜を覺えながらかう繰り返した。

『さうだ、繋がなければならぬ、もう繋がなければならぬ時分だ。』

『ご前、繋がなければなりません（馬を馬車に繋ぐ意——譯者）、もう繋がなければならぬ時刻でございます！ご前。』と誰かの聲が繰り返した。『繋がなければなりません、繋がなければならぬ時刻でございます……』

これはピエールを呼び起す調馬師の聲であつた。太陽はピエールの顔へ眞正面に照りつけてゐた。彼は宿屋の汚い庭を見た。その眞中にある井戸の傍では、兵士らが瘦せ馬に水を飲ませてゐるし、門からは荷馬車ががらく／＼出て行つた。ピエールは嫌惡の念を抱きながら顔を反けた。そして眼を閉ぢながら、急いでまた馬車の腰掛けに身を投げた。「いや、俺はあんなものは厭だ、あんなものは見たくもなければ、分りたくもない。俺はたゞ夢で啓示された事を悟りたいのだ。もう一息で——俺はすっかり悟る所だつたがなあ。それにしても、俺はどうすればいいのだらう？ 繋ぐと云つても、どうして一切を繋ぐんだらう？」夢で見たり考へたりしたことの意味が、残らず崩されて了つたのを感じて、ピエールは思はず慄然とした。

調馬師や、馭者や、庭番がピエールに話したところによると、ある一人の將校がやつて来て、佛蘭西軍がモジャイスクへ追つたので、いま我軍は退却しつゝある、と云ふ報告を齎らしたとの事であつた。

ピエールは起き上つた。そして馬車の支度をして、後から追つて来るやうに吩咐けると、町を突つ切りながら徒歩で歩き出した。

軍隊は一萬人ばかりの負傷兵を残して出發した。これらの負傷兵は家々の庭や窓にも見えてゐたし、往來にも群をなしてゐた。往來に置かれた負傷兵運搬用の荷馬車の傍には、叫ぶ聲、罵る聲、叩く音などが聞えた。ピエールは後から追つついて來た自分の幌馬車を、負傷した知り合の將官に貸して、その人と一緒に莫斯科まで乗つて行つた。途中でピエールは自分の義兄の死と、アンドレイ公爵の死を知つたのである。

一〇

ピエールは三十日に莫斯科へ歸つた。殆ど町の城門の傍で、彼はラストープチン伯爵の副官に出會つた。

『わたし達は方々あなたを捜してゐたんですよ。』と副官は言つた。『伯爵が是非あなたのお目にかゝりたいと言つて居られるのです。非常に重大な事件について、今直ぐあなたのご出頭を願ひたいと言ふことです。』

ピエールは家へ寄らずに、辻馬車を雇つて總督の許へ赴いた。

ラストープチン伯爵はやつと此の朝、郊外なるソコーリニキイの別荘から、町へ歸つて來たばかりのところであつた。伯爵邸は客間も應接間も、召喚されて來た官吏や、命令を訊きに來た官吏などで一杯になつてゐた。ワシーリチコフとブラートフはもう伯爵に面會して、莫斯科の防禦が到底不可能で、結局明渡しより外に方法がない旨を報告した。この報告は住民に秘してあつたけれど、各官廳の官吏や長官は、ラストープチン伯爵と同様に、莫斯科が敵手に渡ることを知つてゐた。そこで彼等は自分の責任を通れるために、めい／＼受持の部署をどう處置したものか、總督のところへ訊きに來たのである。

丁度ピエールが客間へ入らうとした時、戦地から來た急使が、伯爵の居間から出て來るところであつた。

急使は一同から浴せ掛けられる質問に對して、駄目だと云ふやうに片手を一振りすると、そのまゝ、廣間を抜けて出て行つた。

ピエールは客間で待つてゐる間に、部屋に居合はす老若さま／＼の文武官を疲れた眼で見廻した。誰もみな不満と不安を感じてゐるやうであつた。ピエールは知り顔の一人交つてゐる、官吏の一團へ近づいた。彼等はピエールに挨拶すると、矢張り前の話を續けてゐた。

『一旦送り出しといへばまた返したら、別に困る事はないだらう。かうなつたらどんな事だつて

責任は持てないからね。』

『しかし、これにはかう書いてあるんだ……』今一人が手に持った印刷物を指さしながらかう言った。

『それは別だよ。人民にはさう云ふものも必要だからね。』と最初の男が言った。

『それは何ですか?』とビエールは訊いた。

『いや、なに、新しいびらなんですよ。』

ビエールは手に取つて讀み始めた。

『元帥閣下は加勢に行つてゐる軍隊と、少しも早く一緒になるために、モジャイスクを通過して、要害堅固の土地を占領せられた。こゝなら敵も急には攻撃出来まい。閣下の所へは四十八門の大砲に砲弾を添へて送つた。閣下は最後の血の一滴まで莫斯科を防いで、市街戦さへ辭せない覺悟だと言つて居られる。市民諸君よ、諸官廳が閉鎖されたと言つて、氣にしてはならない。一時の取片づけは止むを得ない。しかし我々は今にあの悪人を裁いてやるのだ! 愈々かうと云ふ時には、勇敢な市民村民が必要になる。その時には二日の間喚きつゞけて召集しよう。しかし今は其の必要がないから、自分もかうして黙つてゐる。斧もいゝ、猪槍も悪くない、が、一番よいのは三叉熊手だ。佛蘭西人は裸麥の束ほども重くはなからう。明日の午後自分はイエールスカヤ

の聖母像を起して、エカチェリーニンスカヤ病院の負傷兵を訪問し、そこで聖水式を行はう。さうすれば負傷兵らは立ち所に全快するだらう。自分も今は健在だ。以前は片眼を病んでゐたが、今は兩方の眼でよく睨んでゐる。』

『所で、わたしは軍人側から聞きましたがね、』とビエールは言った。『市中ではどうしても戦争出来ないと言ふことですよ、陣地が……』

『さうですとも、僕達もそれを言つてゐるんですよ。』と第一の官吏が言った。

『ですが、以前は片眼を病んでゐたが、今は兩方の眼でよく睨んでゐる、と云ふのは一體何のことですか?』とビエールは訊いた。

『それは伯爵にも、もらひが出来てゐたのです。』と副官は微笑しながら言った。『いつか人民共が、御前はどうか遊ばしたのかと訊きに來たので、わたしがその事を申し上げると、伯爵は非常に心配してをられました。ときに、伯爵、』副官は突然にやりと笑ひながら、ビエールに向いてかう言った。『噂に依ると、お宅では何か家庭内のごたくがお有りになるさうですね。伯爵夫人が、奥さんが……』

『わたしは何も聞きませんが、』とビエールは平氣でかう言った。『どんなことを聞きました?』
『いや、なに、例の捏造なんです。わたしはたゞ聞いた事をお話するだけなんです。』

「一體どんなことをお聞きでした？」

「實は、噂に依りますと、」また例の薄笑ひを浮べながら、副官はかう言つた。「何でも伯爵夫人が——奥さんが外國行きの支度をしてゐらつしやるさうですよ。多分出鱈目でせうが……」

「さうかも知れません。」ピエールはぼんやり邊りを見廻しながらかう言つた。「時に、あれは誰ですか？」餘り脊の高くない一人の老人を指さしながら、彼はかう訊いた。それはさつぱりした青い上着を着て、雪のやうに白い鬚鬚と同じやうな眉を生やし、ばら色の頬をした男であつた。

「あれですか？ あれは商人ですよ。料理屋の亭主のエレシチャーギンです。あなたは宣傳書の一件をお聞きになつたでせう。」

「あ、それぢや、あれがエレシチャーギンですか！」年とつた商人のしつかりと落ち着いた顔を見詰めながら、ピエールは其處に叛逆の陰を探し出さうと努めた。

「あれは當人ぢやないのです。あれは宣傳書を書いた男の親父なんですよ。」と副官は言つた。

「息子の方は穴の中に打ち込まれてゐます。多分酷い目に合ふでせうよ。」

勳章を着けた一人の老人と、頸に十字章をかけた獨逸人の官吏が、話し仲間の傍へ近づいた。

「それはね、」と副官は物語を始めた。「随分こみ入つた話なんですよ。あの時分、丁度二ヶ月ほど前に、この宣傳書が出て來たのです。早速伯爵に報告しました。すると伯爵が調査を命じ

られたので、ガヴリーラ・イヴーヌイチが探査したところ、その宣言書は丁度六十三人の手を潜つてゐることが分りました。一人の所へ行つて、お前は誰から貰つたかと訊くと、誰それと答へる。で、また其の者の家へ行つて、お前は誰から貰つたか——と云ふやうな工合に段々手繰つて行つて、到頭エレシチャーギンまで辿り着いたわけです……生かじりの學問をした商家の息子でしてね、例のよくある小生意氣な若い衆なんですよ。」と副官は微笑しながら言つた。「お前は誰から貰つた？ とかうわたし達は訊きましたが、奴が誰から貰つたかつて事は、もうちやんと分つてゐたのです。郵便局長より外には、誰もやる人がないんですからね。しかし奴等の間に約束があると思つて、「誰からも貰ひません、わたしが自分で書いたのです。」と云ふ返事ぢやありませんか。嚇したり賺したりしましたが、どこまでも自分で書いたと頑張るのです。で、その通り伯爵に報告すると、伯爵は奴を呼び出されました。「お前は誰から宣傳書を買つた？」「自分で書きました。」所が、伯爵は「承知の通りの氣性ですから、」得々として愉快らしい微笑を浮かべながら副官はかう言つた。「恐しく激昂されましたよ……何しろ考へてもご覧なさい、どこまでも圖々しくつて、嘘ばかりついて、強情なんですからね……」

「は、あ！ 伯爵は郵便局長のクリュチャーレフだと言はせたかつたんでせう、さうだ！」とピエールは言つた。

「いや、そんな事は決してないです。」と副官は吃驚してかう言つた。「それでなくても、クリューチャーレフはちよい／＼悪い事をしてゐます。それがためにあの男も追放されたやうな譯ですからね。が、それは兎に角、伯爵は非常に憤慨されたのです。「どうしてお前に書けるものか！」と言ひながら、伯爵はこの漢堡新聞を卓子から取り上げて、「そら、これだ！ お前は自分で書いたのぢやなくて翻譯したのだ。而も拙い翻譯をしたのだ。馬鹿野郎、佛蘭西語も碌そつば知りやしない。」所が、その返事はどうだと思ひますか。「い、え」と來たぢやありませんか。「わたしは新聞なんか少しも読みません、自分で書いたのです。」——「もしさうなら、貴様は謀叛人だ。俺は貴様を裁判所へ引き渡すぞ。さうすれば貴様は絞首になるのだ。さア言へ、誰から貰つたのだ！」——「わたしは新聞なんかまるで読みません。自分で書いたのです。」判頭それで押し通して了ひました。伯爵は親父も召喚されましたが、やはり強情を張り通すので、結局裁判に付せられて、何でも懲役の宣告を受けた筈ですよ。今親父が息子の哀訴に來たのです。併し、何にしてもやくざな小僧つ子ですよ！ 例のよくある商家の息子で、女たらしの色男ですよ。何處かで何かの講義を聞いたたら、もう天下でも取つたやうな氣でゐるんですからね。實に仕様のない生意氣小僧ですよ。親父は石橋カインズイストの傍で料理屋をやつてゐますが、その料理屋には主なる神の大きな聖像がありましてね——一方の手には笏を持ち、今一方の手で地球を支へてゐる圖なの

です——ところが、奴はその聖像を幾日かの間家へ持つて行つて、まあ、どうしたと思ひです！ 性根の腐つた畫かきを見附けて……」

— 1 —

この目新しい物語の最中に、ビエールは總督の所へ呼ばれた。

ビエールはラストーブチン伯爵の書齋へ入つた。ビエールが入つて行つた時、ラストーブチンは顔を擧めながら、片手で額や眼をこすつてゐた。餘り脊の高くない男が何か話してゐたが、ビエールが入るや否や、ぴつたり口を噤んで出て行つた。

「やア、偉大なる戦士、ご機嫌よう。」男が出て行くと直ぐ、ラストーブチンはかう言つた。「君の *promesses* (武) に関する噂を聞きましたよ！ しかしそれは問題ぢやない。 *Mon cher, entre nous* (ねえ、君、此處) 君は共済組合員ですわね！」とラストーブチン伯爵は嚴つい調子で言つた。それは丁度、よくないことだと思ふけれど、それでも自分は赦してやるつもりだ、とでも言ふやうな工合であつた。ビエールは黙つてゐた。「*Mon cher, je suis bien informé* (ねえ、君、わたしは) しかし又それと同時に、共済組合員にも色々ある、と云ふことを承知してゐます。多分君は、人類を救ふやうな顔をして、そのじつ露西亞を滅ぼさうとしてゐるやうな、さういふ仲間ではありますま

いね。」

『さうです、わたしは共済組合員です。』とビエールは答へた。

『左様、ところがですね、君、あのスペランスキイやマグネーツキイなど、いふ連中が、當然やられるべき處へやられたのを、君も萬更知らないことはないでせうね。クリュチャーレフ氏も同じ運命に陥つたし、その他ソロモンの神殿建設と云ふ名目の下に、祖國の殿堂を破壊しようとする連中も、矢張り同じ憂き目を見ました。これにはそれ／＼原因があります。もし本當に有害な人物だと判明してゐなかつたら、わたしだつて當地の郵便局長を追放するなんて、さう云ふ譯には行かなかつた筈です。それは君も了解してくれるでせうね。今度わたしは確かな筋から聞きましたが、君は自分の馬車をやつて、あの男を町から引き上げさせたばかりか、あの男の書類さへ受け取つて保存してゐるさうぢやありませんか。わたしは君を愛してゐるから、君のために悪いやうな事はしません。君はわたしより半分から年が若いのだから、わたしは父親として忠告しますがね、あんな種類の人間とは一切關係を斷つて、君自身もなるべく速く此處を立つてお了ひなさい。』

『しかし伯爵、一體クリュチャーレフの罪狀はどう云ふ點にあるのですか？』とビエールは訊いた。

『それはわたしの知つて居るべきことで、君がわたしに訊くべきことぢやないです。』とラストープチンは呶鳴つた。

『もしあの人の罪がナポレオンの宣傳書を流布したと云ふことなら、それには確かな證據がないぢやありませんか。』ビエールはラストープチンの方を見ないでかう言つた。『そしてエレシチャーギンも……』

『Nous y voilà (なんぞそん)』不意に顔を擡めてビエールの言葉を遮りながら、前よりもつと大きな聲でラストープチンは呶鳴つた。『エレシチャーギンは謀叛人で賣國奴だ、だから相當の刑罰を受けるのが當り前だ。』ふつう人が侮辱を想ひ出した時に發するやうな、憎々しい逆上せあがつた調子で、ラストープチンはかう言つた。『しかし、けふ君を呼んだのは、わたしの仕事を詮議して貰ふためぢやなくつて、君に忠告——いや、もしお望みとあれば——命令を與へるためなのです。どうかお願ひだから、クリュチャーレフのやうな連中と關係を斷つて、こゝを引き上げて下さい。わたしは誰であらうと、すべての人の頭から馬鹿な考へを叩き出してふんだ。』ふと彼はまだ何の罪もないベズーホフを、呶鳴りつけてもゐるやうな自分の語調に氣がついたらしく、馴れ／＼しげにビエールの手を取つて言ひ足した。『何しろ我々は社會的災厄を眼前に控へてゐるのですからね、わたしも自分に用事があつて來る人に、残らず愛想を振りまいてゐる餘裕

がないんですよ。時には全く目の廻りさうな気がすることもありますよー Eh bien, mon cher, qu'est-ce que vous faites, vous personnellement (所び、君はどうかをひて)』

『Mais rien (別段なにも)』』ピエールは依然として眼を伏せたまゝ、考へ深さうな表情を變へずにかう答へた。

伯爵は顔を擧めた。

『わたしは君に友人として忠告してゐるんですよ、少しも早く退去なさい。A bon entendeur salit (よく他人の言葉を聞) ですよ。では君、左様なら。あゝ、さうく』と彼は扉越しにピエールに聲をかけた。『奥さんがジュスイット僧の毒手に落ちたと云ふのは、本當ですかね?』

ピエールは何とも答へなかつた。そして眉を擧めて腹立たしげな顔付をしながら、ラストープチンの書齋を出た。ピエールがこんな形相をしたのは、まだ今まで誰一人見たものがないくらいであつた。

彼が家へ歸つたのはもう黄昏どきであつた。この晩彼のところへ、種々雑多な人が八人ばかりやつて來た。それは委員會の祕書官と、ピエールの寄附した大隊の大佐と、執事と、支配人と、さまざまの無心者であつた。みんなそれぐ何か問題を持ち込んで來たので、それを一々解決してやらねばならなかつたが、ピエールは何を聞いても分らないし、またそんな問題に興味も感じ

なかつた。で、彼はすべての問題に對して、たゞこれ等の人々を追ひ拂ふことが出来るだけの返事をした。やつと一人きりになると、彼は妻の手紙を開封して讀んで見た。

『彼等——砲臺の兵士ら……アンドレイ公爵が戦死した……老人……淳朴は神に對する従順である。苦しまなければならぬ……すべてのもの、意義……繋がなければならぬ……妻は結婚しようとしてゐる……忘れなければならぬ、そして理解しなければ……』彼は寢臺の傍へ行つて、服も脱がずに床の上へ倒れると、そのまゝ、直ぐ眠りに落ちて了つた。

翌朝目を醒したとき執事が來て、ラストープチン伯爵の所から、特に一人の警官が派遣された——それはベズーホフ伯爵が退去したか、それとも退去の用意をしてゐるか、取り調べるためだと報告した。

ピエールに用のある種々雑多な人が十人ばかり、客間で彼を待つてゐた。ピエールは急いで着換へを濟ませ、自分を待つてゐる人達の方へ行かないで、裏口から門の外へ出て了つた。

その時から莫斯科荒廢の終りまで、ベズーホフ家の家人はありとあらゆる手段を盡して搜したけれど、誰一人ピエールの姿を見かけたものもなければ、その在りかを知る者もなかつた。

ロストフ一家は九月一日、即ち敵が莫斯科へ乗り込む前日まで町に留まつてゐた。

ペーチャがオボレンスキイ哥薩克聯隊へ入るために、目下この聯隊を編成中のペーラヤ・ツェールコフイへ出發した後、伯爵夫人は烈しい恐怖に襲はれた。自分の息子は二人とも戦争に出てゐる、二人とも自分の懐から去つて了つた、そして今日明日にも二人の中の何方か——いや、事に依つたら、知合ひの婦人が三人息子を失くしたやうに、二人とも同時に戦死しないものでもない、とかう云ふ考へが、今度この夏以來始めて、慘たらしい程はつきりと彼女の頭に浮んだのである。彼女はニコライを自分の傍に呼び寄せようとあせつたり、自分で出掛けて行つてペーチャを連れ戻し、彼得堡の何處かで勤めさせようと考へたりしたけれど、何方も駄目だといふことが分つた。ペーチャは聯隊と一緒に、または他の常備聯隊へ轉任されるか、その何方かでなければ歸京できなかつた。ニコライの方は公爵令嬢マリヤとの邂逅を、詳しく書いた手紙を寄越したきり、その後まるで音沙汰もないので、軍中のどう云ふ處にゐるか分らなかつた。伯爵夫人は夜もおちく／＼寝なかつた。たまさか寝ると、息子達が戦死した夢を見るのであつた。伯爵は色々相談したり談判したりした結果、到頭伯爵夫人を落ちつかせる方法を考へ出した。彼はペーチャをオボレンスキイ聯隊から出して、目下莫斯科で編成中のベズーホフ聯隊へ轉任させた。ペーチャは依然として籍こそ軍隊に置いてゐるけれど、伯爵夫人はこの轉任によつて、せめて一人の息子

だけでも膝もとに置くことが出来ると云ふ慰藉があつた。彼女はペーチャを自分の手許から放さないで、決して戦争に出會すことのないやうな、安全な場所へ入れようと楽しんでゐた。ニコラス一人だけが危険に曝されてゐる間は、彼女は他のどの子供より、長男が一番可愛いやうに思はれた(彼女はそのためにも良心の咎めさへ感じたほどである)。所が、今度いたづら者で、勉強嫌ひで、家のものを何でも毀して、皆にうるさがられてゐた末子のペーチャが——快活な黒い眼をして、生々と血色のいい、やつと頬にうぶ毛の生えて來た獅子の鼻のペーチャが——あの恐ろしい残酷な荒くれた大人達が何やら戦争しながら、それを面白がつてゐるやうな處へ入り込んだとき、母心として他の誰よりも、この子が一番可愛いやうに思はれて來た。待ち焦れてゐるペーチャの、莫斯科へ歸つて來る時が近づくに従つて、伯爵夫人の不安は次第に大きくなつた。彼女は自分の息がある中に、この幸福に會ふ事は出來ないやうにさへ感じられた。ソーニャばかりか、祕藏子のナターシヤや良人が傍にゐてさへも、伯爵夫人は苛々して來るのであつた。「あんな人達にはちつとも用事はありやしない。わたしはペーチャよりほか誰も見たくない！」と彼女は考へた。

八月の下旬にロストフ家では、ニコライから二度目の手紙を受け取つた。それはヴォロネジ縣から出したものであつた。ニコライは軍馬徴發のために、そこへ派遣されてゐたのである。こ

の手紙も伯爵夫人を安心させることは出来なかつた。一人の息子が危険區域外にゐることを知ると、彼女は餘計ペーチャの方が氣が、りになつて來た。

もう八月二十日頃から、ロストフ家の知人は殆ど全部莫斯科を出て行つた。そしてなるべく早く避難するやう、みんな伯爵夫人に勧めたけれど、彼女はまたと掛替へのない大切なペーチャが歸るまでは、出發など、云ふことにてんで耳を假さうともしなかつた。八月二十八日にやつとペーチャが歸つて來た。母は病的な情熱を以て彼を迎へたが、十六歳の將校にはそれが氣に入らなかつた。もう自分の懐から我子を放すまいと云ふ決心を、母は當人に隠してゐたけれど、ペーチャはその企らみに感づいた。で、母親に甘えて女々しくなるのを(彼は獨りでさう決めてゐた)本能的に恐れてゐたので、努めて冷やかな態度を示しながら、なるべく母を避けるやうにした。そして莫斯科に滞在中、たゞナターシャだけと仲よくしてゐた。彼は何時もナターシャに對して特別な、殆ど戀と言つてい、位な憐愛の情を抱いてゐた。

出發の支度は伯爵の例の暢氣な性分のため、八月二十八日になつても、まだ少しも出來てゐなかつた。リャザンと莫斯科の田舎から來る筈になつてゐた家財運搬用の荷馬車も、三十日にやつと着いたやうな有様であつた。

八月二十八日から三十一日にかけて、莫斯科全體は混雜と動亂の渦中にあつた。ドロゴミーロ

フスカヤ門からは毎日のやうに、ポロヂノ役の負傷兵が幾千となく運び込まれて、莫斯科の市中全體に散つて行くし、また住民や家財を満載した荷馬車は、幾千となく別の門から出て行くのであつた。ラストープチンが盛んにびらを撒いてゐるにも拘らず(或ひは、それに頓着しないでと言つた方が正しいか、或ひは、そのためと言つた方が更に正しいか、その點はよく分らないが)、非常に矛盾した奇怪な噂が町ぢうに傳へられた。誰一人逃げ出してはならぬと云ふ命令だ、かう主張する者があるかと思へば、又その反對に、聖像は一切各寺院から運び出され、住民はみんな強制的に追ひ立てられてゐる、と語る者もあつた。ある者はポロヂノ役の後にもた新しく戦争があつて、佛蘭西軍は撃破されたと言ふし、ある者はその反對に、露西亞軍が全滅したと傳へた。ある者は莫斯科の民兵が僧侶を先頭に立て、^{トライニョルイ}三山へ出掛けるのだと言ふかと思へば、又ある者はアウグスチン^(莫斯科大主教)が退去を禁じられたとか、謀叛人が捕まつたとか、百姓共が一揆を起して、避難民の財産を掠奪してゐるとか、そんな事を内證で話し合つた。しかしこれはたゞ噂だけで、その實避難する者も残つてゐる者も(それはまだフイリ會議の前だったので、莫斯科放棄の問題は決つてゐなかつたが)、みな口にくそ出さないけれど、莫斯科は必ず放棄される、だから出来るだけ早く逃げ出して、自分の財産を救はなければならぬと感じてゐた。一同は、すべてが不意に爆發し變動するに違ひない、と直覺したのである。しかし、一日まではまだ一向變化が

見えなかつた。丁度刑場へ引かれて行く罪人が、今にも直ぐ死ななければならぬと承知しながら、まだ矢張り邊りを見廻したり、帽子の被り工合を直したりするのと同じやうに、莫斯科もこれまで慣れて来た、従つて條件的な生活關係が、悉く破壊され滅されて了ふ時期の近いことを知つてゐながら、依然としていつもの生活を續けるともなく續けてゐた。

莫斯科の占領に先立つこの三日間、ロストフ一家の人々は、皆それ／＼日常生活の繁務に忙殺されてゐた。家長のイリヤ・アンドレーギッチ伯爵は絶えず町ぢうを歩き廻つて、あらゆる方面からいろんな噂を聞き集めてゐた。そして家にゐる時は出發の支度について、ごく表面的な慌ただしい指圖を下すのであつた。

伯爵夫人は品物の取片附けを監督してゐたが、誰に對しても不機嫌であつた。そして絶えず自分の傍から逃げようとする、ペーチャの後を追つかけて歩いた。ペーチャは夫人が嫉妬を感じるくらゐ、始終ナターシャと一緒に時を過してゐた。たゞソーニャが一人だけ實際方面の仕事——荷造りを指圖してゐた。けれどソーニャは近頃殊に鬱ぎ勝ちで、口もろく／＼利かなかつた。それは外でもない、公爵令嬢マリヤのことを書いたニコライの手紙を受け取つたとき、伯爵夫人が非常に喜んで、ニコライとマリヤの會ひは神の攝理に違ひないと、ソーニャの前で言つたからである。

『わたしはねえ、』と伯爵夫人は言つた。『ボルコンスキイがナターシャと婚約をした時、少しも嬉しくなかつたんですよ。だけどニコレンカと公爵令嬢との結婚は、かねてから望んでもゐたし、またさう云ふ蟲の知らせもありました。木當にさうなればい、がねえ！』

ソーニャは伯爵夫人の言ふ事を尤もだと思つた。ロストフ家の家運を挽回するたつた一つの策は、素封家の令嬢と結婚するより外にないが、それには公爵令嬢がこの上ない配偶だと感じたのである。しかし、それは彼女にとつて非常に辛いことであつた。かうした悲しみにも拘らず（或ひはこの悲しみのためかも知れないが）、ソーニャは品物の片附や荷造の指圖など、骨の折れる仕事を残らず自分で引き受けて、毎日朝から晩まで忙しさに働いた。伯爵も伯爵夫人も、何か吩咐けねばならぬことがあると、直ぐソーニャに頼むのであつた。ペーチャとナターシャはその反對に、兩親の手傳ひをしないばかりか、大抵家ぢうの者の邪魔をしてゐるさ／＼がられてゐた。殆ど日がない一日、二人のばた／＼駈け廻る音や、叫び聲や、わけもない高笑ひが家ぢうに聞えた。彼等が笑つたり面白がつたりするのは、格別笑ふやうな理由があつたからではなく、心の中が楽しく悦ばしかつたからである。それ故見るもの聞くものが、みな喜びと笑ひの原因になつたのである。ペーチャが楽しかつたのは、家を出る時子供であつた自分が、今度（皆の言ふ所に依ると）、立派な一人前の男になつて歸つたからである。また自分が我家にゐると云ふことも、急に戦闘に

参加する望みのないペーラヤ・ツェールコフを去つて、一兩日中に戦争のある莫斯科へ來たと云ふことも、彼を愉快にした原因であつた。が、何よりペーチャを浮々させたのは、いつも彼の氣分を支配してゐたナターシャが、快活だつたと云ふことである。ナターシャが快活だつたのは、餘り長く沈んでゐたためでもあれば、その悲しみの原因を想ひ出させるものが少しもないためでもあり、その上彼女が健康なためでもあつた。なほ一つ彼女が快活だつた理由は、自分を崇拜してくれる人間の存在であつた（他人の崇拜は丁度車輪に油が必要なやうに、彼女の機械を自由に運轉させるのになくてならぬ物であつた）。所が、ペーチャは彼女に夢中になつてゐた。併し二人を快活にした重なる原因は、莫斯科で戦争があると云ふことであつた。城門のすぐ傍で戦つたり、一同に武器が分配されたり、みんなが何處かへ逃げ出したり——すべて人間、殊に若い人に取つて常に喜ばしい、異常な事件が擡ると云ふことなのであつた。

一三

八月三十一日の土曜日、ロストフ家では家中まるで引つくり返つたやうであつた。戸といふ戸はみんな開け放され、家具は残らず運び出されたり置場を變へられたりして、鏡や額などはすっかり取り下されてゐた。部屋々々にはトランクが置いてあつたり、乾草や包み紙や繩が散らばつ

てゐたりした。荷物を運び出す百姓や召使は、重々しい足取りで箆木の床を歩いてゐた。庭では田舎風の荷馬車が轟めき合つてゐた。もう荷物を山のやうに積んで繩をかけたのもあれば、まだ空の儘のもあつた。

夥しい召使と、荷馬車を追つて來た百姓達の話し聲や足音が、邸の内でも外でもがや／＼入り交りながら響いてゐた。伯爵は朝から何處かへ出かけた。忙しさと騒々しさで頭を痛くした伯爵夫人は、酔で濕した布を頭へ巻き附けて、新しい長椅子部屋で横になつてゐた。ペーチャは家にゐなかつた。（彼は或る友達のところへ行つて、民兵から現役へ移る相談をしてゐたのである）。ソーニャは廣間で硝子や瀬戸物の荷造りに立ち合つてゐた。ナターシャは荒れ果てた自分の部屋へ籠つて、床の上に投げ散された着物や、リボンや、肩掛などの間に坐つたまゝ、じいつと床を見詰めながら、古い夜會服を手を持つてゐた。それは彼女が初めて彼得堡の舞踏會へ着て行つた（もう流行遅れの）服であつた。

家中の者があんなに忙しさうにしてゐるのに、自分だけ何もしないのが、ナターシャは何だか心苦しかつた。で、彼女は朝から幾度となく仕事に取り掛つてみたが、どうもその仕事は彼女の心に染まなかつた。彼女は心の底から全力を注ぐやうな事ではなければ、なんにも出来ない性分であつた。彼女は瀬戸物の荷造りをしてゐるソーニャの傍に立つて、一寸手傳ひをしようとしたが、

それも直ぐ投げ出して了つて、自分の物を片附けに居間へ引つ込んだ。初めの中は自分の着物やリボン、小間使達に分けてやるのが面白かつたが、やはり何と言つても、後に残つた物は片附けなければならぬので、彼女は辛氣臭くなつて來た。

『ドゥニャーシャ、お前これを片付けてくれる？ い、かい？ い、かい？』ドゥニャーシャが喜んで何でもすると約束したので、ナターシャは床の上に坐り込んだなり、古い夜會服を手に取つて、うつとり物思ひに沈んだ。それもこの場合彼女の興味を惹きさうなことは、まるで別な考へに耽つてゐるのであつた。ふと、隣りの女中部屋から聞える小間使達の話し聲と、急いで裏口へ出て行く一同の足音が、ナターシャを冥想の境から引き出した。ナターシャは立ち上つて窓の外を見た。往來には負傷者を載せた夥しい荷馬車が並んでゐた。

小間使も、下男も、女中頭も、乳母も、料理人も、馭者も、馬丁も、下働きの小僧も、負傷兵を見ながら門の傍に立つてゐた。

ナターシャは白い手巾ハンカチを頭に被り、その端を両手で抓みながら往來へ出た。

もと女中頭であつた老婆のマヴラ・クジミーニチナは、門の傍に立つてゐる群集から離れて、蓆の覆ひをした一つの小さな馬車に近づき、その中に臥てゐる蒼い顔をした若い將校と話をした。ナターシャは五足六足前へ出て、矢張り手巾の端を抓んだまゝ、女中頭の話聞きながら、

おづくくと立ち止つた。

『ぢや、何でございますか、莫斯科には知り合ひの方が、一人もおるでにならないのでござい
ますか？』とマヴラ・クジミーニチナは言つた。『何處かの家へお入りなすつたらお樂でせうに：
・わたくし共の所へでもいらしては如何ですね。お主人方はもう出てお了ひになりますから。』

『さあ、許可が下りますかなあ。』と將校は弱々しい聲で言つた。『あれが隊長だ：：一つ訊いて見てくれませんか。』彼はかう言ひながら、馬車の列に沿うて往來を歸つて來る、でつぶり肥つた少佐を指さした。

ナターシャは憎えたやうな眼で負傷將校の顔を覗くと、直ぐに少佐の方へつかくと進んだ。

『負傷者の方をわたし共へお泊めしてもい、でせうか？』と彼女は訊いた。

少佐は微笑を浮かべながら、帽子の目庇へ手を當てた。

『誰にご用ですか、ママゼーユ？』眼を細くしてにつこり笑ひながら、彼はかう言つた。

ナターシャは落ち着いて問を繰り返した。その顔と云ひ態度と云ひ、依然として手巾の兩端を抓んでゐるにも拘らず、如何にも眞面目くさつてゐたので、少佐はにこく笑ふのを止めて、初めしばらくの間、どのくらゐの程度まで許したらよいものかと、自問するやうに考へ込んでゐたが、やがてきつぱりと答へた。

『え、なに構ひません、い、ですとも。』と彼は言った。

ナターシャは軽く頭を下けて、急ぎ足にマヅラ・クジミーニチナの傍へ歸つて行つた。彼女は將校の顔の上へ屈み込んで、さも哀れつばい同情の色を浮べながら話をしてゐた。

『い、つて、あの方がい、つて仰しやつたわ!』とナターシャは囁いた。

將校に乗せた車はロストフ家の邸内へ入つた。やがて負傷者を載せた數十臺の荷馬車は、住民の招きに應じて、ポーヴルスカヤ街に沿うた家々の邸内へ入り、車寄に乗りつけ始めた。普通の生活条件を超越して、かういふ風に新しい人と接觸するのが、頗るナターシャの氣に入つたやうであつた。彼女はマヅラ・クジミーニチナと一緒に、出来るだけ大勢の負傷兵を、自分の邸へ入れようと骨折つた。

『けれど何にいたせ、旦那様に申し上げなければねえ。』とマヅラ・クジミーニチナは言った。

『構はないわ、構はないわ、どうせ同じことぢやないの! 一日くらゐわたし達は客間へ引つ越したつてい、のよ。わたし達の住居の方は、すっかりあの人達に貸して上げたつてい、わ。』

『まア、お嬢様、何て途方もないことを! 離れや男部屋や乳母の部屋へ入れるのだつて、一應お訊ねしなければなりませんのに。』

『ぢや、わたし訊くわ。』

ナターシャは家の中へ駈け込んだ。そして半分あいた戸口から長椅子部屋へ爪立ちで入つた。中からは酔とホフマン液の匂がぶん／＼してゐた。

『お母様、寝てらつしやるの?』

『まあ、どうして寝てなんかるられるのですか!』やつとうと／＼としかけた伯爵夫人は、眼を醒しながらかう言つた。

『お母様、ねえ、お母様、』ナターシャは母の前に跪いて、顔と顔を摺り合はすやうにしながら言つた。『悪いことをしました、勸忍して頂戴、もうしませんからね。わたしお母様を起してしましましたわね。實はね、マヅラ・クジミーニチナから頼まれたんですの。彼處に負傷した將校達が來てるんですけど、許して下さつて? だつて、あの人達は何處へもゆく處がないんですもの。ね、お母様、きつと許して下さいませう……』ナターシャは息も繼がないで早口にかう言つた。

『一體どんな將校なの? 誰をつれて來たの? 何の事だかつとも分りやしない。』と伯爵夫人は言つた。

ナターシャは笑ひ出した。伯爵夫人も矢張り弱々しい微笑を浮べた。

『わたし始めから許して下さいと思つてたの……ぢや、さう言つて來るわ。』

ナターシャは母に接吻すると、立ち上つて戸口の方へ行つた。

廣間で彼女は父に出会つた。彼は悪い知らせを持つて歸つて來たのである。

『餘りゆつくり過ぎて、飛んでもないことになつて了つたよ！』伯爵は我れともなしに忌々しさうな聲でかう言つた。『俱樂部も閉る、警察も出て行く。』

『お父様、わたし負傷した人達を家へ入れたんだけど、構はなくなつて？』とナターシャは彼に言つた。

『無論、構はないとも。』と伯爵は放心したやうに言つた。『そんなことは問題ぢやない。もう詰らん事に構つてゐないで、早く荷造りの手傳ひをして貰はなきやならん。出掛けるんだ、出掛けるんだ、明日は出かけるんだ……』

伯爵は執事や召使にも同じ命令を傳へた。やがて歸つて來たペーチャは、晝餐の時にまた新しい噂を傳へた。

彼の話によると、今日市民はクレムリンで武器を調べてゐたさうである。ラストープチンのびらには、二日の間喚き續けて召集すると書いてあつたが、明日は市民全部が武器をとつて三山トライ・ゴライに向ひ、そこで大決戦をすると云ふ命令が出たに相違ない——との事であつた。

伯爵夫人はペーチャがこんな話をしてゐる間ぢう、我子の愉快さうな熱した顔を恐しさうにおおづと眺めてゐた。もしこの戦争に出てくれるなど、たゞの一言でもペーチャに頼んだら（べ

ーチャが眼前に迫るこの戦闘を喜んでゐるのは、もうちやんと分つてゐた）、ペーチャはすぐに男子の義務とか、名譽とか、祖國とか、そんな風な意味もない、男に共通の強情なことを言ひ出して、とても反對など出來ないばかりか、却つて事をこはして了ふ、それは夫人もよく承知してゐた。それ故この戦争の始る前にこゝを立ち退き、ペーチャを自分達の保護者守衛者として、一緒につれて行くことにしようと思つたので、夫人はペーチャに何とも言はなかつた。食後、夫人は伯爵を呼び寄せて、どうぞ少しも早く、出來る事なら今夜のうちにつれて逃げて貰ひたいと、涙を流しながら哀願した。その時まで泰然たる度胸を見せてゐた伯爵夫人は、女らしい無意識な愛の技巧を以て、もし今夜立たなければ、恐しさのあまり死んで了ふかも知れない、など、言ひ出すのであつた。彼女は今もう嘘でも何でもなく、一切のものが恐しく思はれて來た。

一四

自分の娘を訪ねて來たマダム・ショツスは、肉屋街ミヤスニツカヤのある酒屋の前で見たことを話して聞かせて、伯爵夫人の恐怖を一層激しくした。ショツス夫人は歸り途にこの通りへさし掛ると、酒屋の前で醉漢の群が荒れ狂つてゐたために、どうしても通り抜けることが出來なかつた。で、彼女は辻馬車を雇つて、横町づたひに迂り路をして家へ歸つた。その時馭者が話した所によると、それ

は人民が酒屋の樽を打ち壊してゐたのである。實際さういふ命令が出たとの事であつた。

食後ロストフ家の人々は、一種の感激を伴つた忙しい心持で、荷造りや出發の準備にとりか、つた。老伯爵は突然仕事に取りかゝると、午からちう断えず庭から家へ入つたり、また反對に家から庭へ出たりしながら、急がしさうにしてゐる召使をやたらに嘸鳴りつけて、いよく彼等をまごつかすのであつた。ペーチャは庭へ出て指圖してゐた。ソーニャは伯爵の吩咐が一つ／＼矛盾してゐるために、どうしたらよいか分らないで、すつかり途方にくれて了つた。召使らは喚いたり、口論したり、がやく／＼騒いだりしながら、家の中や庭を駆け廻つてゐた。ナターシヤは何事にも熱中しやすい性質として、同じやうに突然仕事にとりかゝつた。初め彼女の干渉は疑惑の目をもつて迎へられた。みんな冗談だらうと見込んで了つて、その言ふ事を聞かうとしなかつたが、彼女が根氣よく熱心に服従を要求して、人が自分の言ふことを聞かないと、危く泣き出さないばかりであつた。かうして到頭皆にその眞面目さを信じさせて了つた。彼女が非常な努力を拂つて、自分の權威を認めさせた最初の功績は、絨氈の荷造りであつた。伯爵家には高價なゴブランや波斯織の絨氈があつた。ナターシヤが仕事に取りかゝつた時、廣間には二つの箱が蓋をしないで置いてあつた。一つの方には殆ど一ぱい瀬戸物を詰めてあるし、今一つの方には絨氈を入れてあつた。瀬戸物はまだ幾つかの卓子にうんと載せてある上に、物置からもまだ運び出されて

ゐるので、もう一つ新しい箱が入り用であつた。で、召使がその箱を取りに行つた。

『ソーニャ、待つて頂戴、みんなこの箱へ詰めて了ひませうよ。』とナターシヤは言つた。

『駄目ですよ、お嬢様、もうやつて見ましたので。』と食堂番が言つた。

『まアい、から、い、から、一寸待つておくれ。』

かう言つてナターシヤは、箱の中から紙にくるんだ鉢や皿などを、手早く取り出し始めた。

『鉢はこゝよ、絨氈の中よ。』と彼女は言つた。

『それにまた絨氈も、箱にかれこれ三杯も入れるほどありますよ。』と食堂番が言つた。

『まア、どうか待つて頂戴よ。』ナターシヤは器用に手早く選り分け始めた。『これは要らないわ。』彼女はキーエフ製の皿をさしてかう言つた。『これは——いる、これは絨氈の中だ。』と彼女は索遜製の鉢をさして言つた。

『ねえ、打つちやつて置いて頂戴、ナターシヤ。さあ、もう澤山よ。わたし達が入れるわ。』とソーニャは詰るやうに言つた。

『いやはや、お嬢様……』と執事は言つた。

けれどナターシヤは兜を脱がなかつた。品物を残らず取り出して了ふと、粗末な不斷の絨氈や餘分な食器などは、まるで持つて行く必要がないと決めて、また手早く詰めにかゝつた。何もか

も引き出されて了つた時、皆でもう一度詰め直し始めた。實際、安物や持つて行く値打のない物を、殆ど全部のけて見ると、高價な物はすつかり二つの箱へ納まつたのである。たゞ絨氈を入れた箱の蓋がきつちり閉らなかつた。もう少し何か出してもよかつたのだけれど、ナターシャはどこまでも自分の説を譲らなかつた。彼女は詰めて見たり、また入れ換へて見たり、押へついたりした。そして姉に吊り込まれて荷造りに熱中し出したベーチャと、食堂番に蓋を押へさせながら、自分でもやけ半分な努力をするのであつた。

『もう澤山よ、ナターシャ、』とソーニャは言つた。『そりやあんたの言ふ通りよ。だけど一番上の分だけ出した方がいゝわ。』

『厭よ。』一方の手で汗ばんだ顔に亂れかゝる髪をおさへ、今一方の手で絨氈を押しつけながら、ナターシャはかう叫んだ。『さア、お押し、ベーチャカ、お押し！ ワシーリッチ、うんと押して！』と彼女は叫ぶのであつた。

到頭絨氈は押し付けられて、蓋はびつたり閉つた。ナターシャは両手を拍ちながら、嬉しさの餘り甲高い聲を上げた。その眼からは涙がさつと溢れ出た。しかし、それはほんの一分間ばかりの事で、彼女は直ぐ他の仕事に取りかゝつた。一同はもうナターシャを信用するやうになつた。伯爵も、ナターリヤ・イリーニチナが自分の命令を變改したと聞いても、別に怒りはしなかつた。

召使達も、荷馬車に繩をかけてよいか悪いか、もう積むのは澤山だらうか、など、云ふやうなことを、ナターシャの所へ行つて訊くやうになつた。ナターシャの宰領のお蔭で、仕事はどんく、拂が行つた。不用な物は残されて、一番大切な物だけ一分の隙もなく荷造りされた。

しかし皆がどんなに離脱しても、夜遅くなるまで全部の荷造りは出来なかつた。伯爵夫人は寢て了つたし、伯爵も出發を朝に延して寢室へ入つた。

ソーニャとナターシャは、着物も脱かずに長椅子部屋で寢た。

この夜また一人の新しい負傷者が、ポーヴルスカヤ街を運ばれて來た。門の傍に立つてゐたマヴラ・クジミーニチナは、その車をロストフ家へ入れさせた。この負傷者は、マヴラ・クジミーニチナの想像によると、餘程身分のある人らしかつた。乗りものは四輪馬車で、前は膝掛で蓋をした上に、まだ幌まで下してあつた。馭者臺の上には馭者と並んで、品のいゝ老侍僕が腰を掛けてゐた。後ろの荷馬車には軍醫が一人と、兵卒が二人乗つてゐた。

『わたくし共へおいで下さいまし、どうぞ。ご主人方はお立ちになりますので、家ぢうがら空きでございます。』老婆は侍僕に向いてかう言つた。

『さうだなあ、』と侍僕は溜息をつきながら言つた。『とても行き着かれさうもないでなあ！ わし共も莫斯科に自分の家があるんだが、大分遠い上に、誰も住つてゐないもんだから。』

『どうかお入り下さいまし。わたし共のところには何でも充分にございますよ。どうかお入り下さいまし。』とマヴラ・クジミーニチナは言った。『何ですか、ひどくお悪いのでございますかね?』と彼女は附け足した。

侍僕は片手を振った。

『とても歸りつけさうにない! 一つお醫者に訊いて見なけりや。』侍僕は馭者臺から降りて、荷馬車に近づいた。

『よろしい。』と軍醫は言った。

侍僕はまた四輪車の方へ行つて、その中を覗き込んだが、首を二つ振つて、馬車を邸へ入れろと馭者に吩咐けると、マヴラ・クジミーニチナの傍に立ち止つた。

『あ、主イエス・クリスト様!』と彼女は言った。

マヴラ・クジミーニチナは負傷者を家の中へ入れるやうに勧めた。

『ご主人さまは何とも仰しやりはしませんよ……』と彼女は言った。

しかし階段を上るのを避ける必要があつたので、負傷者は離れの方へ運ばれて、もとショツス夫人のゐる部屋へ寝かされた。この負傷者がアンドレイ・ボルコンスキイ公爵なのであつた。

一五

莫斯科の最後の日が来た。それは晴れ々とした陽氣な秋日で、丁度日曜日であつた。いつもの日曜日と同じやうに、どの會堂でも祈禱式の知らせの鐘が鳴つてゐた。未だ誰一人として、どう云ふ運命が莫斯科を待ち受けてゐるか、まるで知らないやうであつた。

たゞ社會の状態を示す二つの指針が、莫斯科の現狀を物語つてゐた。それは外でもない、大衆即ち貧民階級と諸物價であつた。職工、下男、百姓などが、官吏、神學生、貴族などと一緒に大きな群集を作りながら、この日朝から三山^{トライゴール}へ出かけた。彼等は其處に暫く立つてゐたが、何時まで待つてもラストープチンが姿を見せないの、いよく莫斯科は明け渡されるものと確信して、群集は莫斯科ちうの酒屋や料理屋へ散つて了つた。この日の物價も矢張り市中の状態を物語つてゐた。武器、金、荷馬車、馬などの値はどんく昇つて行くのに、紙幣や都會用品の價は段々下るばかりであつた。その日の中頃には、羅紗のやうな高價な品物を、辻馬車やが半々分けの約束で運び出したり、百姓馬が一頭五百留もしたりするやうな場合さへあつた。椅子、卓、鏡、青銅^{ブロンズ}などはたゞで投げ出された。

由緒のある古いロストフ家では、かうした以前の生活條件の崩壊も、極めて微弱な現れを見せ

たに過ぎなかつた。雇人について言ふと、その夜夥しい召使の中わづか三人逃走しただけで、何一つ盗まれた物はなかつた。物價の方では、田舎から来た三十臺の荷馬車が、非常な富となつて人から羨ましがられた。中には大金出して、譲り受けを申し込む者もあつた。そればかりではなく、前の晩から九月一日の早朝へかけて、ロストフ家の中庭へは、負傷將校の従卒や下男がやつて來たり、ロストフ家やその近隣の家に落ちついた負傷者が、自分でよろしく出て來たりして、莫斯科引上げに荷馬車を貸して貰ひたいと、ロストフ家の召使に哀願するのであつた。かういふ頼みを持ち掛けられた執事は、負傷者を可哀さうとは思つたけれど、そんなことは伯爵の耳に入れる事さへ出來ないと言つて、きつぱり勿ねつけてしまつた。後に残る負傷者がどんなに氣の毒だと言つても、一臺貸したら最後、また一臺貸さない譯に行かないから、遂にはみんな残らず貸して了つて、おまけに自分達の乗用車まで取られて了ふのは目に見えてゐた。三十臺くらゐの荷馬車で、負傷者を残らず救ふのは不可能だし、かう云ふ社會的災厄の際には、わが身の上や家族のことを考へない譯に行かない——執事は主人のためにかう考へたのである。

一日の朝、ふと眼を醒したイリヤ・アンドレーギッチ伯爵は、明方にやつと寢付いた夫人の眼を醒さないやうに、そつと寢室を抜け出して、瑠璃色をした絹の寢衣のまゝ、で玄關へ出た。中庭には繩をかけた荷馬車が幾臺も並んでゐた。玄關には乗用車があつた。執事は車寄に立つて、

一人の年取つた従卒と、片手に繃帯をした蒼い顔の年若な將校と話してゐた。執事は伯爵を見るに、將校と従卒に向つて意味ありげな嚴つい顔をして、あちらへ行けと云ふ心持を知らせた。『どうだ、すつかり支度が出來たかな、ヴシーリッチ？』伯爵は自分の禿け頭を擦りながら、人の好ささうな眼附で將校と従卒を見遣つて、點頭きながらかう言つた（伯爵は新顔の人が好きなのであつた）。

『今すぐにも馬を駕けられますで、御前様。』

『いや、それは結構だ、奥さんが眼を醒したら、直ぐおさらばだ！ 皆さん何ご用です？』と彼は將校に話しかけた。『家にお宿りですかね？』

將校は傍へ寄つた。その蒼褪めた顔は不意にさつと赤くなつた。

『伯爵、まことに申し兼ねますが……どうかお願ですから……お宅の馬車の何處かに乗せて頂けないでせうか。わたしはなんにも持つてゐないですから……荷馬車でも構ひません……』

將校がまだ言ひ了らないうちに、従卒も自分の主人のために同じ事を頼んだ。

『あ、さうですか、さうですか。』と伯爵は急き込みながら言つた。『なに、わたしはもう喜んで……ヴシーリッチ、お前よく取り計つてくれ。まあ、その邊の馬車を一二臺空けてな、それからまた外にも……その……必要に應じてな……』妙に曖昧な言葉使ひで何やら吩咐けながら、

伯爵はかう言つた。

けれどその瞬間、將校の顔に現れた深い感謝の色は、伯爵の命令をすっかり裏書して了つた。伯爵は邊りを見廻した。中庭にも門の下にも離れの窓にも、負傷者や従卒の姿が見えた。彼等はみな伯爵を見ると、玄關口へじり／＼と寄つて來た。

『ご前、一寸晝廊へおいで願へませんか。あそこの繪をどう致したら宜しうございませう？』と執事が言つた。

伯爵は馬車を懇望する負傷者達の願を、拒絶しないやうにと云ふ命令を繰り返しながら、執事と一緒に家へ入つた。

『いや、仕方がない、何かおろしても構はないよ。』彼は自分の言ふことを、誰かに聞き付られはしないかと危むやうに、靜かな祕密めかしい聲でかう附け足した。

伯爵夫人は九時に眼を醒した。すると昔この人の小間使を勤めて、いま夫人のために憲兵隊長の任に當つてゐるマトリョーナ・チモフェーヴナが入つて來た。そしてマリヤ・カルロヴナも大へん怒つてゐらつしやるし、それにお嬢様の夏衣裳を残して行く譯に参りません、と昔の令嬢に報告した。どうしてシヨツス夫人が怒つてゐるのかと、伯爵夫人が色々訊ねて見た結果、シヨツス夫人のトランクが馬車から下されたことや、荷馬車が残らず繩を解かれてゐることや、荷物がど

ん／＼下されて、その代りに負傷者が載せられてゐることなどが分つた。それはつまり伯爵が氣前のさつぱりしてゐるために、負傷者を一緒に連れて行くやうに吩咐けたのであつた。伯爵夫人は良人に來て貰つてくれと命じた。

『どうしたんですの、あなた、また荷物を下してゐるさうぢやありませんか？』

『それはね、ma chère、かう云ふ譯なんだよ。お前に言はうと思つてたんだが：：ねえ、ma chère... 實はわたしの所へ一人の將校が來て、負傷者に荷馬車を少し貸して貰ひたいと言ふぢやないか。實際あんなものはたゞ損得だけの話だが、一方はまあどうだらう、後に残る人の心持にもなつて見てご覧！：：全く家の屋敷内に居るのでもあり、此方から呼び込んだのでもあり、その中には將校達もゐるんだからね：：そこで、わたしは考へたんだよ、全くね、ma chère... つまり、ma chère... 勝手に乗せたら宜からうぢやないか、急いだつて仕方がないものな。』

伯爵はいつも金の話をする時の癖で、おづ／＼とこんな事を言つた。伯爵夫人は良人のかういふ調子に慣れてゐた。それは晝廊や温室の建築とか、家庭劇場や音樂團の設置とか云ふやうな、何でも子供の財産を荒すやうな仕事を始める場合、屹度出て來る調子なのであつた。伯爵夫人はこの調子に慣れてゐたので、このおづ／＼した調子で言はれる事には、必ず反對するのを義務と考へてゐた。

彼女は例の素直な、泣き出しさうな様子をしながら良人に言った。

『ねえ、あなた、あなたは家をたゞで人手に渡すやうな事にしては了ひながら、今度はまたわたし達の—子供達の財産までみんな失くしようとなさるんですね。現にあなたはご自分で、家には道具だけで十萬留あると仰しやつたぢやありませんか。あなた、わたしは不賛成です、どこまでも不賛成です。あなたが何と仰しやつたつて厭です！ 負傷者のためには政府といふものがあります。そんな事はあの人達のすべき事ぢやありませんか。ご覧なさい、お向ひのロブーヒンさんなどでは、もう一昨日の中に塵つば一つ残さず持つて行つて了ひました。人様はかう云ふ風になさるのに、わたし達だけ馬鹿を見たぢやありませんか。何もわたしをとは言ひませんが、せめて子供達を可哀さうだと思つて下さいな。』

伯爵は両手を振つて、何も言はずに部屋を出て了つた。

『お父様、何を話してらしたの？』父の後から母の居間へ入つて来たナターシャはかう言つた。

『何でもない！ お前の知つたことぢやない！』と伯爵は腹立たしげに言つた。

『駄目よ、わたし聞いてたわ。』とナターシャは言つた。『なぜお母様は承知なさらないの？』

『お前の知つたことぢやないと言ふに！』伯爵は嗚鳴つた。
ナターシャは窓の傍へ行つて考へ込んだ。

『お父様、ベルグさんがお見えになつたわ。』彼女は窓の外を眺めながらかう言つた。

一六

ロストフ家の婿ベルグは、もうウラヂーミル勳章やアンナ勳章を頸に掛けた大佐で、矢張り第二軍團司令部第一課參謀次長と云ふ、至極暢氣で愉快な位置を占めてゐた。

彼は九月一日に軍隊から莫斯科へ来た。

莫斯科では何もすることと云つてはなかつたけれど、隊の者がみんな休暇を取つて莫斯科へ歸つては、そこで何かしてゐるのに氣が附いたので、彼も矢張り家事のために休暇を取らなければならぬ、と考へたのである。

ある公爵が持つてゐたのと寸分違はない、肉附のい、栗毛の二頭立をつけた、ちんまりとした四輪車ドローシキに乗つて、ベルグは舅の家へやつて来た。彼は中庭にある澤山の荷馬車を注意深く眺めた後、入口の階級に昇りながら、綺麗な手巾ハンカチを取り出して、一つ結び目を拵へた。(用事を忘れぬため—譯者)

ベルグは泳ぐやうな、せか／＼した足取で、玄關から客間へ駆け込んだ。そして伯爵を抱きしめて、ナターシャとソーニャの手に接吻すると、急いで「おつ母さん」の健康を尋ねた。

『こんな時に健康も何もあつたものぢやない。さあ、聞かせてくれ。』と伯爵は言つた。『軍隊

の模様はどうだ？ 退却してゐるかね、それともまだ戦争があるかね？」

『お父さん、たゞ永遠の神だけが、』とベルグは言つた。『祖國の運命を決し得るのみです。軍隊は英雄的精神に燃えてゐます。今、その、主腦者達が會議を開いてゐる所です。この先どうなるか——それは未だ分りません。しかし、お父さん、全體としてわたしはかう言ふ事が出来ます。露西亞軍が二十六日の戦で顯した、いや發揮した（と彼は言ひ直した）英雄的精神、その古武士的精神は、どんな言葉でも適切に言ひ現すことが出来ません……全くのところ、お父さん（彼は自分の居合はした席でその話をした、或る將官の眞似をして胸をどんと打つた。けれど、其の打ち方が少し遅かつた。つまり、「露西亞軍」と云ふ時に、打たなければならなかつたのである）、正直なところをお話ししますが、わたし達指揮官は兵士らを追ひ立てる必要がないばかりか、あの、あの……さうです、あの男々しい古武士的功名心を、やつとの事で抑へつけたくらゐなのです。』と彼は早口に言つた。『バルクライ・ド・トリー將軍などは自分の命を惜まずに、何處でも軍の先頭に立つてをられました、全くですよ。我が軍團は山の斜面に配備されたんですからね、え、まあどうです！』

こゝでベルグは、この間ぢうから聞き込んだ様々な話を、憶えてゐるだけ残らず物語つた。ナターシヤはまるでベルグの顔に、或る問題の解決を求めでもするやうに、じつと眼を放さずに見

詰めてゐた。その視線は彼を少からずまごつかせた。

『全く露西亞軍人の現した勇氣は、到底想像もつかないくらいで、實に讚嘆に價しますよ！』ベルグは、ナターシヤを振り返りながら、丁度結構々々とも云ふやうに、その執拗な視線に微笑を以て答へながらかう言つた。『露西亞は莫斯科にあらずして、その子等の心中にあり！ さうぢやありませんか、お父さん？』とベルグは言つた。

この時長椅子部屋から伯爵夫人が、疲れた不満らしい様子で入つて來た。ベルグは急いで跳び上りさま、夫人の手に接吻してその健康を尋ね、小首を捻つて同情を表しながら、彼女の傍に立ち止つた。

『いや、おつ母さん、全く今は露西亞人一同にとつて、苦しいつらい時ですよ。しかし何だつてそんなに心配なさるのです？ まだ避難なさる餘裕はありますよ……』

『みんな何をしてるのか分りやしない。』伯爵夫人は良人に向いてかう言つた。『今聞けば、まだ何一つ支度が出来てゐないさうですね。誰か指圖する者がなくちや仕様がないぢやありませんか。かうなつて見ると、ミーチェンカが惜しくなりますよ。こんなことぢや限が有りません！』伯爵は何か言はうとしたが、我慢したらしかつた。彼は椅子から立ち上つて、戸口の方へ近づいた。

ベルグはこの時鼻でもかまうとするやうに手巾を取り出した。そして例の結び目を見ながら、沈んだ様子で意味ありげに頭を振つて考へ込んだ。

『時に、お父さん、一つ折り返つてお願ひがあるんですが。』と彼は言つた。

『うむ?』伯爵は立ち止りながら言つた。

『今ユスーボフ家の側を通りかゝりますとね、』とベルグは笑ひながら言つた。『知り合の執事が駆け出して、「何か買つて頂けないでせうか?」と頼みます。わたしはまあ一寸もの好きに入つて見ました。ところが、中に小箆筒と化粧臺があるぢやありませんか。ご存じでせうが、エールシカが前からそれを欲しがつて、よくわたしと喧嘩したもんです(ベルグは小箆筒と化粧臺のことを言ひ出すと、知らず識らず我が家の完美した設備に對する、喜びの調子に移つて来た)。そりやあ實に立派なものですよ!——英吉利式の秘密錠が附いてるましてね、ひとりで抽斗が出るやうになつてゐるんですよ、ご存知でせう? エーロチカが疾うから欲しがつてゐるものですから、一つあれを吃驚させてやらうと思ふんです。見れば、お宅の中庭には大勢百姓がゐるやうですが、お願ひですから、一人だけ貸して頂けないでせうか。駄賃は充分やりますし、それに……』

伯爵は顔を擧めて、くつくつと喉を鳴らし始めた。

『奥さんに訊いて見なさい。わしは指圖をしてをらんから。』

『もしご面倒でしたら、どうかご心配なく。』とベルグは言つた。『たゞ、エールシカに是非買つてやりたいと思つたものですから。』

『あ、みんな勝手に何處かへ行つて了へ、行つて了へ、行つて了へ……』と老伯爵は叫んだ。『あ、目が廻る。』

かう言つて彼は部屋を出てしまつた。伯爵夫人は泣き出した。

『いや、おつ母さん、實に苦しい時ですよ!』とベルグは言つた。

ナターシャは父と一緒に出て行つた。そして何やら一生懸命思ひめぐらしてゐるやうな風付で、始めは父の後からついて行つたが、やがて階下へ駆けおりた。

入口の階段にはペーチャが立つて、莫斯科から出て行く召使の武装を指圖してゐた。庭には依然として荷物を積んだ澤山の馬車が立つてゐた。二臺の車はもう繩を解かれて、その中の一臺には一人の將校が、從卒に助けられながら匍ひ上つてゐた。

『姉さん、一體どう云ふ譯か知つてる?』とペーチャはナターシャに訊いた。

ナターシャはペーチャの問が、「どうしてお父さんとお母さんが喧嘩をしたのか?」と言ふ意味だと悟つたけれど、何とも返事をしなかつた。

『それはね、お父さんが荷馬車をすつかり負傷兵に貸さうとなすつたからだよ。』とペーチャは言った。『ヴシーリッチから聞いたよ。僕の考へでは……』

『わたしの考へではね、』ナターシャは毒々しい顔をペーチャの方へ向けながら、突然ほとんど喚くやうにかう言った。『わたしの考へではね、それはほんとに卑劣な、ほんとに穢らばしい、ほんとに……何と言つてい、か分らないくらゐだわ。一體わたし達は獨逸人かなんぞなの……』彼女の喉は引つ吊るやうなしやくり泣きに慄へ出した。彼女はもしや心が弱つて、怵へ怵へた鬱勃たる義憤を、無駄に吐き出しはせぬかと恐れるやうに、くるりと向きを變へて、まつしぐらに階段を駆け上つた。

ベルグは伯爵夫人の傍に腰を掛けて、さも親類らしく恭しい顔付で慰めてゐるし、伯爵は手に煙管パイプを持つて部屋の中を歩き廻つてゐた。その時不意にナターシャが憎惡に顔を醜くしながら、嵐のやうに部屋の中へ飛び込むなり、大股に母の傍へ近寄つた。

『あれはまあ何と云ふ卑劣なことせう！ 何と云ふ厭らしいことせう！』と彼女は嗚り出した。『あんなことをお母様がお吩咐になるなんて、そんな筈はないわ。』

ベルグと伯爵夫人は不思議さうに、呆氣にとられて彼女を見やつた。伯爵は耳を傾けながら、窓の傍に足を止めた。

『お母様、あんな事はいけません、まあ、中庭の様子をご覽なさい！』と彼女は叫んだ。『あの人達は置き去りになるぢやありませんか！……』

『お前どうしたの？ あの人達つて誰？ お前どうしようと言ふの？』

『誰つて、負傷兵ですわ！ あんな事はいけません、お母様、あんなことをするつて法はないわ……い、え、お母様、ねえ、あれは間違つてゐます。ご免なさいね、後生だから、ねえ……お母様、一體わたし達が持つて行く物なんか何でせう。まあ、一寸中庭を見てご覽なさい……お母様！……あんな事つてありやしないわ！……』

伯爵は窓の傍に立つたまゝ、顔をこちらへ向けずにナターシャの言葉を聞いてゐた。と、不意に鼻を鳴らせて、顔を窓へよせた。

伯爵夫人は娘を見やつた。そして母のために恥ぢしめられたナターシャの顔を見、その昂奮を見て取ると、なぜ良人が今自分の方を見ないかと言ふ譯が分つた。夫人は途方に暮れたやうな顔付で邊りを見廻した。

『あ、あ、何とでも好きなやうにするがい、さ！ 一體わたしが誰かの邪魔をすることもお言ひなのかえ！』まだ急に兜を脱がうとしないで、夫人はかう言つた。

『お母様、本當にご免なさいね！……』

けれど夫人は娘を突きつけて、伯爵の方へ近づいた。

『Mon cher, あなたい、やうに指圖して下さい……わたしかう云ふことは分りませんから。』
彼女は悪かつたと云ふやうに、眼を落しながらかう言つた。

『負うた子に……教へられたのだ……』伯爵は嬉し涙の隙からかう言つて、夫人を抱きしめた。
夫人は自分の恥ぢしめられた顔を、良人の胸に隠す事が出来るのを喜んだ。

『お父様、お母様！ 指圖してもよくつて？ よくつて……』とナターシャは訊いた。『でもね、どうしてもなくてならないものは、矢張りみんな持つて行きますわ……』とナターシャは言つた。

伯爵は點頭いて見せた。ナターシャはまるで鬼ごつこの時のやうに、素速く廣間を走り抜けて玄關へ行くと、そこから階段を庭へ駆け下りた。

召使達はナターシャの周りに集つた。そして伯爵自身が夫人の名義で、荷馬車を残らず負傷者に渡し、トランクを物置へ戻せといふ命令を裏書するまで、誰一人ナターシャの奇怪な吩咐けを本當にしなかつた。併し一旦合點が行くと、召使達は喜んで忙しげに新しい仕事に取り掛つた。もう皆はそれを奇怪に思はないばかりか、却つてそれよりほか仕方がないやうに感じられた、丁度十五分前に、負傷者を置き去りにして、荷物を持つて行くのが奇怪に感じられないどころか、

それよりほか仕方がないやうに思はれたのと同じ工合に。

家ぢうの者は誰も彼も、始めからかうしなかつた罪亡ぼしのやうに、負傷者を車へ載せると云ふ新しい仕事に威勢よく取りかゝつた。負傷者達は自分の部屋から匂ひ出して、蒼褪めた顔に喜色を湛へながら馬車を取り巻いた。車があると云ふ噂は近隣の家々にまで傳つて、他のうちからも負傷者がロストフ家の庭へ集つて來た。多くの負傷者は、どうか荷物を下さないでくれ、たゞその上に乗せて貰へばい、からと頼んだ。しかし一旦始められた荷卸しは、もう止める譯に行かなかつた。今となつてはみんな下すのも、半分おろすのも同じことであつた。前夜一生懸命に荷造りした食器類や、青銅置物や、額や、鏡などの入つたトランクが、取り除けられもせず庭にごろごろしてゐるが、人々は未だあれやこれやと下されるだけ下して、少しでも餘分に馬車を負傷者に譲らうと骨折つた。

『まだ四人くらゐ載せられる。』と執事は言つた。『わしの荷馬車も渡して了はう。さうでもない、あれだけの人数をどうして……？』

『ぢや、わたしの衣裳馬車もおやり。』と伯爵夫人は言つた。『ドゥニャーシャはわたしと一緒に箱馬車に乗るからい、よ。』

そこでまた衣裳馬車も空けて、それを二軒おいて隣の負傷者に届けてやつた。家の人も召使も

みんな樂しげに生き／＼としてゐた。ナターシャはもう長く味はつたことのない、勝ち誇つたやうな幸福感に活氣づいた。

『これを何處へ縛りつけませう？』箱馬車の後ろにある狭い踏板に、トランクを一つ落ちつけようと苦心しながら召使はかう言つた。『せめて一臺だけでも、荷馬車を残して置かなければなりませんまい。』

『一體それには何が入つてゐるの？』とナターシャは訊いた。

『御前様のご本で。』

『残してお置き。ヴシーリッチが片附けるから。そんなものは要りやしない。』
輕裝馬車は人でぎつしりだつたので、ペーチャを何處へ乗せたらいい、か分らなかつた。

『馭者臺へ行つたらいいわ。ねえ、ペーチャ、馭者臺でもいい、わね？』とナターシャは叫んだ。

ソーニャも矢張りひつきりなしに働いてゐた。けれど彼女の活動の目的は、ナターシャの目的と正反對の方向を指さしてゐた。彼女は残さなければならぬ品物を片附けたり、伯爵夫人の希望によつてそれを書き留めたりして、出来るだけ餘計に持つて行かうと苦心するのであつた。

一七

一時過ぎには、すつかり荷物を積んで用意の出來たロストフ家の馬車が四臺、車寄せの傍に立つてゐた。負傷兵を載せた荷馬車は一臺一臺と中庭から出て行つた。

アンドレイ公爵を乗せた幌馬車が、玄關の傍を通り過ぎる時、ふとソーニャはそれに注意を惹かれた。彼女は小間使と二人で、車寄せの傍に控へた、大きな、背の高い夫人用の箱馬車の中で、夫人のために座席を整へてゐたのである。

『あれは誰の馬車？』ソーニャは箱馬車の窓から身を乗り出してかう訊いた。

『あら、お嬢様、あなたご存じなかつたのでございますか？』と小間使は答へた。『公爵がお怪我をなすつたんです。昨夜こちらへお泊りになつて、これからわたし達と一緒ににお出かけの所でございます。』

『一體どなたなの？ お名前は何と言ふの？』

『元こちらのお許婚だつた方でございます。ボルコンスキイ公爵でゐらつしやいます！』と小間使は吐息をつきながら答へた。『何でもご危篤なんださうでしてね。』

ソーニャは馬車から飛び出して、伯爵夫人の所へ走つて行つた。もう道中着に着換へて、襟巻を纏ひ帽子を被つた伯爵夫人は、さも疲れたやうに客間の中を歩き廻つてゐた。彼女は扉を閉め切つて鹿島立ちの祈りをするために、家族一同を待つてゐるのであつた。ナターシャは部屋に

なかつた。

『お母様、』とソーニャは言つた。『アンドレイ公爵が此處にゐらつしやいますのよ。負傷してね、ご危篤なんですつて。これからわたし達と一緒ににお出かけになるところですの。』

伯爵夫人は憎えたやうに眼を開いた。そしてソーニャの手を取つて後ろを振り返りながら、

『ナターシヤは？』と言つた。

ソーニャにとつても伯爵夫人にとつても、この報知は最初の一瞬間、たゞ一つの意味しか持つてゐなかつた。二人ともナターシヤの性質を知つてゐたので、この報知を聞いたとき、ナターシヤはどうするだらうと云ふ恐怖が、會て愛してゐたアンドレイ公爵に對する同情を、二人の心から揉み消したのである。

『ナターシヤはまだ知らないんですけど、何分あの方は、わたし達と一緒においでなさるんですからねえ。』とソーニャは言つた。

『お前何と言つたの、危篤だつて？』

ソーニャは點頭いた。

伯爵夫人はソーニャを抱いて泣き出した。

「主の路は究め難し！」これまで人々の眼から隠されてゐた全能の手が、今すべて事々に現れ

始めたのを感じながら、伯爵夫人はかう考へた。

『さア、お母様、すつかり支度が出来ましたわ。何してらつしやるの？』ナターシヤは生き生きした顔附で、部屋へ駆け込みながらかう訊いた。

『何でもないよ。』と伯爵夫人は言つた。『支度が出来たら立ちませう。』

伯爵夫人は手提袋リヂキユルを覗き込んで、取り亂した顔を隠さうとした。ソーニャはナターシヤを抱いて接吻した。

ナターシヤは不思議さうにソーニャを見上げた。

『どうしたの？何かあつたの？』

『何でも……ないのよ……』

『何かわたしのためによつばど悪いことなんでせう？一體何なのよう？』敏感なナターシヤはかう訊いた。

ソーニャは溜息をついただけで、何とも答へなかつた。伯爵と、ペーチャと、ショツス夫人と、マヴラ・クジミーニチナと、ヴシーリッチが客間へ入つて來た。それから扉ドを閉めて、一同膝を突いた。みんな無言のまゝ、互に見向きもせず、暫くじつと跪いてゐた。

まづ一番に伯爵が立ち上つた。そして大きく溜息をつきながら、聖像に向つて十字を切つた。

一同はこれに倣つた。つぎに伯爵は、莫斯科に残ること、なつたマヴラと、ヴシーリッチを抱きしめた。そして二人が主人の手を取つてその肩に接吻した時、伯爵は何か曖昧な調子で優しい慰めるやうな事を言ひながら、二人の脊中を軽く叩いた。伯爵夫人は聖像部屋へ立ち去つた。ソニーヤが行つて見ると、夫人は壁の上にあちこち疎らに残つてゐる聖像の前に跪いてゐた（家代々の言ひ傳へで一番大切にされてゐる聖像は、みんな持つて行くことになつた）。

立關でも中庭でも、供に立つ召使はペーチャから渡された匕首や劍を持ち、ズボンや長靴の中へたくし込み、革帶や紐で腰を固く締め込んで、居残る人達と別れの言葉を交してゐた。

いつも出發間際にはよくある事だが、忘れた物や入れ違へた物が澤山あつた。で、二人の従者は開け放した馬車の扉と階段の兩側に立つた儘、伯爵夫人を馬車に扶け乗せようと、長いあひだ空しく待つてゐた。そのまに枕や包みを持つた小間使達が、家の中から箱馬車や幌馬車や二輪馬車の方へ走つて來たり、また家の中へ駆け込んだりしてゐた。

『一生の中にみんな忘れて了ふんだらう！』と伯爵夫人は言つた。『わたしがそんな風に坐れないつてことは、お前も承知してゐる筈ぢやないか。』

ドゥニャーシャは詰るやうな表情を顔に浮べて、齒を喰ひしぼりながら、何とも返事をしないで、箱馬車の中へ飛び込んでクツションを直した。

『あゝ、あの連中にも困つたものだ！』と伯爵は頭を振りながら言つた。

伯爵夫人が安心して身を托す事の出来る、たつた一人の馭者エフイム老人は、馭者臺の上に高々と腰を掛けたまゝ、後ろで何をしてゐようと振り向いても見なかつた。彼は三十年來の經驗で、『さアやれ！』といふ聲のかゝるまでにはまだく間がある、又たとへ聲がかつても、また二度くらの車を止めて忘れ物を取りにやる、それからもう一度呼び止めて、今度は伯爵夫人が自分で窓から顔を覗けながら、下り坂に用心してくれと、拜まぬばかりにして頼むに相違ない——かう云ふ事をよく知り抜いてゐた。で、彼は自分の馬より（殊に足下をとんく蹴つたり、轡をがちやく／＼嚼んだりする、左わきの「鷹」と云ふ赤馬より）ずつと氣長に成行きを待つてゐた。やうやく一同が席に落ちついた。階段は引き上げて馬車の中へ納められ、扉もばたんと閉つた。それから手箱も取りにやられるし、伯爵夫人も頭を突き出して、言ふべき事を言つて了つた。その時エフイムは悠々と頭から帽子をとつて、十字を切り始めた。控へ馭者やその他の召使もみんなこれに倣つた。『さア、やれ！』エフイムは帽子を被つてかう言つた。『そら、引いた！』控へ馭者は手綱を引いた。右側の馬が首環へ肩をしつかり當てがつた。高いばねがみし／＼と鳴つて車臺が搖れた。一人の従僕は動いてゐる馬車の馭者臺へ飛び乗つた。中庭からでこぼこした車道へ出る時、馬車がごとんと跳り上つた。他の馬車も皆それと同じやうにごとんと跳り上つた。